大洞BC式に固有の「入組三叉文高坏」について

小　林　圭　一

1　はじめに

縄文時代晩期前葉大洞BC式期の宮城県北部には、非常に特徴的な台付浅鉢が分布している。この浅鉢は、口縁部の入組三叉文の文様と、装飾的な高台に特徴付けられており、太くて高い脚部が付されることから、須藤隆氏によって「高坏（C$_2$類型）」又は「台付鉢C$_2$類型」と呼称され、北上川下流域及び迫川・江合川・鳴瀬川流域の湖沼地帯（仙北湖沼地帯）に、限定的な分布を示すことが指摘されている（須藤1984）。

「高坏（C$_2$類型）」は、須藤氏を中心とする東北大学文学部考古学研究室（当時）によって調査された、宮城県大崎市（旧田尻町）中沢目貝塚の晩期２期（大洞BC式期）の土器群を構成する器種の一類型である（図１－３）。同土器群には、大洞B２式に特徴的な入組三叉文と、同BC式に固有の羊歯状文が併存することが指摘されており、特に「高坏（C$_2$類型）」は羊歯状文施文の土器を主体とした層準から出土し、口縁部に入組三叉文が施されることから、芹沢長介氏によって設定された「雨滝式」（芹沢1960）を表徴する資料と位置付けられている（須藤 前掲）。

筆者は、大洞B式と同BC式を統括する「雨滝式」を否定的に受け止めている。しかし装飾意匠としての入組三叉文と羊歯状文が、ある時期併存の関係にあったことは疑いなく、従前の大洞B式と同BC式との過渡的な型式として、大洞BC１式を積極的に評価する立場にある（小林2005a）。即ち装飾意匠としての羊歯状文が確立し、入組三叉文が一部併存する時期が、大洞BC１式に相当すると考えている。上記の理解に立つならば、「高坏（C$_2$類型）」も細分される公算が高く、生成・変遷・消滅の過程が看取されるものと予察される。

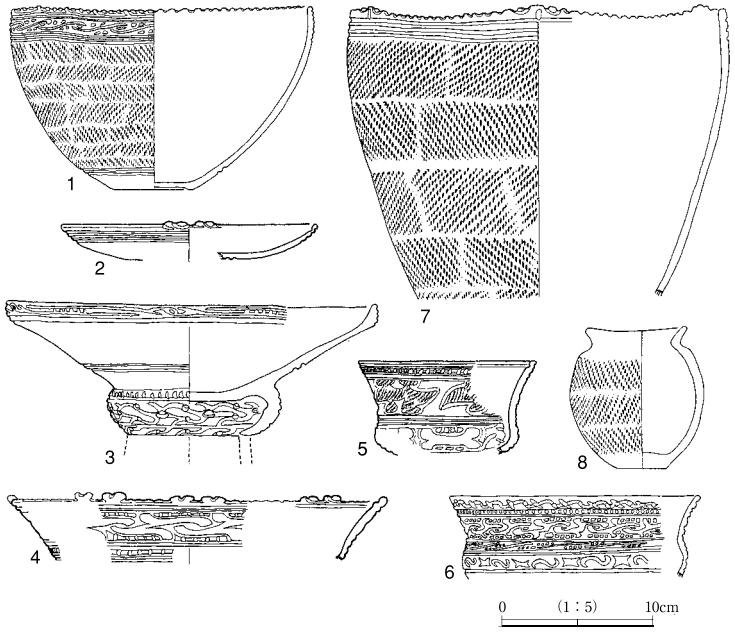
本稿では、大洞BC式に固有の「高坏（C$_2$類型）」の消長について、型式学的検討を加えることを第一義としたい。そして須藤隆氏が指摘した限られた地域内で、当該土器を含む強い独自性を保っていた器種類型を明確にすることで、晩期前葉における東北中部[1]の地域相にも言及してみたい。僅か一時期の考古学的単元を検討するに過ぎないが、複雑さに満ちた亀ヶ岡文化を理解するには、このような基礎的作業を積み重ねることが肝要と考えている。

なお、須藤氏によって「高坏（C$_2$類型）」又は「台付鉢C$_2$類型」に分類された台付浅鉢について、口縁部に展開した文様の特徴から、以下では表題の通り「入組三叉文高坏」（須藤2003：５頁）と呼称する[2]。

2　「仙北湖沼地帯」の概要

先ずは、「入組三叉文高坏」が限定的に分布する「仙北湖沼地帯」について、概観してみたい。

A　地理的様相



1.羊歯状文鉢，2.Ⅲ，3.入組三叉文高坏，4.Z字文装飾浅鉢，5.彫去磨消雲形文と羊歯状文d4類装飾鉢，
6.羊歯状文・Z字文・入組三叉文装飾鉢，7.平行線文装飾深鉢（Ⅱ群土器の典型），8.壺

図1　宮城県中沢目貝塚2群土器(晩期2期)の器種構成と装飾意匠(須藤2003)

「仙北湖沼地帯」は、北上川とその支流である迫川･江合川、そして直接石巻湾に注ぐ鳴瀬川が形成した、宮城県北部に展開する湖沼地帯の通称で、「仙北平野」とも呼ばれている（小池ほか編2005）。

岩手県北部に水源を発する北上川は、奥羽脊梁山脈と北上山地との間の縦谷である北上盆地（北上低地帯）を約90㎞ 南下する。その後南縁を限る丘陵地（磐井丘陵）を掘り込んだ約20㎞ の狭窄部（狐禅寺峡谷）を経て、石巻平野の最奥部へと流入し、平野の東縁を限る北上山地の直下を流れ、途上の登米市津山町柳津において、新・旧の北上川に分流する（図２・３）。

新北上川は、山地部をほぼ直線状に南流し、宮城県石巻市（旧河北町）飯野川付近から東に折れ、南三陸沿岸の追波湾に注ぐ。一方**旧北上川**は、平野のほぼ中央で迫川、更に下流で大崎平野を流下した江合川を合流させ、屈曲を繰り返しながら石巻湾へと注ぐ。

北上川と迫川が合流する沖積平野は、**石巻平野**（松本1984･2000）又は**北上川下流沖積低地**（伊藤1999）と呼称されている。石巻平野は北上川下流域に形成された、南北約45㎞、東西約10～20㎞ の広大且つ低湿な平野で、極めて低平で排水不良のため、その流域には広大な氾濫原が形成され、多数の湖沼地が存していた。しかし現在では、干拓や排水工事が急速に進行して、水田地帯へと変貌を遂げており、本来からは懸け離れた景観と化している。

平野の東縁は、北上山地へ連なる海抜300～500ｍの起伏の大きな山地で限られ、また平野の西・北縁部の輪郭線は複雑に入り組み、海抜100～200ｍの丘陵地で限られており、平野内部にも低い丘陵地が島状に分布している。丘陵地の周囲には、大小の湖沼が数多く点在しており、中でも北部に位置する伊豆沼や長沼は、秋季から冬季にかけて、ガン、カモ、白鳥等の渡り鳥が多数飛来することで知られている。

また、鳴瀬川及び江合川の中・下流部に形成された沖積平野は、**大崎平野**と呼称されている（松本 1984）。大崎平野は、江合川と鳴瀬川に沿う東西約35㎞ の部分と、吉田川に沿う東西約25㎞ の部分からなっており、その間には大松沢丘陵が西から東に張り出している。平野の周囲は海抜100～200ｍの丘陵が取り囲み、盆地的景観を呈しており、江合川及び鳴瀬川の狭い河谷を通して石巻平野に連続している（図２）。平野面は石巻平野と同様に低平な低湿地となっており、自然堤防の発達が著しく、後背湿地が広く展開し、吉田川沿いには嘗て品井沼という湖沼地が広がっていた。

上記したように仙北湖沼地帯と呼ばれる沖積地は、石巻平野と大崎平野とに区分されており、仙北湖沼地帯が地形区分として、一般的な呼称とは認め難いようである。しかし石巻平野の中央部から内陸部にかけた地域と大崎平野を一つの考古学的単元と見た場合、低湿な地形的特徴を表徴した好適な呼称となっており、本稿では先学に準拠したい[3)]。

B　「仙北湖沼地帯」の晩期貝塚の様相

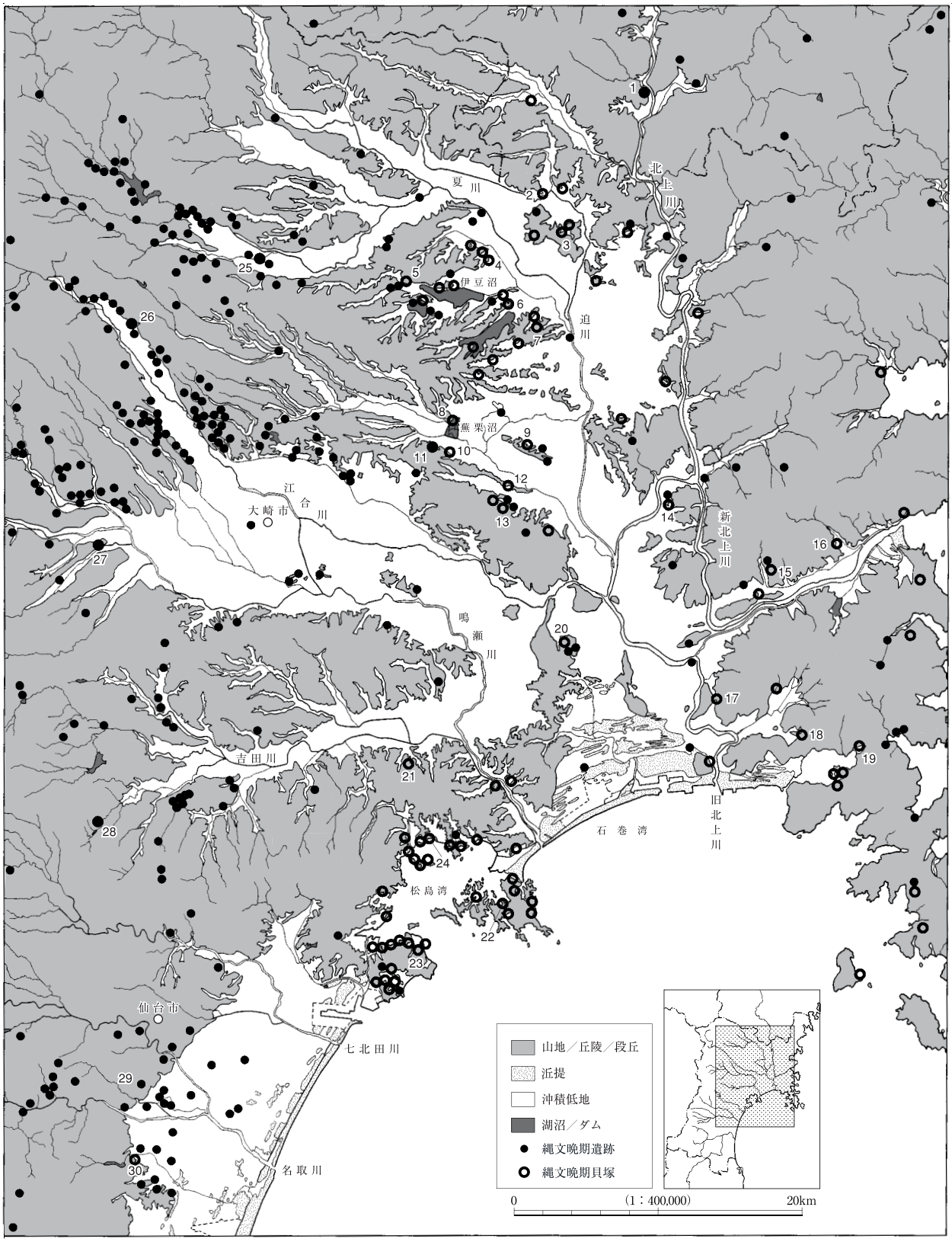
仙北湖沼地帯の丘陵上には、80ヶ所を超す縄文時代の貝塚が分布している（須藤編1984）。多くは淡水性貝類を主体とした主淡貝塚で、直径20ｍ程度の小規模貝塚が殆どである。しかし縄文早期末葉～前期の貝塚には、鹹水性貝類で構成された比較的規模の大きな貝塚も存しており、海退の進む縄文中期以降は、淡水性貝類を主体とした貝塚が形成されるようになり、後期後葉以降一層の増加が認められる[4)]。

（１）「仙北湖沼地帯」の貝塚の分布

仙北湖沼地帯の貝塚は、湖沼・沖積地周辺の丘陵に一様に分布するのではなく、幾つかの纏まりとして捉えられる。筆者が渉猟した該域（旧北上川と迫川の合流点より上流）の晩期の貝塚は、33ヶ所を数える（図３）。

夏川流域　迫川の支流である夏川は、磐井丘陵内に水源を発し、湖沼地帯北限の岩手・宮城県境を流下し、登米市中田町石森付近で迫川と合流する。この流域には後･晩期の多数の人骨が出土した貝鳥貝塚や白浜貝塚､夏川を挟んだ対岸の独立丘陵（石越丘陵）には、入組三叉文高坏を多数出土した富崎貝塚や田上貝塚等が位置している。

伊豆沼・長沼周辺　湖沼地帯北部の伊豆沼・長沼周辺は、特に貝塚が密集した地域である。晩期の貝塚では、伊豆沼・内沼近辺に嘉倉・敷味・館・貝殻・唐木崎貝塚等が、また長沼近辺に倉崎・大多古・平貝貝塚等が位置している。館貝塚では合葬２例を含む人骨５体の検出をはじめ、入組三叉文高坏を含む後・晩期の遺物（宝ヶ峯式～大洞A'式）が多数出土しており、敷味・倉崎・大多古の各貝塚では、入組三叉文高坏が出土している。また



1:中神遺跡、 2:貝鳥貝塚、 3:富崎貝塚、 4:館貝塚、 5:嘉倉貝塚、 6:倉崎貝塚、 7:大多古貝塚、 8:長者原貝塚、 9:網場貝塚、10:中沢目貝塚、11:恵比須田遺跡、12:長根貝塚、13:ツナギの沢貝塚、14:深山貝塚、15:皿貝貝塚、16:泉沢貝塚、17:南境貝塚、18:沼津貝塚、19:尾田峯貝塚、20:宝ヶ峯遺跡、21:永根貝塚、22:里浜貝塚、23:二月田貝塚、24:西ノ浜貝塚、25:山王囲遺跡、26:根岸遺跡、27:香ノ木遺跡、28:摺萩遺跡、29:芦ノ口遺跡、30:金剛寺貝塚

図2　宮城県北半の縄文晩期遺跡分布図



図3　北上川下流域の縄文晩期遺跡分布図

貝塚は形成されていないが、内沼北岸に位置する砂子崎遺跡でも、入組三叉文高坏の略完形資料（図７－２）が出土している。

蕪栗沼周辺　湖沼地帯中央部の蕪栗沼周辺の丘陵には、晩期の貝塚では中沢目・長根・長者原・網場・ツナギの沢貝塚等が、また貝塚以外では遮光器土偶で著名な恵比須田遺跡が位置している。嘗て蕪栗沼は東西６㎞、南北４㎞に及ぶ広大な沼沢地であったが、1940年代以降の迫川の大規模な河川改修によって、水田地帯へと変貌を遂げており、現在では水田地帯の中央に周囲１㎞程の遊水池として残されているに過ぎない（須藤1992a）。

中沢目貝塚は、後期中葉～晩期終末にかけて営まれた蕪栗沼に面した貝塚で、三つの地点に貝塚が形成されている。そのうち遺跡中央部のＡ貝塚は、貝層の広がりが径18m程度と小規模であるが、貝層の厚さは1.5mにも及び、後期後葉～大洞Ｃ１式の遺物を豊富に包含しており、付近の尾根上の平坦地では、後期後葉と晩期中葉の竪穴住居跡が３棟検出されている（図16）。Ａ貝塚の西方130mにあるＢ貝塚は、熊野堂貝塚とも呼ばれ、浅い谷を挟んで北側の支丘上に対峙しているが、両貝塚は時期的に併存していたと推測されている。またＣ貝塚は、Ａ貝塚の東方100mに形成された大洞Ｃ１式の地点貝塚である（須藤ほか1995：17頁）。

中沢目貝塚の北西方約１㎞の同一丘陵（大貫丘陵）には、大洞BC２式の大型遮光器土偶（1943年採集、1981年重要文化財指定：図４－３）を出土した恵比須田遺跡が位置している。旧迫川を介して対岸の独立丘陵に位置する網場貝塚（中沢目貝塚の東方約5.5㎞）でも、同期の遮光器土偶（図４－２）や大洞Ｃ１式？の大型岩版（1961年重要文化財指定）等の優品が出土している。

中沢目貝塚の南東方約4.5㎞、大貫丘陵から伸びた支丘（長根丘陵）には、長根貝塚が立地している。同貝塚は東西300m、南北250mに及ぶ大規模な馬蹄形貝塚（伊東・藤沼・須藤ほか1969）であるが、後期末葉～晩期前半の貝層は、径20m程度の小規模であったと指摘されている[5)]。長根貝塚の南方の沖積地には、嘗て鹿飼沼と呼ばれた沼沢地が広がっていたが、その南岸の篦岳丘陵に位置するツナギの沢貝塚（長根貝塚の南方約1.5㎞）では、後～晩期の竪穴住居跡13棟と遺物包含層が検出されている（福山2001・04）。

北上川河口付近　北上川河口付近は、旧北上川と迫川との合流点よりも下流に相当し、北上川の長大な自然堤防及びこれによって閉塞された広大な低湿地帯と、４列の浜堤列が発達した臨海部から成り立っている（松本1996・2000）。

旧北上川と迫川の合流点付近には、ヤマトシジミを主体とした後・晩期の深山貝塚が位置している。同貝塚の内容から、この低湿地帯が汽水域であったと推察され、後・晩期の当該域は、主淡貝塚で構成された仙北湖沼地帯とは、やや地理的環境を異にしていたことが指摘され

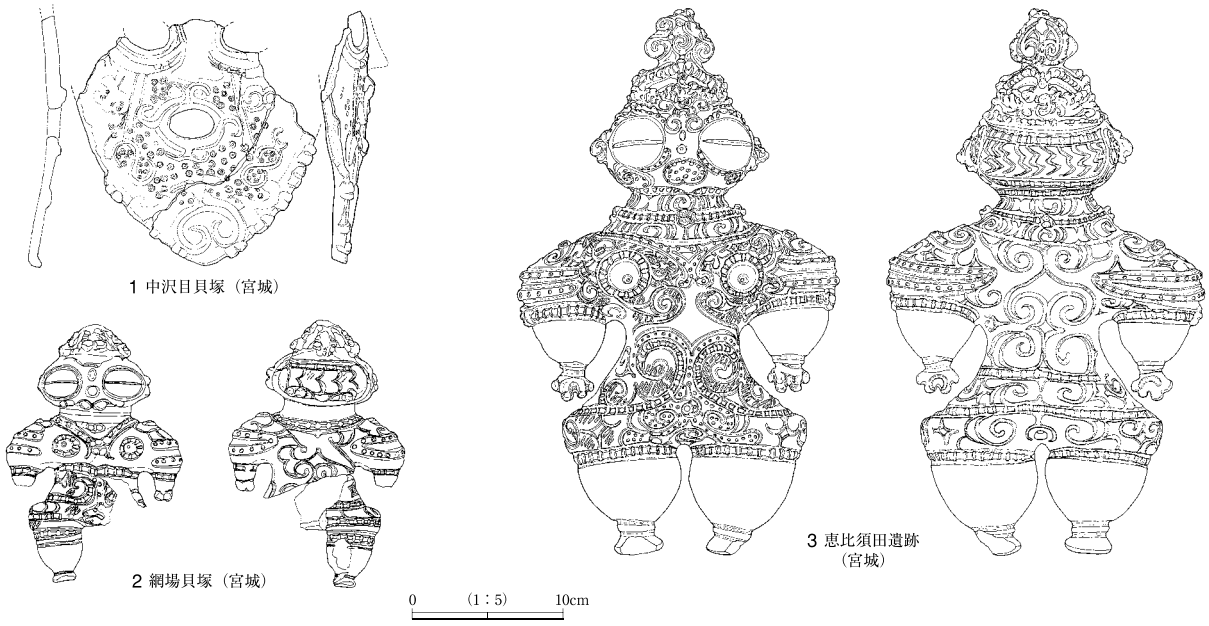


図4　仙北湖沼地帯出土の土製仮面と遮光器土偶（大洞BC2式期）

よう。

旧北上川左岸の臨海部の丘陵には、南境・尾田峯・沼津等の著名貝塚、やや内湾の北上川右岸の丘陵には、後期の標識遺跡である宝ヶ峯遺跡が位置している。また新北上川の河口付近には、大洞C１式を主体とした皿貝貝塚（須藤1992a、氷見1997）や、同期の大型遮光器土偶を出土した泉沢貝塚（岡ほか2005）が位置している。皿貝貝塚を除くと、いずれも鹹水・汽水性貝類を主体とした比較的規模の大きな貝塚や遺跡であり、仙北湖沼地帯とは別段に扱うべき貝塚群となっている。

大崎平野　江合川と鳴瀬川の流域である大崎平野には、後・晩期の貝塚が非常に少ない。該域の丘陵に位置する貝塚の多くは、古石巻湾の海進が進んだ早期末葉～前期初頭にかけて形成された主鹹貝塚[6]であり、海退が進む中期以降、汽水・淡水性貝類を主体とした貝塚へと変化している。後・晩期の貝塚としては、旧品井沼に北面する南境式～大洞C２式の永根貝塚（別称幡谷貝塚）が、主淡貝塚として知られるのみである（後藤ほか1989：364－398頁）[7]。

なお大崎平野を貫流する河川を遡ると、江合川上流域には大洞BC～Ａ式主体の根岸遺跡（澁谷ほか1981）、鳴瀬川上流域には大洞C２～Ａ式主体の香ノ木遺跡（佐々木ほか1985）、吉田川上流域には後期末葉～大洞Ａ式主体の摺萩遺跡（柳沢ほか1990）が、晩期の有力遺跡として位置している（図２）。特に根岸遺跡が位置する江合川上流域の段丘から丘陵地（玉造丘陵）にかけては、晩期の遺跡が密集しており、活発な狩猟・採集活動が営まれていた様相を窺わせている。

（２）「仙北湖沼地帯」貝塚の動物遺存体の構成

上記したように仙北湖沼地帯には、幾つかの貝塚の集中域が認められる。そのうち晩期で主体となるのは、「夏川流域」、「伊豆沼・長沼周辺」、「蕪栗沼周辺」の三地域であろう。

しかし当該域では、発掘調査が実施され、報告された貝塚が極めて少ないのが実情である。ここでは、詳細な分析結果が公表されている蕪栗沼南岸に位置する中沢目貝塚（Ａ貝塚）について概説したい。

貝　類　貝塚を構成する貝類は、オオタニシ、イシガイ、ヌマガイが主体で、いずれも丘陵下に広がる湖沼に生息する淡水産貝類である。貝層の堆積状況は混土貝層と混貝土層が主体で、純貝層を殆ど含まず、多くは脆弱な破砕貝で構成されている。数量的には少ないが、鹹水産のアサリも出土している。

魚　類　貝類と同様に眼前の湖沼や河川に生息するコイ科やギバチが主体となっている。コイ科の内容は、フナが多数を占め、タナゴ属、ニゴイ、ウグイ属が続く。ウナギやドジョウ科等の淡水・半淡水性魚類も出土しており、マイワシ等の鹹水性魚類も僅かながら認められる。

哺乳類　ニホンジカやイノシシが捕獲対象物の主体で、次いでノウサギが捕獲されている。ニホンジカとイノシシの各部位の骨の出土量に、明確な偏りが認められないことから、狩猟地で一時的な解体を受けたとしても、殆ど全ての体躯が集落にもたらされたと想定されている。

鳥　類　ガンカモ科とキジ科が顕著に認められる。ガンカモ科の内容は、マガモ、カルガモ、オナガガモ、ヒシクイ等を中心に構成され、キジ科はキジ、ヤマドリである。水鳥と言われる鳥類の占める比重が大きい点に特徴がある。

（３）「仙北湖沼地帯」の生業活動

上記した動物遺存体や出土遺物から、中沢目貝塚では以下のような漁撈・狩猟・採集活動が復元されている（須藤編1984、須藤ほか1995）。

漁撈活動　中沢目貝塚では、漁撈具としては骨角製の刺突具（図５－６～10）が主体を占めており、石錘や釣針、精巧な作りの銛等は少ない。従って漁撈活動は、湖沼や河川における簡単な構造のヤスを用いた刺突漁が主体であり（須藤1992a：273頁）、湖沼や河川に生息する体長30㎝超の大形のフナ、ニゴイ、ウグイ属は、刺突具を用いて捕獲されたと推定されている。一方体長10　前後の小形のフナ、ギバチの遺存体が、最も多く確認されており、これ等は漁網で捕獲されたと考えられている（須藤ほか1995：271頁）。

また骨角製釣針（大洞Ｂ１式期）の出土から、釣漁が行われていたことは確実である。ウナギやドジョウも少なからず出土しており、これ等の漁法には筌や簗のような仕掛けが用いられた可能性も推定されている。

上記した淡水魚は、体長組成や出土状況から周年捕獲されていたと想定されている。またサケ科の椎骨破片等も検出されており、秋季から冬季にかけて河川を遡上す

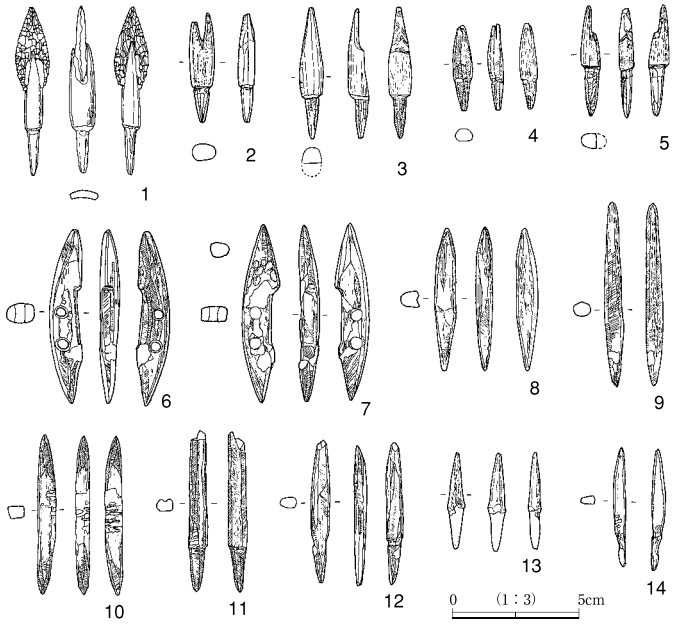
るサケなどが、北上川やその支流域で集中的に捕獲されていた様相を窺わせる。僅かではあるが、鹹水魚が検出されていることも注意されよう。

狩猟活動　中沢目貝塚では、狩猟具として石鏃が多く出土しており、また骨鏃（図５－11～14）や根挟み（図５－１～５）も出土している。上記から、哺乳類や鳥類の捕獲は、弓矢猟が主体であったと判断される。しかし後者の捕獲には、出土遺物としては認められないが、網や罠が用いられたことも想定される。

鳥類では、湖沼域に飛来･生息するガンカモ科や、草原・森林に生息するキジ科の鳥類が捕獲されていたが、特に前者の占める比重が高く、水鳥狩猟が重要な生業活動であったことが窺える。ガンカモ科は冬季に集中して飛来する性質のものが多く、この季節を中心に捕獲されていたと考えられる。

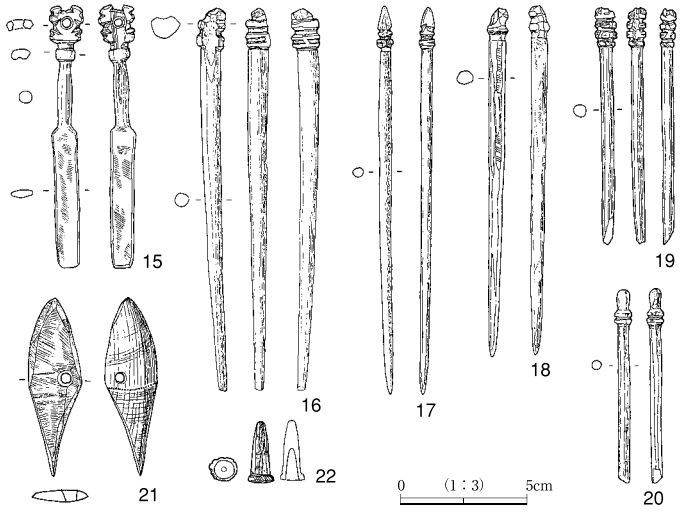
哺乳類では、ニホンジカやイノシシが主体で、集落が立地する丘陵地帯や湖沼域周辺の草原が、狩猟場となっており、弓矢猟と共に、陥穴等の罠猟も併用されていたと想定される。いずれの遺存体とも極めて多くの層で検出され、片寄った集中が見られないことから、四季を通じて捕獲されていたと考えられている。当然食用だけではなく、その骨角・毛皮等も重要な生活資材となっていたであろう[8)]。

採集活動　丘陵地の植生は、ブナ、ナラ林が広がっていたと推定されており（須藤ほか1995:18頁）、トチノキ、ドングリ、クルミ、クリ等の植物質食料は、周囲の丘陵地帯から採集されていたと考えられる。



1～5：根挟み、6・7：有孔尖頭器、8～10：尖頭器、11～14：骨鏃

骨角製狩猟・漁撈用具



15：櫂状骨製品、16～20：髪飾り、21：猪牙製垂飾、22：弭形鹿角製品

装身具

図5　中沢目貝塚出土の大洞BC式期の骨角製品

貝類の採集は、淡水性の貝類が多くの層から多量に出土している上に、四季折々に捕獲されたと見られる動物遺存体との共伴関係が認められることから、周年にわたって採集されていたと推定されている。また少数ではあるが、アサリも含まれている。鹹水性貝類は集中して検出されることが多く、季節的な採集活動が暗示される。

小　結　上記した生業活動は、飽くまで中沢目貝塚における成果であり、当該域の全ての遺跡に該当する訳ではない。しかし同貝塚は当該域の基幹集落であり、また前記した該域の晩期の貝塚は、立地条件、規模、形成された時期、貝層の状態等の点で、いずれも中沢目貝塚と類似した様相であることが指摘されている（須藤編1984:132頁）。因って中沢目貝塚における生業活動を、湖沼域における典型と見なしても、大過はないように思われる。

中沢目貝塚の成果から仙北湖沼地帯では、沖積地に広がる広大な湖沼において、フナ、ギバチ、ニゴイ、ウナギ、ドジョウ等の淡水魚を対象とした漁撈活動と、ヌマガイ、イシガイ、オオタニシ等の淡水性貝類を対象とした採貝活動、秋季から冬季に飛来する水鳥を対象とした狩猟活動が中心になっていたと考えられる。更に集落が立地する丘陵地帯では、ニホンジカ、イノシシ等の哺乳

類を捕獲する狩猟活動や、堅果類等の採集活動も盛んに行われていたことが想定される。

上記したように発掘調査の成果から、当該域では多角的な生業活動が営まれていた様相を窺うことができる。取り分け湖沼地帯という特異な環境に適応した生活様式であったことが、特筆されるであろう。後述する独自性のある土器群が当該域で製作された背景には、同質の地理的環境下における充実した生業活動が、存立基盤となっていたものと予察されている（須藤ほか1995：278頁）。

中沢目貝塚では、アカガイ製貝輪やベンケイガイ製貝輪等の海産貝類の製品が多数出土している。またアサリの貝層も認められ、鹹水産の魚骨も出土している。このことは海岸部との交流によって、様々の物資がもたらされたことが暗示される一方で、同貝塚の構成員が季節的に内湾域まで進出して、採集・捕獲していた可能性を物語っている。同貝塚は海岸線まで10～15㎞程度と、満潮時には丸木舟によって容易に移動できる距離にあったと推察され、海岸部の基幹集落であった沼津貝塚や南境貝塚とも、社会的紐帯で結ばれていた可能性が考えられよう。

3　「入組三叉文高坏」の特徴

「入組三叉文高坏」は、台付浅鉢の範疇に含まれるが、体部の器高を凌ぐ高い台が付されることから、低い高台付きの浅鉢とは区別するため、「高坏」と呼称されている（須藤ほか1995：40頁）。

入組三叉文高坏は、口縁部に展開する入組三叉文と、脚部の複雑な透かし文様に特徴付けられる。しかし全形が窺える資料は、非常に少ないのが実情である[9]。そこで主要分布域からは遠く離れることになるが、筆者が図化した青森県平内町槻ノ木遺跡出土の高坏を例にとって解説したい。

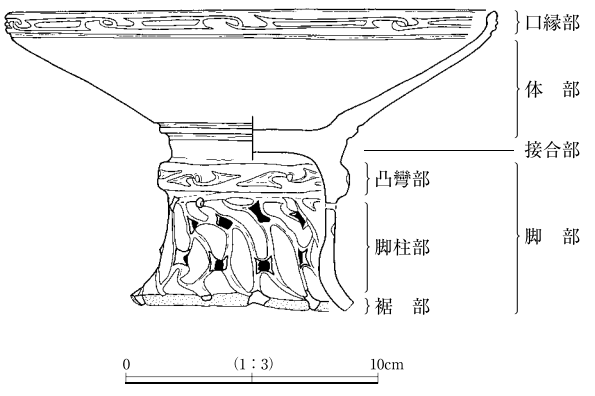


図6　入組三叉文高坏の部位（青森県槻ノ木遺跡出土）

A　青森県槻ノ木遺跡出土の「入組三叉文高坏」

槻ノ木遺跡は、青森県東津軽郡平内町小湊字槻ノ木に所在する晩期前半期の拠点集落である。陸奥湾に突き出た夏泊半島の東南端に位置しており（図27）、太平洋沿岸と青森平野とを結ぶ要衝に営まれた遺跡と見なされている（小林2005ｂ：247頁）。

1951年に慶応義塾大学、1965年に平内町教育委員会によって発掘調査が実施されているが、正式な報告書は刊行されていない。発掘調査直後に発刊された写真集（田中ほか1996）から、遺物の内容を窺うことができるが、大洞B２～C１式の優品が多数出土している。

図６が、槻ノ木遺跡出土の入組三叉文高坏である。現在平内町歴史民俗資料館に所蔵されているが、その出土の経緯については判然としない。当該高坏は上記の図録には収録されておらず、また1968年10月に青森県立図書館で開催された「青森県埋蔵文化財展」（青森県立図書館編1968：20頁46）において、個人所蔵品として出展されていたことから、上記の発掘調査の出土品でなかった可能性も考えられる[10]。故地である仙北湖沼地帯からは、約250㎞の距離にあり、遠方からの搬入土器として、既に須藤隆氏の指摘したところであり（須藤ほか1995:40･73頁）、筆者は大洞BC２式に入組三叉文が残存した事例として、当該土器を紹介している（小林2005ａ：39－40頁）。

入組三叉文高坏の各部位の名称は、図６に示した通りである。

器体は浅い椀形の**坏部**と、器台となる長大化した**脚部**とに大別され、そのつなぎ目を**接合部**と呼称する。坏部は文様の施された狭小な**口縁部**と、幅広の**体部**とに二分される。脚部は接合部直下の膨みである**凸彎部**と、その下位の透かしが彫り込まれた**脚柱部**、更に下方に向かって開く**裾部**とに三分され、その先端の口縁部の口端に相当する部位を**脚端**と呼称する。

槻ノ木遺跡例（図６）は、脚部の先端である裾部を欠損しただけのほぼ完形品で、現存の器高は12.0㎝を測る。体部は底部から30度前後の傾きで直線的に立ち上がっており、口縁部が短く内折し、最大径は口縁部にあ

る。口径は19.6㎝、接合部の径は7.0㎝、凸彎部の径は7.6㎝、現存の裾部の径は9.0㎝、器厚は４～５㎜で、底面の器厚は９㎜を測る。口端は平縁で、やや内削状に作出される。内面の底面付近には、稜が形成され一段低くなっており、平底となる。また、その裏側に当たる脚部の天井面もフラットとなる。

口縁部文様帯の上下幅は約１㎝と狭く、末端の入り組む矩形文様が10単位施され、下限は１条の沈線で限られる。体部は無文であるが、下端には平行沈線が囲繞され、その直下の接合部は幅８㎜程度の無文帯となっている。

脚部は３段で構成される。接合部直下の上下幅約1.5㎝の凸彎部には、７単位の入組三叉状の陰刻文様が展開するが、入組部の円形刺突は貫通しない。脚柱部には上下２段の矩形の透かしを基調とした意匠が、12単位（24孔）穿たれており、四隅から伸びた陰刻文様が縦位に連結する。脚柱部下端の界線と陰刻文様との交点には円孔が穿たれ、上端の一部にも円孔が加えられる。裾部は欠損しており、装飾は判然としないが、大きく外方へ開く形制であったと想定される。

器面には赤色顔料が塗布されており、全体に暗橙褐色を呈するが、下地は暗褐色で一部黒褐色を呈する。全面が丁寧に研磨されており、胎土は緻密で精選され、微砂粒や金雲母を少々含む。

Ｂ　「入組三叉文高坏」の型式学上の特徴

上記した槻ノ木遺跡例の特徴を踏まえて、資料を渉猟すると、入組三叉文高坏を以下のように規定することができるであろう。

形　制　坏部と脚部の器高は、ほぼ同等又は後者の方が上回っており、脚部の占める割合が大きい点に特徴がある。

坏部は浅い椀形で、底部から体部にかけては内彎気味又は直線的に外傾して立ち上がり、口縁部は内彎又は内折して短く直上する。最大径は口縁端部乃至はその直下の内折した稜にある。

脚部は、３段で構成される。接合部直下には上下幅1.5～３㎝程の凸彎部が作出され、その下位の脚柱部は比較的長く、垂直から外に向かってに下方に開き、裾部が強く外反した形制で、裾部の径が口径を上回ることはない。坏部と脚部との接合部は、槻ノ木遺跡例（図６）のような無文帯を介する例は稀で、坏部と脚部が沈線で画され、その直下が凸彎部となり、脚部の天井面も中央が垂下し凸面状になる例が多い。

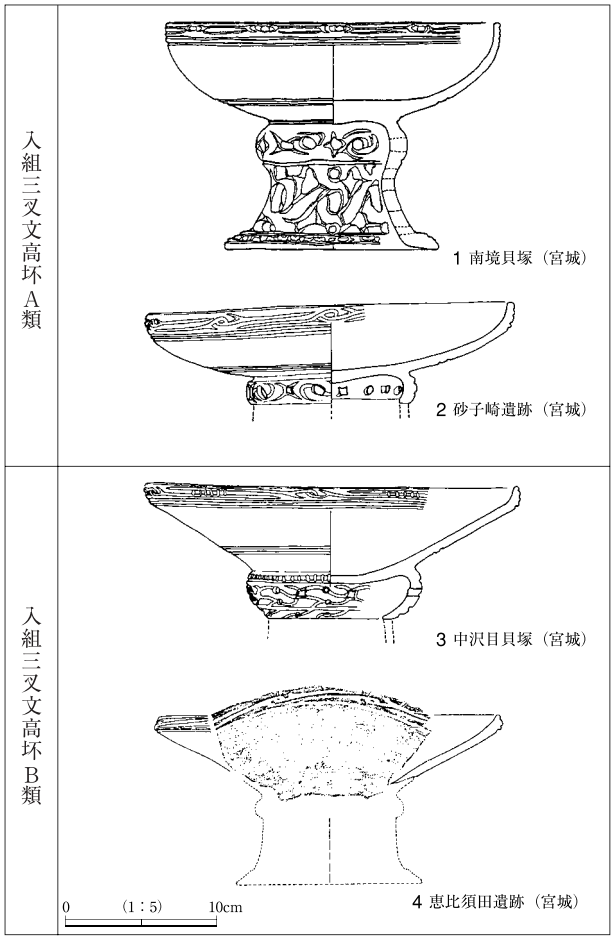


図7 「入組三叉文高坏」の形態分類

法　量　当該高坏の法量は、全形が窺える例が少なく、明確には指摘できない。計測可能な資料から判じて、口径は20～25㎝程度、坏部の底径に相当する接合部の径は７～11㎝程度、脚部の凸彎部の径は7.5～12㎝程度、裾部の径は12～17㎝程度、器高は10～15㎝程度と推定される。口縁部から体部にかけての器壁は薄く作出されており、４～６㎜程度が通例であろう。

口縁部　口端は平縁で、緩やかな丸味を持って仕上げられた例が多く、内削・平坦・尖鋭に作出された例も散見される。狭隘な口縁部文様帯の上限は、画されず口端に露出しており、下限は１～２条の沈線で画される。装飾としては、背向した主軸線が密着し伸長化した右上がりの入組三叉文や、それに類似した末端の入り組む細長い矩形文様が、１段で構成されており、６～10単位程度が展開する。

体　部　体部は無文が通例で、体部の下半から下端に

かけて、２条の沈線からなる平行沈線が囲繞される。内面の底面は、平底乃至は弱い丸底となるが、槻ノ木遺跡例（図６）のように一段低く作出され、平底となる例も散見される。

脚　部　接合部直下の凸彎部は、通常内面ごと外側に膨らむが、槻ノ木遺跡例（図６）のように隆帯となって肥厚し、内面が彎曲しない例も存在する。凸彎部には円孔や円形刺突（未貫通）が穿たれ、文様の基点となっている。装飾意匠としては、入組三叉文や末端の入り組む矩形文様、上下から入り組む弧線文が一般的で、咬合部が円形刺突乃至は円孔となる。特に、横幅の短い鼓形区画と入り組む弧線文を交互に配した例（図７－２）が多く見られ、入組三叉文の場合には、背向した主軸線が密着してＺ字状の陽刻部を意識した構成となる（図６）。また、上下２段の文様で構成された例（図７－３、図31）も存在する。

脚柱部には、矩形を基本とした透かしが穿たれる。多くは矩形文様の四隅又は末端の一部が、陰刻で縦位や斜位に連結し、唐草文風の装飾が展開している。また、矩形文様が入り組み、陽刻部が横Ｓ字状又はＺ字文（図７－１）となったり、上下端が渦巻文となる例（図15－３・18・50）も見られる。この場合、咬合部は円孔となる。しかし、脚注部全体の文様が窺える資料は限られており、詳細は判然としない。

裾部は、外反気味に強く開き、緩い角度を以て底面に接着するが、脚柱部に比しやや肉厚に作出された例が多い。裾部自体は狭小な文様帯をなしており、その上端は横帯で区画され、下端は画されない。脚端は丸味を持って仕上げられ、口端と同様に薄く作出された例も多い。装飾は通常左側上方に突き出た鉤爪状区画が連続して配され、区画内に截痕が加えられる（図15－50）が、凸彎部と同様に入組三叉文（図15－41）や入組矩形文（図15－32・34・36）、上下から入り組む弧線文と鼓形文様を交互に配した例（図15－31）も散見される。この場合、咬合部は円形刺突（未貫通）となる例が多い。

器　質　色調は暗褐色～黒褐色を呈するが、灰色を帯びたり、槻ノ木遺跡例（図６）のように赤彩された例も存在する。胎土は緻密で、混和材の粒子も細かく、精選されている。器面は内外面とも丹念にヘラミガキが加えられており、光沢も認められるが、脚部の内面はナデの痕跡のみで、ややざらついている。

4　「入組三叉文高坏」を構成する属性の検討

入組三叉文高坏は、図１に示したように中沢目貝塚の晩期２期（大洞BC式期）の土器群（中沢目貝塚Ⅱ群土器又は中沢目貝塚３群土器）[11]を構成する器種類型である。以下では、入組三叉文高坏を構成する属性（形制・口縁部の装飾・脚部の装飾）について、型式学的な検討を加えてみたい。

A　「入組三叉文高坏」の形制について

入組三叉文高坏の器体は、坏部と脚部から構成され、太くて高い脚部が特徴となる。器高の割合は同等又は脚部の方が上回っており、口径と脚部裾径では、前者の方が卓越する。

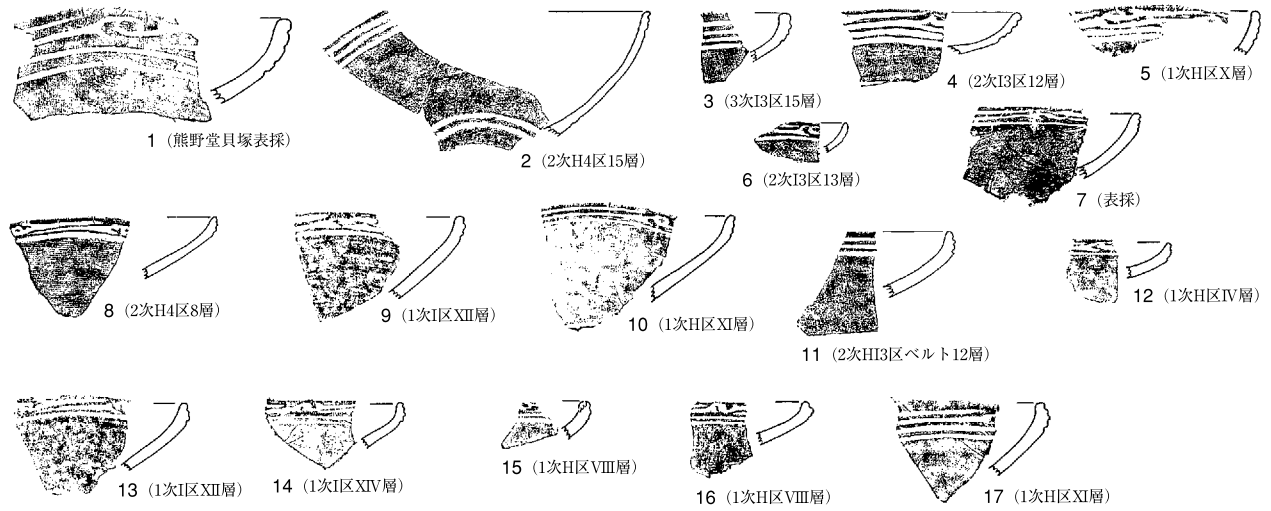
坏部は、口縁部が内彎するものと、内折して稜を形成するものとに二分される。本稿では、前者を**入組三叉文高坏Ａ類**、後者を**入組三叉文高坏Ｂ類**と呼称したい。須藤隆氏は中沢目貝塚の層位的出土状況から、Ａ類からＢ類への形態上の変遷を指摘している（須藤ほか1995：40・56・65・73・236－237頁）が、後述するように随従すべき卓見である。

（１）入組三叉文高坏Ａ類

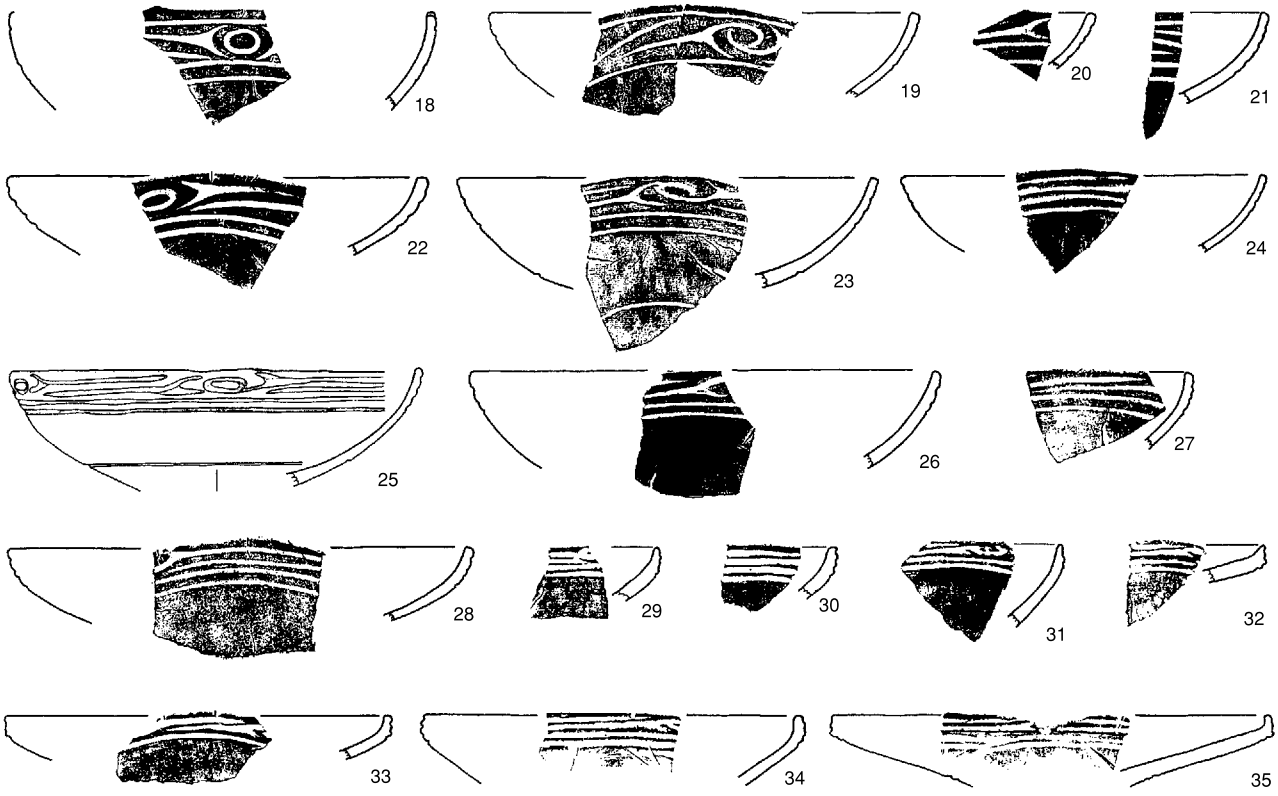
入組三叉文高坏Ａ類は、須藤隆氏が「高坏Ｃ１ｐ２類」（須藤ほか1995：40頁）とした類型に相当する。同氏の「Ｃ類　浅鉢・台付浅鉢・高坏」には、口径と器高の比率が「１：0.5未満で0.2以上」であり、器高が口径の1/3前後の比較的浅い鉢形土器が相当する。そのうち口縁部が軽く内彎した浅鉢が「Ｃ１類」で、更に丈の高い装飾的な高台が付され、口縁部が明瞭に内屈して稜を形成したものが「Ｃ１ｐ類」、強く内彎し稜を持たないものが「Ｃ１ｐ２類」に分類されている。

入組三叉文高坏Ａ類の典型となるのは、南境貝塚例（図７－１）と砂子崎遺跡例（図７－２）である。

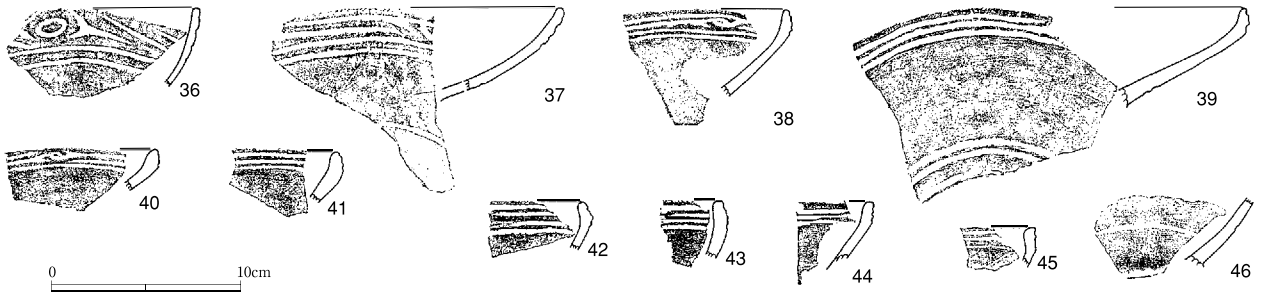
本類の体部は内彎気味に立ち上がっており、通常口縁部が強く内彎して直上乃至は外傾する。口縁部の屈曲点は文様帯下限の区画線付近又はそれよりも下位の部分にある例が多く、口縁部文様帯は通常緩く内彎する。しかし底部から体部にかけて内彎気味に立ち上がり、口縁部付近の内彎の度合いが弱く、外傾した例も存している（図８－２・４）。上記した形制は、大洞Ｂ２式の台付浅鉢（図



宮城県中沢目貝塚出土の入組三叉文高坏口縁部資料及び関連資料

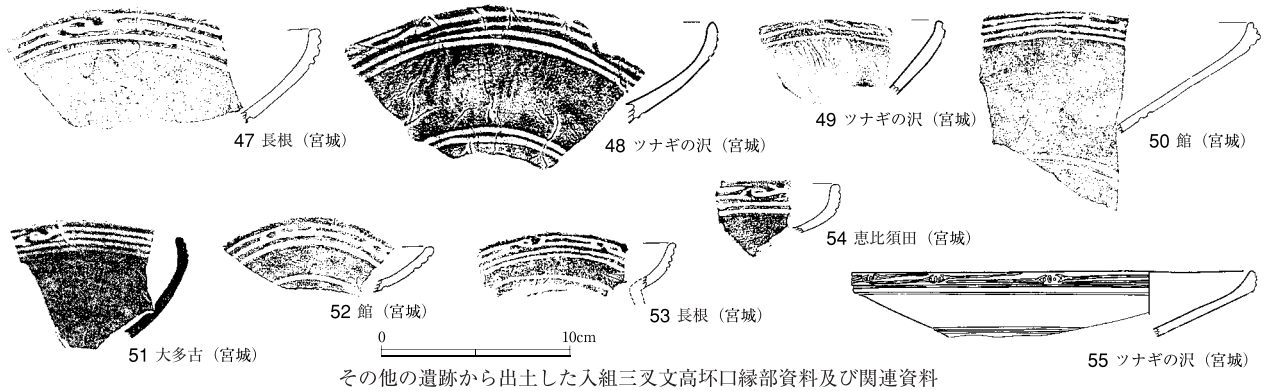


宮城県富崎貝塚出土の入組三叉文高坏口縁部資料及び関連資料



宮城県倉崎貝塚出土の入組三叉文高坏口縁部資料及び関連資料

図8　仙北湖沼地帯出土の入組三叉文高坏口縁部資料及び関連資料（1）



その他の遺跡から出土した入組三叉文高坏口縁部資料及び関連資料

図9　仙北湖沼地帯出土の入組三叉文高坏口縁部資料及び関連資料（2）

８－22～26）に一般的であることから、古的様相を留めていると見なせるであろう。

図８・９は、仙北湖沼地帯で出土した入組三叉文高坏の口縁部及びその関連資料である。図８－２～10が大崎市（旧田尻町）中沢目貝塚、図８－27～31が登米（とめ）市石越町富崎貝塚、図８－37・38・43が同市迫町倉崎貝塚、図９－47・48・51・54がその他の遺跡から出土した入組三叉文高坏Ａ類である。口端は丸味を有する例が多いが、端部が薄く作出されたり（図８－６・29・31・38）、やや平坦に作出された例（図８－３・28・43、図９－47）も存している。底面から体部にかけては内彎気味に立ち上がり、体部外面の平行沈線は体部下半に囲繞され、内面の底面は丸底又は平底を呈する。

外面に明確な稜を持たずに内折したものには、Ａ類とＢ類のいずれとも判断しかねる例も存在する（図８－８～10・29・31・38）。口縁部文様帯が狭小で、口端は薄く作出された例が多く、体部も直線的に立ち上がる。槻ノ木遺跡例（図６）が典型となるが、その形制は後述するＢ類に近似しており、前記したＡ類とは別段に扱う必要があろう。因ってこの類型を、**入組三叉文高坏Ａ２類**として区別しておきたい。そうすると前記したＡ類は、**入組三叉文高坏Ａ１類**に分類されることになろう。しかし、区分が厳密でないことは否めない。

入組三叉文高坏Ａ類は、形制や口縁部文様から判じて、大洞Ｂ２式の台付浅鉢の系譜を引くことは明かである。同式では前記したように、底部から口縁部にかけて緩く内彎して立ち上がったり、口縁部が外傾した形制の台付浅鉢（図８－１・22～26・36、図22－14～16）が盛行しており、脚部の接合部直下に、凸彎部を有する例（図22－16）も認められる。当該土器の椀形の坏部が浅くなると共に、口縁部文様帯も狭小となり、脚部が著しい発達を遂げたことで、入組三叉文高坏Ａ類（Ａ１類）が生成したと推定される。

（２）入組三叉文高坏Ｂ類

入組三叉文高坏Ｂ類は、須藤隆氏が「高坏Ｃ１ｐ類」（須藤ほか1995:40頁）とした、口縁部が明瞭に内折して、外面に稜を形成した類型に相当する。

本類の典型となるのは、恵比須田遺跡例（図７－４）と中沢目貝塚例（図７－３）である。

図８－11～17が中沢目貝塚、図８－32～35が富崎貝塚、図８－39～42・44・45が倉崎貝塚、図９－49・50・55が仙北湖沼地帯のその他の遺跡から出土した入組三叉文高坏Ｂ類である。口縁部文様帯はＡ類（Ａ１類）よりも狭小となり、下限の区画線直上に明確な稜が形成される。口端は短く直上乃至は内傾しており、内面は屈折して外傾乃至は直上して、口端は薄く作出される。また内面が明瞭に屈折せずに緩く内彎して立ち上がり、口端が尖鋭となる例（図７－４、図８－32、図９－55）も認められる。本類で底面の形状が判明した資料は限られるが、多くは平底であったと推測され、底面から体部にかけては直線的に立ち上がる（図７－３）。また体部外面の平行沈線は、体部下半から下端にかけて囲繞される。

本類は口縁部直下の屈折に特徴付けられるが、口縁部の内彎した入組三叉文高坏Ａ１類が内折を強めたことで、同Ｂ類の成立に至ったと推測される。同様の口縁部形態の変化は、大洞BC２式～Ｃ１式の注口土器や壺形・鉢形土器にも認められており、器種間で呼応した経過が存していたと想定される。

図10－１は、山形県宮の前遺跡出土の大洞BC２式の注口土器Ａ類（３段構成）である。注口土器の口縁部は、

大洞B１式～BC２式にかけて通常内彎して立ち上がり、椀形又は皿形を呈する。しかし１は、口縁部直下が屈折して口唇部が直立気味に立ち上がっており、屈折部の直下は無文となる。上記した特徴は、大洞BC２式新相の段階に萌芽が認められ、同式の終末段階に顕在化し、大洞C１式へと継承される（小林2003：30頁）。１は頸部の文様から判じて大洞BC２式に位置付けられるが、口端と肩部の突起列の特徴から、その中でも終末段階に位置付けられる（小林2006:53－54頁）。なお１の口縁部には、背向する主軸線を近接させた短小の入組三叉文が展開している。三叉状の陰刻は、Ｚ字状の陽刻部を浮き出させるための副次的な役割へと変化しており、入組三叉文高坏の脚部（凸彎部・裾部）の描出手法とも共通する（図６、図15－41）。

図10－２は、岩手県手代森（てしろもり）遺跡出土の大洞BC２式新相段階の注口土器である（小林2003：27頁）。口縁部は１と同様に内折しており、狭小な区画内に両端の開いた入組三叉文が施される。三叉文は伸長化が著しく、後述する該域の大洞B２式装飾鉢類の入組三叉文の系譜を引くと考えられるが、当該高坏や装飾深鉢に多用された入組矩形文に由来する可能性も否定できない。

上記のように注口土器の口縁部には、内彎した形制から内折化への傾向が看取される。特に口縁部は、単位文様としての入組三叉文が大洞BC２式まで残存した部位となっており、入組三叉文高坏Ｂ類との親和性が指摘されよう。なお注口土器には、単体としての入組三叉文が大洞B１新式～BC２式にかけて、注口基部下面に一貫して存している（小林2003：37頁）。

また入組三叉文高坏Ｂ類の体部は、底部から直線的に外傾して立ち上がっている。同様の形制は、前記した入組三叉文高坏A２類にも認められており、口縁部の外折化と符合した変化であったと想定される。

以上のように、入組三叉文高坏Ａ類から同Ｂ類への推移が、型式学的に導出されるが、口縁部形態の他器種との類似性を考慮に入れるならば、後者が大洞BC２式に位置する公算が高く、形制が類似した入組三叉文高坏A２類も、同期に位置付けられよう。さすればこれ等に先行したと見なされる同A１類は、大洞BC１式～BC２式（古相）に比定されることになろう。

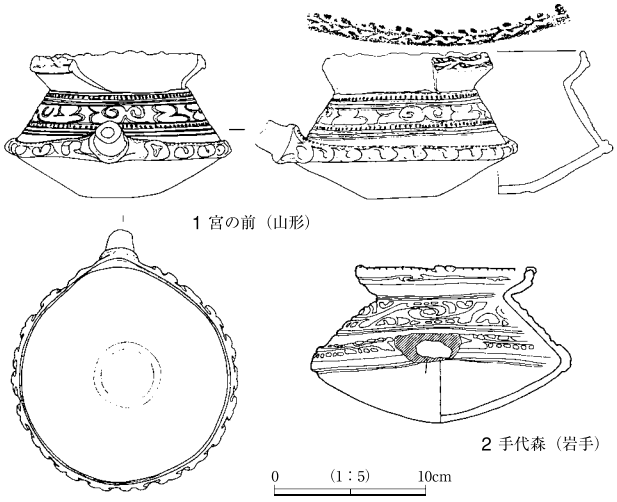


図10　注口土器の関連資料

B　口縁部の文様について

入組三叉文高坏の口縁部文様帯には、Ａ・Ｂ両類とも右上がりの入組三叉文又は末端が入り組む矩形文様（入組矩形文）が、６～10単位程度、１段のみ展開する。文様帯の上端は口端に露出し、下端のみが１～２条の沈線で画され、幅狭に作出される。

（１）入組三叉文について

入組三叉文は、対向する三叉状の陰刻文様の一端が中央で入り組んで、ほぼ点対称に展開する文様構成であり、咬合部は接着するものと接着しないものとに二分される。山内清男氏の模型図（山内1930：第一圖）に象徴されるように、大洞Ｂ２式を特徴付ける文様であるが、東北北半では円文を囲う大きな咬合部の構成が古く、漸次円形刺突や紡錘形の小さな咬合部に収斂される傾向が指摘されている。また大洞Ｂ２新式～BC１式にかけては、背向する三叉文の主軸線が密着する傾向が看取され、挟まれた陽刻部が強調されると共に、短沈線等の付加的要素も加味され、末端の咬み合う羊歯状文（羊歯状文１類）への発展が想定されている（小林2005a：35－40頁）。

大洞B２式の入組三叉文　図11は、宮城県北半[12]から出土した、入組三叉文施文の大洞Ｂ２式（同BC１式を一部含む）の装飾深鉢・鉢形土器である。１～３は、咬合部で接着しない大洞Ｂ２式に典型的な入組三叉文で、１が入組三叉文２b類、２・３が入組三叉文２a類に相当する（小林2005a：36－37頁）。しかし宮城県北半では、このような入組三叉文以外にも、主軸線の伸長化の著しい三叉文が卓越している。三叉文の主軸線は水平に細長く陰刻され、両端が共に開いて、入り組んだ構成が特徴と

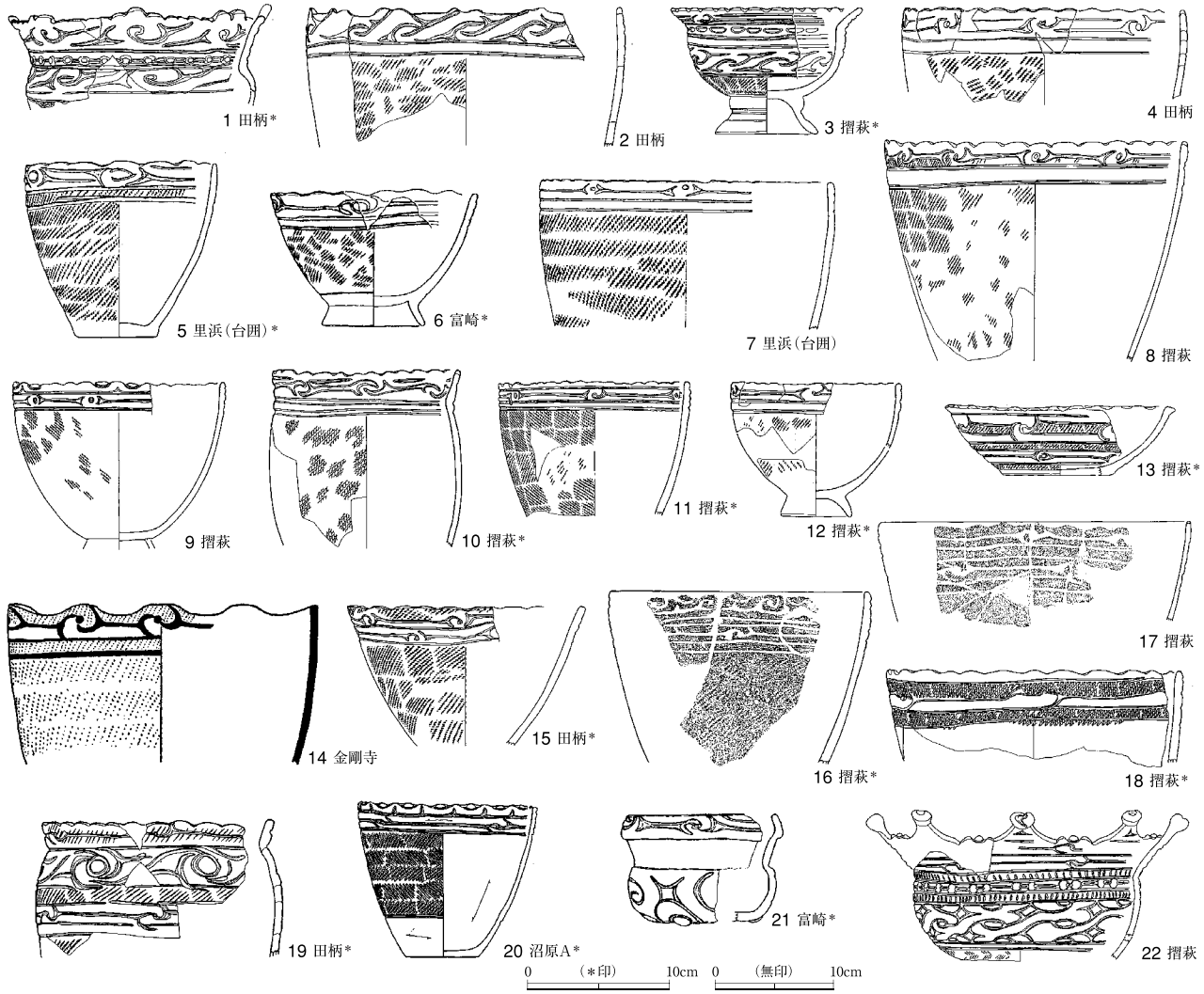


図11　宮城県北半出土の入組三叉文施文の装飾鉢類（大洞B_2式期）

なる。

図11－７～20は、上記した三叉文が施された装飾鉢類である。咬合部が接着せずに入り組んだり（10）、円形刺突を挟んで対向した魚眼状三叉文（７・９）も認められるが、一方のみの三叉文が円形刺突を巻き込んだり（８・11･12）、咬合部が反転又は円形刺突を巻き込んで連結した入組三叉文（14～20）が卓越する。特に後二者には、三叉文の一端が上下端の区画沈線に接する傾向が看取される。図11－22は体部文様から判じて、大洞ＢＣ１式に位置する可能性が高いが、口頸部（Ⅱａ文様帯）には同様の三叉文が認められる。体部の方形の入組文は祖型的な羊歯状文と見なされる内容であり、後述する沼津貝塚第Ⅲアサリ層（図13－16）に共通する。

また両端が開いた構成以外にも、背向した主軸線が細長く平行した入組三叉文が認められる（図11－４・５・13）。４は入組三叉文２ｂ類、５は魚眼状三叉文であるが、先に入組三叉文の典型と指摘した図11－３の口頸部（Ⅱａ文様帯）にも、伸長化した入組三叉文が施文されている。この他に後述する主軸線の末端が入り組んだ三叉文が、該域固有の文様として指摘することができる（図32－44・52）。

上記の伸長化した入組三叉文には、縄文地文を有する例が顕著に認められる。縄文地文は通常、主軸線の上端（図11－14・15・18）や下端（図11－８・17）に施され、周縁が磨り消されるが、背向した主軸線間に充填された例（図11－13）も存在する。この縄文地文は、後期の口縁部の縄文帯や頸部文様帯の磨消文様の名残と捉えることができるであろう。嘗て筆者は、仙台湾周辺の貝塚群出土の後期末葉～晩期初頭の土器を検討する中で、Ⅰ文様帯の消失する過程に大洞Ｂ１新式段階を措定した（小林1999）が、大洞Ｂ２式の口縁部に見られる縄文地文（図11－14・15）は、Ⅰ文様帯の痕跡であった可能性が想定

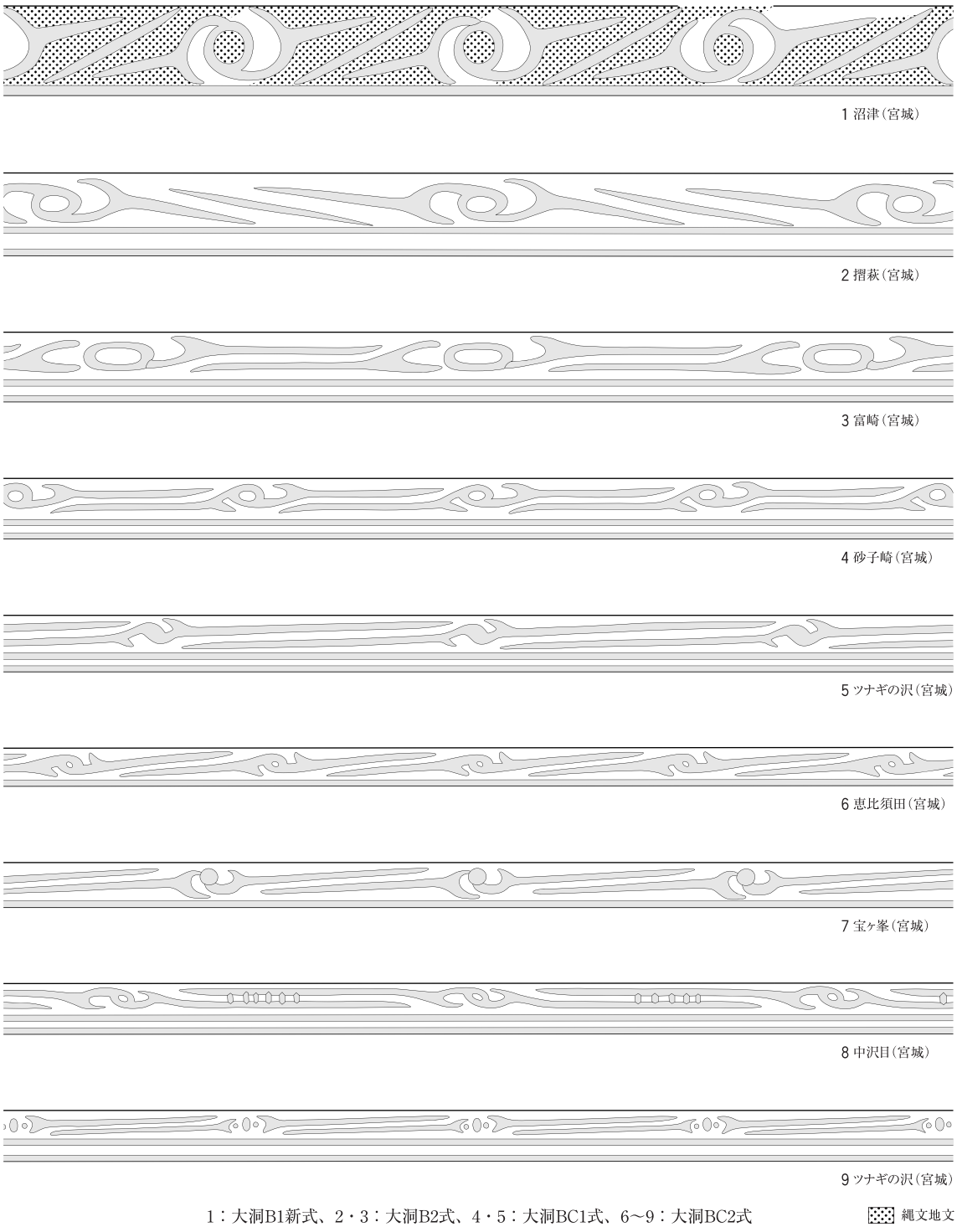


図12　「入組三叉文高坏」に施された入組三叉文模式図

される。大洞Ｂ２式期の口頸部文様帯の縄文地文は、当該域の特徴となっており、後述する刻目技法装飾深鉢と共に、土器装飾におかる該域の保守性を象徴しているように見受けられる。当該域の大洞ＢＣ式期に、入組三叉文高坏が盛行した背景には、先行型式における上記した保守的な地域性が存していたことも、考慮に入れておく必要があろう。

大洞ＢＣ式の入組三叉文　宮城県北半の大洞Ｂ２式の装飾鉢類には、伸長化した入組三叉文が特徴的であるが、台付浅鉢の口縁部に施された文様については、大洞Ｂ１式以来の連綿たる系統が存していたようである。

図12は、入組三叉文高坏とそれに関連する文様を模式化したものである。大洞ＢＣ式である当該高坏の口縁部に施された入組三叉文には、三叉文の主軸線の伸長・平

行・密着化の傾向が指摘される。いずれも狭い文様帯内に、細長い三叉文が密着して配されており、上端は口端に露出し、下端のみが沈線で画される。咬合部は接着した例が殆どであるが、未接着の例（図８－６）や魚眼状三叉文の例（図９－55）も、僅かに認められる。

図12－１は、大洞Ｂ１新式の小型の台付浅鉢である（図22－９）。入組三叉文は大きな円文を巻き込む構図で、三叉文の主軸線は比較的短く、背向した主軸線間には左傾の斜線が挿入され、縄文地文が施される。晩期初頭の（台付）浅鉢に通有の装飾意匠であるが、黒色磨研の丁寧な作出であり、同例が入組三叉文高坏の母体の一翼を担っていたことは確実であろう。

図12－２は、大洞Ｂ２式の台付浅鉢である（図22－15）。右傾の入組三叉文であるが、１の系譜を引き右傾の斜線が挿入されており、文様帯の上下幅が狭まるのに符合して、主軸線が横位に伸長し、縄文地文も消失する。この文様が更に密着したのが、図12－３であろう（図８－25）。三叉文の主軸線はほぼ水平化して、斜線が消失しており、挟まれた陽刻部は幅狭となる。入組三叉文高坏成立前夜の様相を呈しており、大洞Ｂ２新式に位置付けられるであろう。

図12－４は、大洞ＢＣ１式の入組三叉文高坏である（図７－２）。３よりも更に密着の度合いが強まり、三叉状の陰刻と浮き出された陽刻部の幅がほぼ等しく、咬合部もより小さく作出される。図12－５は、同式の咬合部が反転した構成（図９－48）である。

図12－６～９は、大洞ＢＣ２式の入組三叉文高坏である。三叉状の陰刻を入り組ませた意匠では、先行型式との差異は殆ど見出せない。しかし口縁部の内折化と相俟って、文様帯の幅が狭小となり、文様が更に密着して、陰刻の幅よりも陽刻部の幅が細く作出された例も現出する。６は小さな咬合部を有する例（図７－４）、７は円形刺突で反転した例（図30－１）である。８は右傾の入組三叉文となるが、背向した主軸線の間に５～６個の刻み目が加えられており、羊歯状文の截痕に通じた装飾となる（図７－３）。９の文様の詳細は判然としないが、円形刺突を挟んで魚眼状三叉文となる特異な例（図９－55）となっている。

以上見てきたように、入組三叉文高坏の口縁部文様には、晩期初頭の台付浅鉢からの系統的な発展を見て取ることができる。即ち文様帯の上下幅が漸次狭まったのに符合して、文様の密着の度合いが強まり、特徴的な入組三叉文に至った経過が観察されよう。大洞ＢＣ式の入組三叉文は、背向した三叉文の主軸線の伸長化と密着化に特徴付けられるが、その母体は先行する大洞Ｂ２式の台付浅鉢の入組三叉文に見出すことができ、陰刻を主とした文様から、陽刻部を意識した文様構成への変化として捉えることが可能となる。

沼津貝塚の層位的所見　上記した特徴を持った入組三叉文が、大洞ＢＣ１式に位置付けられる層位的事例として、宮城県石巻市沼津貝塚を挙げることができよう。

沼津貝塚は前記したように、旧北上川河口部（現河口より北東方約6.5㎞）に位置する大規模な主鹹貝塚[13]であり、入組三叉文高坏の主要分布域である仙北湖沼地帯とは、至近の距離にある。1909～1930年にかけて、毛利総七郎・遠藤源七両氏によって発掘された骨角製品が著名であるが、1963年東北大学文学部考古学研究室（当時）によって、遺跡東北端の北側斜面に、長さ15ｍのトレンチが開設された。そのうちＤ－０区において、比較的良好な堆積状況が認められたことから、須藤隆氏が出土土器を紹介している（須藤1984:24－28頁）。但し、貝層の堆積状況を示す断面図は公表されていない。

図13が、沼津貝塚Ｄ－０区出土の層位別の土器資料である。須藤氏に拠ると、沼津貝塚では８枚のアサリ層を基準に、18枚の包含層が認定されたとのことである。最上位の第Ⅰアサリ層～第Ⅱアサリ層（図13－１～15）にかけては晩期２期の土器群（大洞ＢＣ式）、第Ⅲアサリ層～第Ⅳアサリ層（図13－16～22）にかけては晩期１期の土器群（大洞Ｂ２式）、第Ⅶアサリ層以下（図13－42～46）は後期最終末に位置付けられ、第Ⅴアサリ層～第Ⅵアサリ層（図13－23～41）にかけてはその中間的様相を持つ土器群（大洞Ｂ１式）が出土したと報告されている。

破片資料であるが、土器の型式変化が整然と堆積した層序で示されており、興味深い事例となっている。この中で注目されるのは、第Ⅲアサリ層から出土した土器であろう。同層準では僅か２点の資料が図示されたに過ぎないが、「入組三叉文」（図13－17）と「羊歯状文の祖型」（図13－16）を施した土器が、層位的に共伴した状況を示している。須藤氏は同層準を大洞Ｂ２式の範疇で捉えており、この事例を論拠の一つに挙げて、羊歯状文が既に

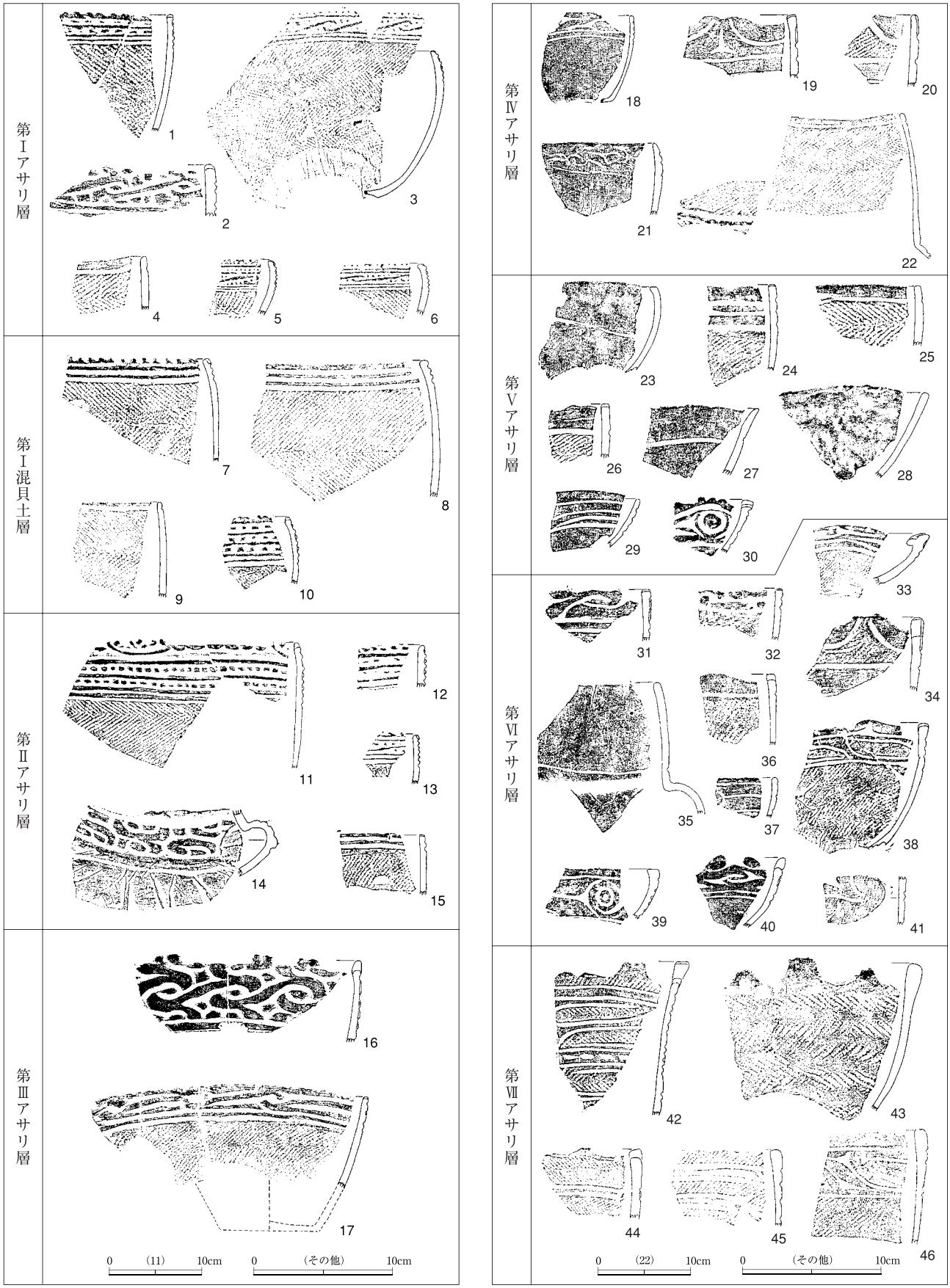


図13　宮城県沼津貝塚1963年調査トレンチD-0区出土土器（須藤1984）改変

晩期１ｂ期（大洞Ｂ２式）に成立していたことを指摘している（須藤1992ａ：270頁、須藤ほか1995：67・230－232頁）。一方、いち早く大洞ＢＣ１式の再評価を試みた金子昭彦氏は、大洞ＢＣ１式に「方形入組文を持つ土器」と「入組三叉文を持つ土器」が層位的に共伴した論拠に挙げている（金子1992：６－７・27頁）。

図13－16は、祖型的なＺ字文が施された装飾鉢である。入組三叉文に横Ｓ字状沈線と短沈線を付加することで、Ｚ字状の陽刻部が形成されるが、刻まれた陰刻は細く、陽刻部が大きく作出されている。上記した特徴は、羊歯状文でも古的様相と見なされるもので、筆者は大洞ＢＣ１式の指標に位置付けている（小林2005ａ：40－52頁）。

第Ⅲアサリ層では、この祖型的羊歯状文と共に入組三叉文の装飾鉢（図13－17）が出土している。17の口端は、篦刻み目による小波状縁で古的様相を留めている（小林2005ａ：21頁）が、口頸部文様の入組三叉文は、背向した主軸線が伸長し、且つ密着した特徴を有している。東北北半ではこの特徴が、大洞ＢＣ１式に顕在化しており（小林2005ａ：39－40頁）、前記した入組三叉文高坏の口縁部文様の描出手法とも、共通した内容となっている。入組三叉文の伸長化と密着化は、東北北部～中部にかけて、歩調を合わせた変化であったと受け止めることができ、筆者は第Ⅲアサリ層が当該域の大洞ＢＣ１式の型式内容であったと理解している。

層位毎に沼津貝塚の資料を見てみると、上位の第Ⅰアサリ層と第Ⅰ混貝土層出土の土器（図13－１～10）は、大洞ＢＣ２式に比定される内容である[14)]。第Ⅲアサリ層（図13－16･17）は、前記したように大洞ＢＣ１式に位置付けられるが、その直上の第Ⅱアサリ層（図13－11～15）のうち、12・13は大洞ＢＣ２式、14は大洞ＢＣ１式に比定されよう。第Ⅲアサリ層より下位の第Ⅳ・Ⅴ・Ⅵアサリ層（図13－18～41）は、大洞Ｂ１式と同Ｂ２式が混在しており、両型式を層位的に区分することは困難である。更に下位の第Ⅶアサリ層（図13－42～46）は、須藤氏が指摘したように後期最終末に位置する内容である。

以上、沼津貝塚の第Ⅲアサリ層を基準に、伸長化と密着化した入組三叉文が、大洞ＢＣ１式に位置付けられる可能性を指摘してきた。この層位的事例に立脚する限りでは、須藤氏が指摘したように図13－16を大洞Ｂ２式の範疇で捉えるならば、図13－17は大洞Ｂ２式の入組三叉文の装飾鉢に比定されることになる。しかし文様描出手法における東北北半との共通性と、共伴した祖型的羊歯状文の装飾鉢（図13－16）を考慮に入れるならば、大洞ＢＣ１式に位置する公算が高いと筆者は理解している。因って、同層準を大洞ＢＣ１式の論拠に置く金子昭彦氏の見解を支持したい。

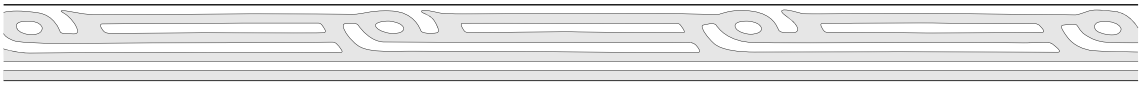
（２）「入組矩形文」について

「入組矩形文」は、横長の鼓形モチーフの末端が相互に入り組む文様構成で、入組三叉文の一種と見なすことができるであろう。槻ノ木遺跡例（図６）で解説したように、入組三叉文高坏に屡々認められるが、後述するように同時期の装飾深鉢に多用された文様である。

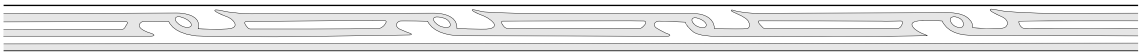
文様は基本的に横位に長く伸びており、平行化した三叉文の主軸線が上下で密着し、主軸線の末端と三叉文の一端が連結した構成となる。当該文様が施された大洞Ｂ２式の台付浅鉢は見出せず、大洞ＢＣ式の当該高坏の資料も僅少であることから、その系譜は判然としないが、筆者は「図14－１→２」への変遷を想定している。

図14－１は、大洞ＢＣ１式相当の当該高坏の口縁部文様の模式図である（図９－47）。主軸線に囲まれた陽刻部の幅が陰刻よりも広く、咬合部もやや大きく作出されており、形制は口縁部の内彎した入組三叉文高坏Ａ１類に相当する。図14－２は、大洞ＢＣ２式の当該高坏である（図６）。文様帯の上下幅は狭まり、陰刻と陽刻部の幅はほぼ等しくなる。また文様は短小となり、単位数も増加しており、咬合部は小さく作出される。筆者は上記の型式変化を想定しているが、この経過は先の入組三叉文とも共通すると言えるであろう。

上記以外の事例を見てみると、入組三叉文高坏Ａ１類の典型である図７－１は、末端の開いた三叉状陰刻の直下に平行した沈線が付加されている。実測図から文様の仔細は判然としないが、矩形文様を意図していたことは確かであろう。図30－２は、矩形入組文が施された入組三叉文高坏Ａ類（Ａ２類）である。陰刻に挟まれた陽刻部は狭く作出され、入組矩形文装飾深鉢の文様（図38－32）に類似しており、大洞ＢＣ２式に位置付けられよう。図９－52・53は、入組矩形文が施された当該高坏以外の器種である。52は拓影図から判じて口径が小さく、口縁部の内彎の度合いも弱いことから、皿形の器形と考えら



1 長根貝塚（宮城）



2 槻ノ木（青森）

1：大洞BC1式、2：大洞BC2式

図14 「入組三叉文高坏」に施された入組矩形文模式図

れる。53は注口乃至は壺形土器の口縁部として復元されているが、入組三叉文高坏Ａ類に類似した口縁部資料である。いずれも口径の関係からか、入組三叉文高坏に比べ横幅が狭く描出されている。図示していないが、栗原市（旧若柳町）館貝塚では、下端の区画線を欠いた当該文様の入組三叉文高坏Ａ類（亘理ほか1974：第57図７－拓影図、第58図７－実測図、第60図－写真）が出土している。同例の矩形文下端の描線が、区画沈線の代用をなしていたと想定される。

入組矩形文の系譜については、大洞Ｂ２式台付浅鉢の伸長化した入組三叉文からの発展として捉えることが可能である。しかし当該域の大洞Ｂ２式の装飾鉢類の(口)頸部文様には、既に幅広の当該文様が存している（図11－13、図38－２？）。また後続する大洞ＢＣ１式では、やや上下幅を有する横長の入組矩形文が盛行している（図37－２）。当該域の装飾鉢類に多用された文様であったことを勘案するならば、当該高坏への影響関係も無視できないであろう。

Ｃ　脚部の装飾について

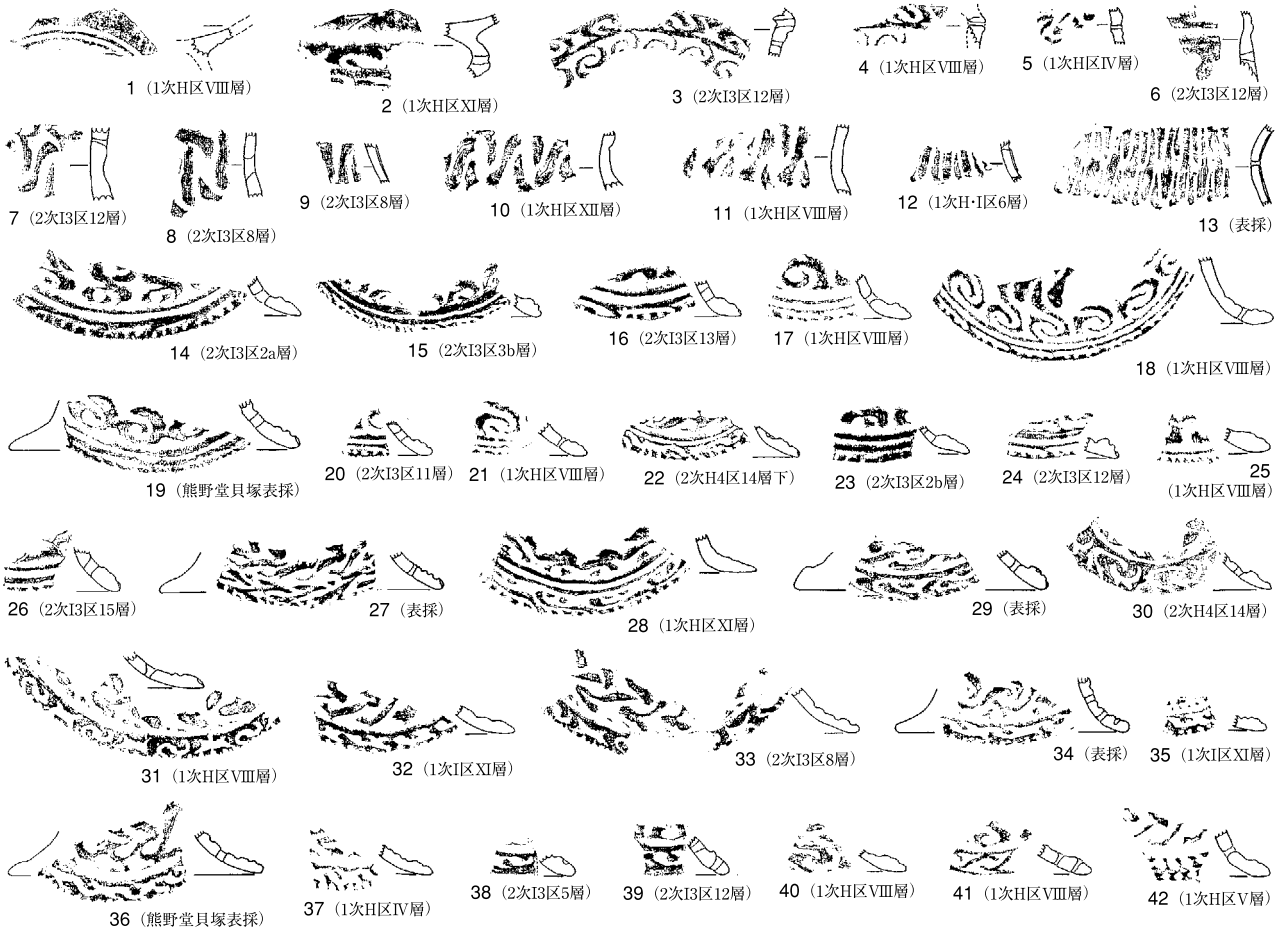
入組三叉文高坏の脚部は、既に指摘したように３段で構成される。脚部は太くて坏部を凌ぐ高い器高と、透かし文様を伴う複雑な装飾に特徴付けられる。しかし脚部の多くは破片資料で、全形の窺える例は非常に少ない。従って、前記した坏部の形態と脚部の装飾との相関性については、判然としないのが実情である。

凸彎部　凸彎部の装飾は、透かしと陰刻文様で構成される。取り分け、円形刺突（未貫通）や円孔が、文様の基点となっており、それを取り囲んで入組三叉文や鼓形区画、弧線文等が配される。

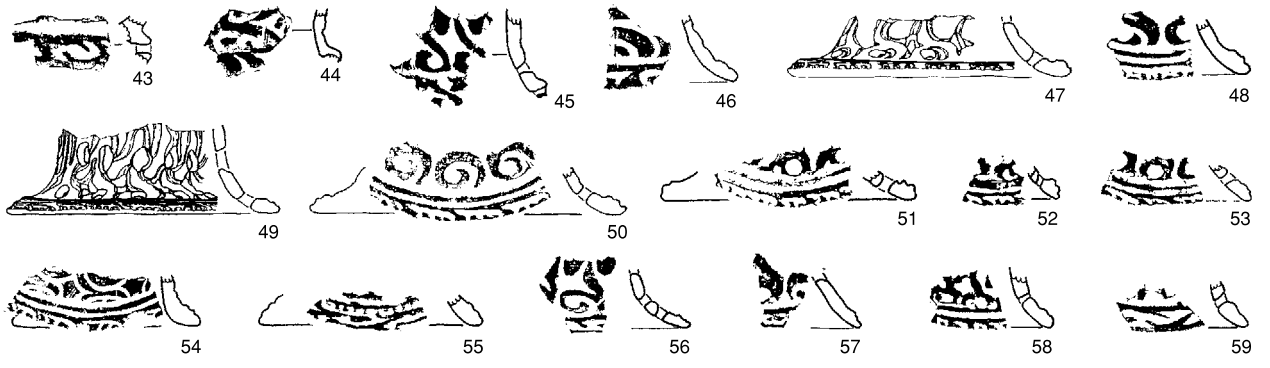
凸彎部の資料としては、図６、図７－１～３、図15－２～４・43・60・61・72、図31が挙げられる。円孔を上下から巻き込んだ弧線文と鼓形（矩形）文様を交互に配した例が殆どで、鼓形区画は陰刻文様となるか又は透かしが穿たれる（図７－１・２、図15－２～４・43・61・72)。弧線文と矩形文様の系列には、円孔を巻き込む弧線文が独立せず、鼓形区画の一端の延長として入り組む例も存在する（図７－３、図31)。その他に、背向した主軸線の短い入組三叉文で構成された例（図６）も見られるが、主軸線が密着しており、挟まれた陽刻部を意識した構成となっている。凸彎部は狭小な文様帯となっており、透かしの種類が制約されたためか、文様のバリエーションは限られている。

口縁部の形状が窺える例（図７－１～３）で比較すると、入組三叉文高坏Ａ類（Ａ１類）である１・２の凸彎部は、円孔を巻き込む弧線文と鼓形区画の透かしが、交互にやや間隔を置いて配されている。一方同Ｂ類である３の凸彎部は、２帯の文様帯で構成される。同例の上段には、円形と矩形の透かしが交互に穿たれるが、円孔(円形刺突も含む）は２段で、矩形区画の末端から伸びた陰刻の入組部となる。下段は上下端の横帯から伸びた弧線が、円形刺突で入り組んでおり、文様の繁縟化が著しい。上記から型式学的に、やや簡素な文様構成から、繁縟化した構成への発展が導出される。１・２は大洞ＢＣ１式～ＢＣ２式古相、３が大洞ＢＣ２式新相以降に位置すると推測されることから、凸彎部が２帯の文様で構成された宮の前遺跡例（図31）は、大洞ＢＣ２式新相以降に相当しよう。

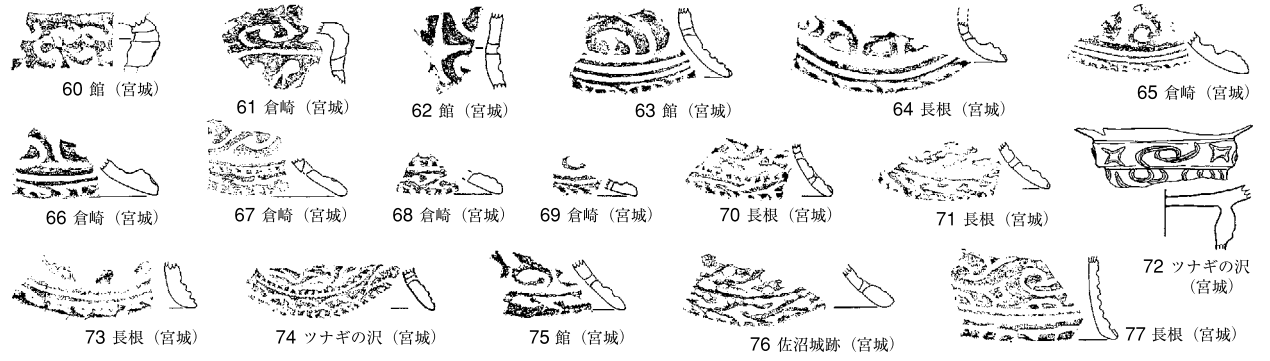
同様に典型資料で凸彎部の形状を見ると、入組三叉文高坏Ａ類（Ａ１類）の図７－１・２の凸彎部は、ほぼ中央に最大径があり、球状に膨らむ。一方同Ｂ類の図７－３の凸彎部は、最大径が上部にあって、下方が窄まる。型式学的に丸味を持って球状に張り出す形制から、最大径の上方への移動即ち「上方退縮」の過程が看取できるであろう。また図６のように内面ごと膨らまず、隆帯化し



宮城県中沢目貝塚出土の入組三叉文高坏脚部資料



宮城県富崎貝塚出土の入組三叉文高坏脚部資料



その他の遺跡から出土した入組三叉文高坏脚部資料

図15　仙北湖沼地帯出土の入組三叉文高坏脚部資料

た例も存在する。当該高坏の凸彎部の形制は、注口土器の肩部と同様に、漸次縮小化と隆帯化の経過を辿ったものと想定される。

脚柱部　脚柱部の装飾で、全容が窺える資料は非常に少なく、完形品は図６と図７－１の２例に過ぎない。ある程度文様が判明した脚柱部の破片資料としては、図15－７～13・45・62が挙げられるが、その他に凸彎部資料（図15－３）や裾部資料（図15－14・18・19・27～29・31～34・36・47・49・50・54・56・63・64・77）から、装飾の一部を理解することができる。

脚柱部は、透かし彫りを基調とした文様で構成される。中央付近には、矩形区画の透かしが穿たれ、その四隅又は末端の一部が、陰刻で縦位や斜位に連結しており、唐草文風の装飾が展開する。中には、細い陰刻が網目状に連結した例も存するが、その中央には円孔が穿たれている（図15－13）。古相と見なされる図７－１の脚柱部は、入り組む矩形文様で構成される。矩形の透かしと入組部にはやや大きな円孔が穿たれるが、陽刻部は太く作出されている。同様の矩形入組文で構成された例は、図15－47･49にも認められており、脚柱部装飾の繁縟化は、新しい様相と見なされるであろう。

脚柱部の上下端には、円孔が穿たれる例が多い。上下端の界線と上記した陰刻文様との交点に穿たれるが、矩形入組文で構成された場合、円形と矩形の透かしは、交互に穿たれる（図７－１、図15－47･49）。この場合、円孔は矩形文様の一端が伸びて連結したり、短い弧線が付加され巴状の文様となる。

脚柱部の下端に、菱形の透かしと円孔を巻き込む巴状の陰刻が交互に配され、巴状（Ｃ字状）の陽刻部が作出された例が認められる（図15－14・19・48・50）。菱形区画の末端は伸長して、下端の界線と連結しており、大洞ＢＣ式の装飾鉢類に多用されたＣ字文（Ｃ字文２類）と共通した構成となる（小林2005ａ：52－57頁）。また上下端の円孔を上下で巻き込んで、弧状に入り組む陽刻部が作出された例も存在する（図15－３・４・18）。この場合陽刻部は細く作出されており、繁縟化した印象を受ける。

矩形文様を入り組ませることで、末端の入り組んだ横Ｓ字状又はＺ字状の陽刻部を描出した例も認められる（図15－27・29・32～34・42）。透かし自体は小さいが、陰刻同士が複雑に連結して、狭小な陽刻部を作出しており、文様の繁縟化が著しい。図７－１からの発展が想定され、新しい様相と見なされるであろう。

一般に脚柱部の透かしは、大きく穿たれたものが古く、文様の繁縟化に伴って、次第に縮小し、多く穿たれる経過が推察される。従って文様構成が比較的簡素で、陽刻部が大きく作出され、透かしの少ない例は、古相に位置付けられるであろう（図15－46・63・72・77）。

裾　部　裾部は外反気味に強く開き、緩い角度をもって底面に接着する。上端は通常１～２条の沈線で区画されるが、その下端は画されず脚端に露出しており、狭小な文様帯をなしている。装飾は側面の視点では見ることができず、上面（正確には斜め上方）からの視点を意識した加飾となっており、通常１段のみで構成される。

裾部の装飾で最も一般的なのは、鉤爪状の区画が右側上方に突き出た意匠である。通常区画内には、１～２個の刻み目が加えられ、２～３個の陽刻部が作出される（図15－15・18・47・50～54・63・64・77）。４個以上の陽刻部が作出されたり（図15－16･65）、右側上方に突き出た例（図15－14）も僅かに認められる。

裾部に施された鉤爪状の装飾は、装飾鉢類の口端の「Ｂ突起４ｂ類」（小林2004ｂ：39頁）に類似している。Ｂ突起４ｂ類は、Ｂ突起の中央から右下方向に沈線が伸びて、鉤爪状の区画が作出され、区画内の口端が刻み込まれることで、珠紋縁を呈したもので、大洞ＢＣ式に特徴的な口端の装飾である。この意匠を180度反転させ、先端が左上方向に突き出ると、当該高坏裾部の装飾となるが、恰も口端を脚端に置き換えた内容と言えるかもしれない。

上記した文様の萌芽は、大洞Ｂ２式台付浅鉢の裾部に認めることができる。図23－16・17は、宮城県中沢目貝塚の大洞Ｂ２式の層準から出土した台付浅鉢である（図21－298･332）。両例とも、脚端から左側上方に突き出た幅広の鉤爪状区画が観察される。このような鉤爪状区画は、東北北半の大洞Ｂ２新式の装飾鉢類にも屡々認められており、末端の咬み合わない羊歯状文（羊歯状文２類）の母体になったと想定されている（小林2005ａ：45－48頁）。中沢目貝塚例の裾部が更に外側に張り出し、文様帯の幅が狭小になることで、入組三叉文高坏の裾部に至ったと想定される。

鉤爪状区画に次いで顕著なのは、凸彎部で多用される鼓形文様と円形刺突の交互文様である。凸彎部と同様に、円形刺突を巻き込む弧線文が独立した例（図15－31・33）と、鼓形文様の末端が入り組み、陰刻文様が連続した例（図15－32・34・36・37・71？）の二様態が存している。但し凸彎部の円文は貫通した例が多いのに対して、裾部では殆どが未貫通の円形刺突となる。なおこの系列の脚端には、通常細かな刻み目が加えられる。

この他には、鉤爪状区画の先端が反転して、界線を持たずに脚柱部の装飾と連続した例（図15－27）や、末端の咬み合わない羊歯状文（羊歯状文２類）で構成された例（図15－28）、上下から入り組む弧線文の例（図15－29・30）等が認められる。主軸線の短い入組三叉文の例も散見される（図15－41）が、同例の咬合部は円孔となる。

裾部の装飾のうち、鼓形文様と円形刺突を交互に配した系列や入組三叉文の系列が、凸彎部の装飾と共通する。共に狭小な文様帯に展開したため、装飾意匠が限定されたと推察される。

その他　入組三叉文高坏の脚部は、上記したように３帯の文様帯で構成されるが、文様帯の多帯化は大洞ＢＣ式の装飾鉢類の特徴でもある（小林2005ａ：68－69頁）。宮城県中沢目貝塚では、当該高坏の脚部の装飾と類似した装飾浅鉢が出土している（図１－６）。底部が欠損しており高台の有無は判然としないが、頸胴部界で屈折し、体部が強く内彎した形制で、屈折部より上段に２帯（口縁部･頸部）、下段の体部にも２帯の、計４帯の文様帯から構成される。上端の口縁部文様帯は末端が連結した矩形文様、最下段の体部文様帯は入組弧線文と鼓形文様が交互に配されており、丁度入組三叉文高坏の脚部を倒立させた構成となっている。両器種間の親和性を示す事例と言えるであろう。

D　小　結

入組三叉文高坏の形制、口縁部の装飾、脚部の装飾について検討を加えてきた。

形制においては、口縁部が内彎した入組三叉文高坏Ａ類と、口縁部外面に稜が形成された同Ｂ類とに区分され、Ａ類からＢ類への型式変化が想定される。体部も内彎した形制から直線的なものへと変化しており、他の器種との相関性から、入組三叉文高坏Ａ類（Ａ１類）は大洞ＢＣ１式～ＢＣ２式（古相）、同Ｂ類は大洞ＢＣ２式（新相～終末）に概ね位置付けられるであろう。入組三叉文高坏Ａ類には、口縁部に明確な稜を持たずに内屈し、体部が直線的となる類型（入組三叉文高坏Ａ２類）も存しているが、体部の形制が直線的となることから、Ｂ類と同様に大洞ＢＣ２式（新相～終末段階）に比定されるであろう。

口縁部には、大洞Ｂ２式台付浅鉢の系譜を引く、伸長化と密着化の著しい入組三叉文が施文される。大洞ＢＣ式期を通して、文様モチーフに基本的な変化は見られないが、時期が下るに従い密着化の傾向が強まるように窺える。また入組矩形文は、入組三叉文の陰刻が連結することで生じた文様と見なされるが、同様の文様が施された装飾深鉢からの影響も無視できないであろう。

脚部の装飾は、透かしの文様を基本としており、後期末葉～晩期初頭の台付浅鉢からの系譜が考えられる。古相の入組三叉文高坏Ａ類（Ａ１類）の脚部の装飾は、比較的間隔を置いた構成であるのに対し、同Ｂ類や同Ａ２類では複雑な装飾で構成された例が多く、装飾が繁縟となる経過が観察される。また凸彎部は、球状に張り出した形制から最大径の上方への移動（上方退縮）や、隆帯化への経過が想定される。

体部の装飾について、詳細は触れてこなかった。縄文地文は持たず、体部下半から下端にかけて、平行沈線が囲繞されるのみであるが､後述のように先行する大洞Ｂ２式の台付浅鉢では、通常１条の沈線が体部下半に巡らされる（図８－23･25、図22－15）。大洞Ｂ２式台付浅鉢から同ＢＣ式入組三叉文高坏への変化を、１条沈線から平行沈線への変化として理解することも可能であろう。装飾鉢類（台付を含む）では、体部下半の平行沈線や接合部の截痕列は、大洞ＢＣ２式の特徴とされており、大洞Ｂ２式～ＢＣ１式には１条沈線が卓越する（小林2005ａ：72頁）。図７－３の接合部は刻み目帯となっており、大洞ＢＣ２式の特徴を顕現している。しかし、古相に位置付けられる入組三叉文高坏Ａ類（Ａ１類）の体部にも､既に平行沈線が囲繞されており、装飾鉢類と当該高坏では、変化の歩調にずれが生じていた可能性が考えられる。

5　「入組三叉文高坏」の年代的変遷

A　須藤隆氏による「入組三叉文高坏」の細分案

須藤隆氏は、中沢目貝塚の層位的所見から、当該高坏

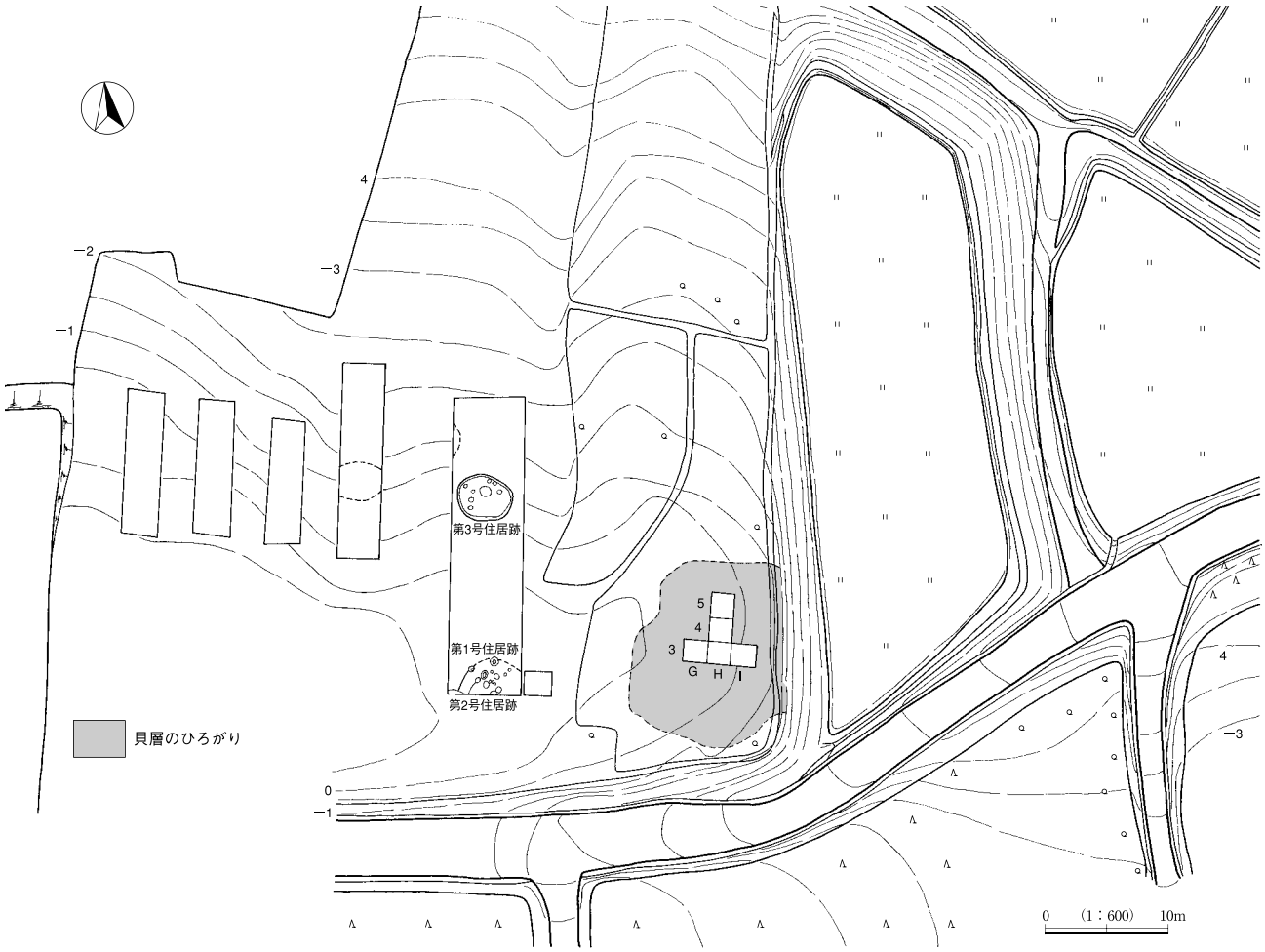


図16　宮城県中沢目貝塚地形図(須藤編1986)改変

の「器形は下層では口縁部が内彎してゆるやかにたちあがる形態をとり、上層で口縁部が強く屈折し、たちあがる形態に変化する」と指摘している（須藤1984:277頁）。以下では、中沢目貝塚で示された層位的根拠を、具体的に検証してみたい。

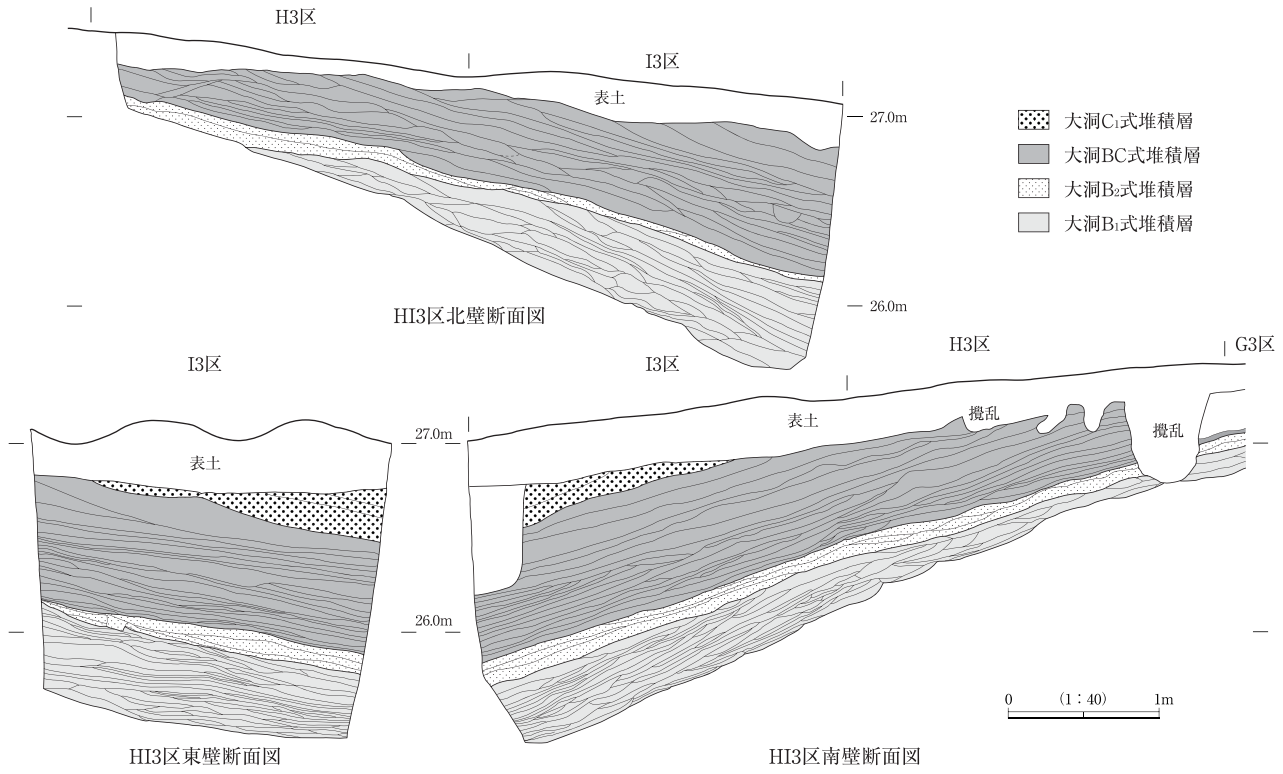
（1）中沢目貝塚における層位的出土状況

中沢目貝塚は、1973・79・84・86年の4次にわたって、須藤氏を中心とする東北大学文学部考古学研究室(当時)により、発掘調査が実施されてきた[15]。層厚は約1.5mを測り、370枚を超す堆積層が入念に精査され、詳細な調査成果が公表されてきており、貝塚調査の範として、以降の研究に多大の影響を与えた遺跡として特記されるものである。

発掘調査の正式報告としては、第1次調査（須藤編1984）と第2～4次調査（須藤ほか1995）の2冊の大部の報告書、そして第3次調査の概報（須藤編1986）が公刊されている。また報告書以外にも須藤氏の論考の中で、中沢目貝塚の成果が度々紹介されてきている（須藤1984、須藤1992a・b）。しかし報告形態が多岐にわたっているため、層位名称や貝層断面図、図示された土器等に異同が存しているのが実情である。そこで本稿では、2冊の報告書に準拠して、堆積状況を明確に跡づけることが可能な斜面下端の「Ⅰ3区」（図16）に限って、層位的出土状況を検討してみたい。

Ⅰ3区では、第1次調査の10枚と第2次調査の38枚にのぼる包含層から、Ⅱ群土器（大洞BC式相当）が出土している（須藤ほか1995:71頁）。第1次調査のⅥ層より下層から第2次調査の18層（19層？）より上位の堆積層が相当し、両次の調査を合わせると、層厚は約65㎝を測り、10～20度の傾斜を以て堆積していた（図17）。

発掘区の断面図を見ると、第1次調査と第2次調査の境界面では、貝層の堆積状況に大きな変化が認められる。その変化が廃棄パターンの変化を反映したのか、発掘調査の精度･方法に起因したのかは判然としないが、第1次調査では均質な斜面堆積が認められ、比較的変化に乏しかったのに対し、第2次調査では貝層の堆積が薄



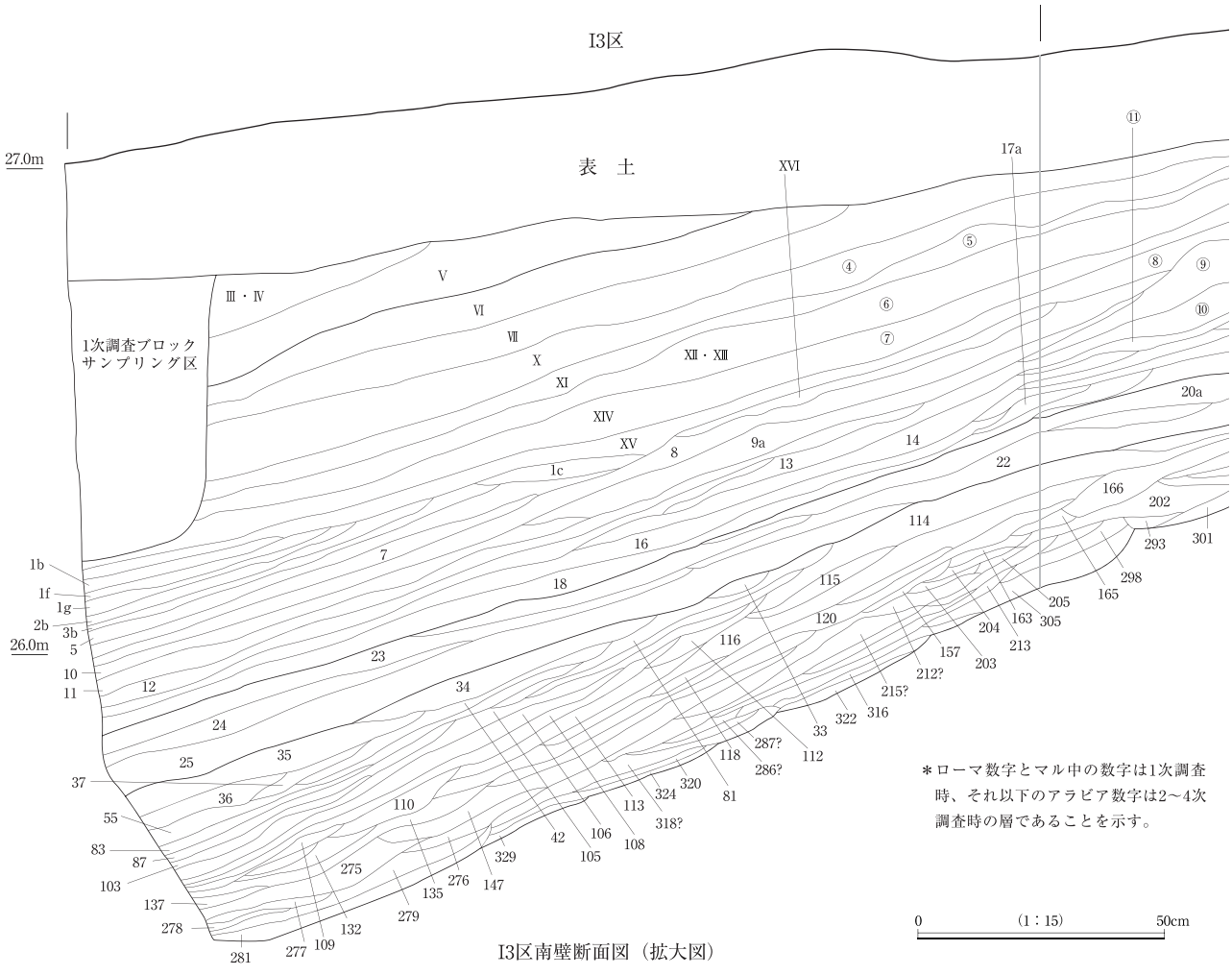


図17　宮城県中沢目貝塚HI3区断面図（須藤ほか1995）改変

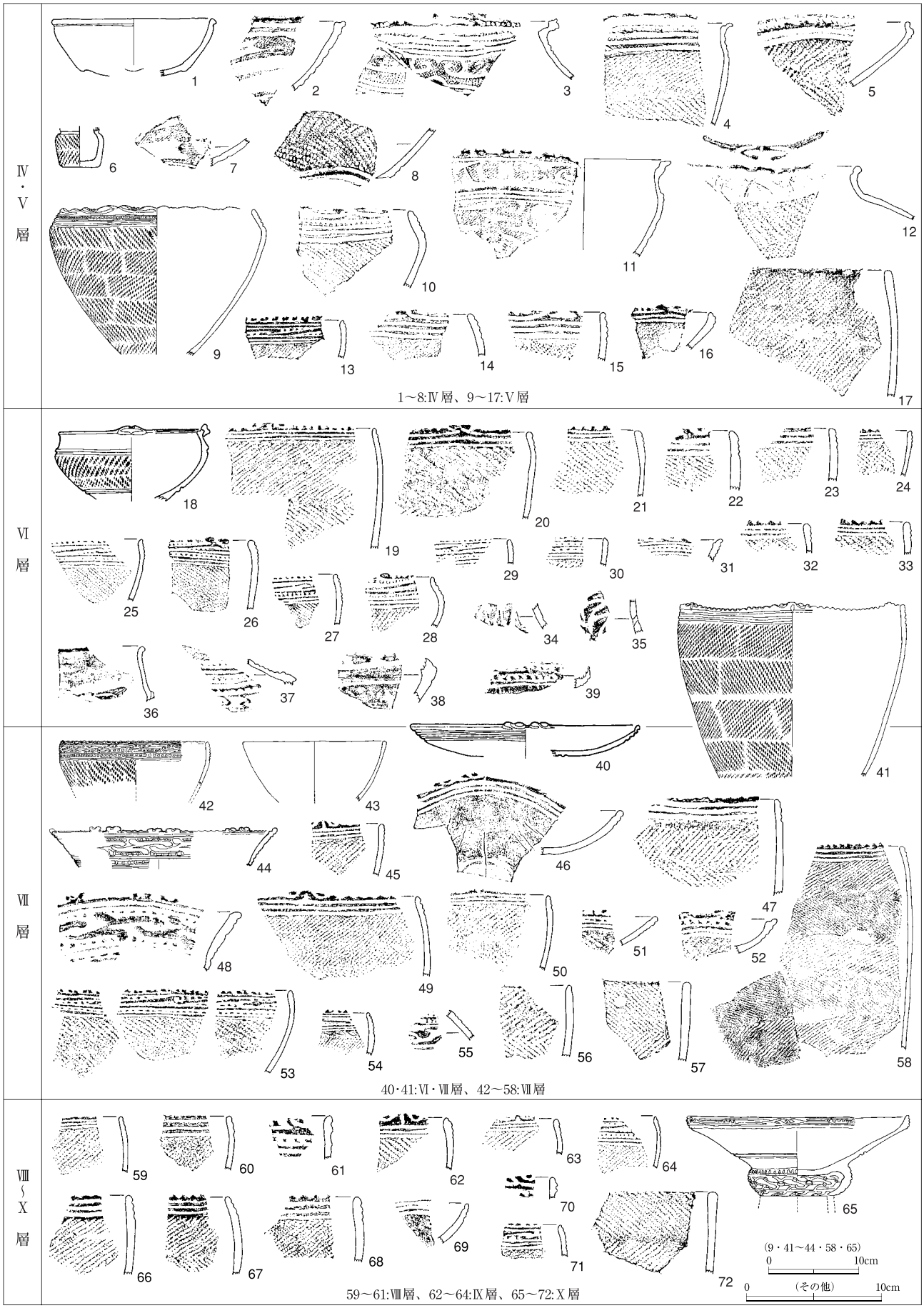


図18　宮城県中沢目貝塚Ⅰ3区出土土器（1）第1次調査

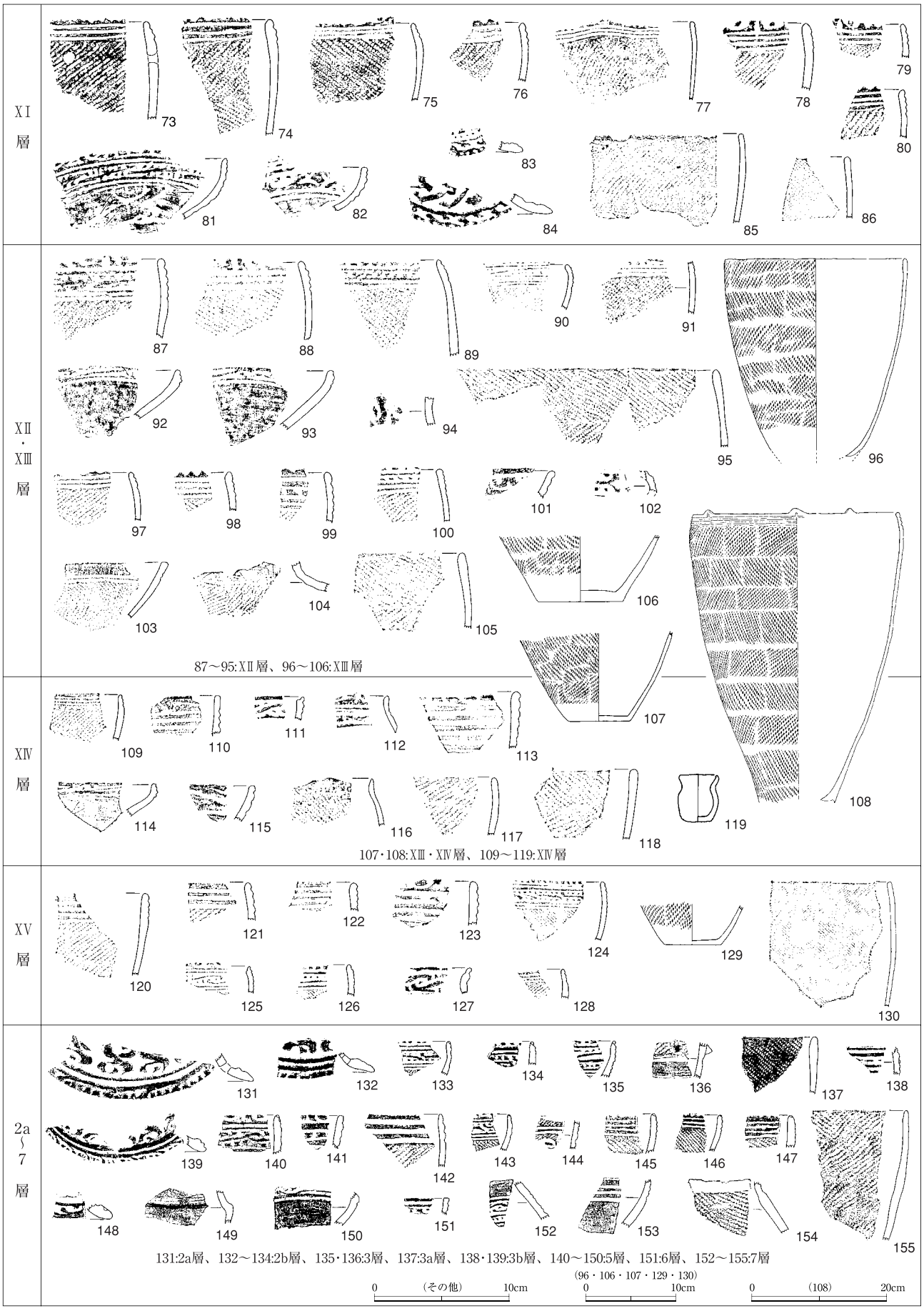


図19　宮城県中沢目貝塚Ⅰ3区出土土器（2）第1次・第2次調査

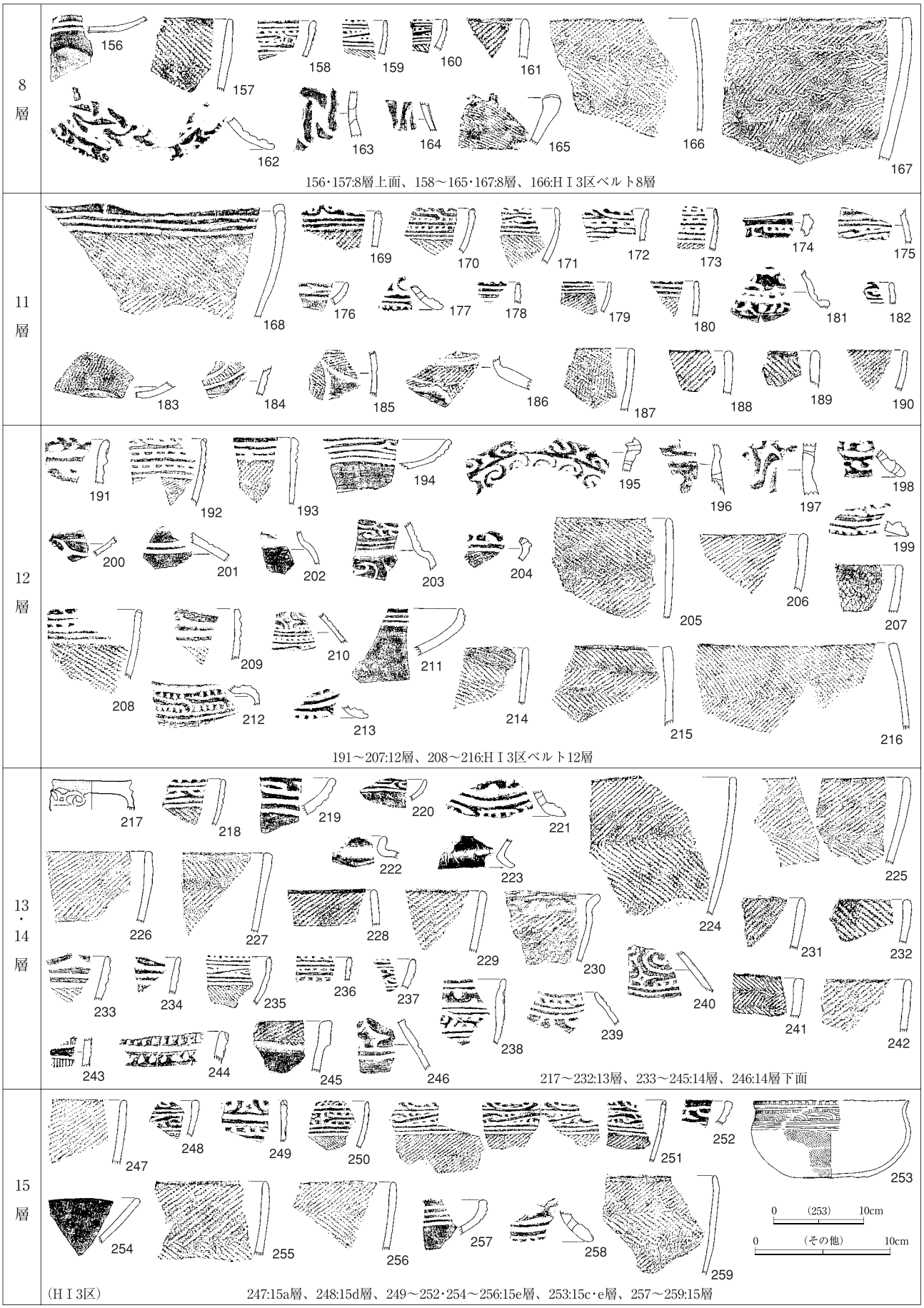


図20　宮城県中沢目貝塚Ⅰ3区出土土器（3）第2次調査



図21　宮城県中沢目貝塚Ⅰ3区出土土器（4）第2次調査

く、細かな纏まりとして捉えられている。

堆積層の時期は、以下のように比定されている（須藤1992ｂ：676頁、須藤ほか1995：34頁）。第１次調査のⅢ層～Ⅴ層で出土した土器群は「中沢目貝塚Ⅰ群土器」として晩期３期(大洞Ｃ１式期)、第１次調査のⅥ層～ⅩⅦ層と第２次調査の１ａ層～18層（19層？）にかけて出土した土器群は「中沢目貝塚Ⅱ群土器」として晩期２期(大洞ＢＣ式期)、第２次調査の19層（20ａ層？）～27層にかけて出土した土器群は「中沢目貝塚Ⅲ群土器」として晩期１期新段階（晩期１ｂ期:大洞Ｂ２式期)、第３次調査以降の34層以下から出土した土器群は「中沢目貝塚Ⅳ群土器」として晩期１期古段階（晩期１ａ期：大洞Ｂ１式期）に、それぞれ位置付けられている。

大洞Ｂ２式に相当する堆積層は薄く、層厚10～15㎝を

測るのみで、堆積状況も変化に乏しい。一方、下層の大洞Ｂ１式の堆積層は、層厚が厚く、廃棄単位として細かな纏まりが捉えられている。大洞Ｂ２式の堆積層は、前後の型式に比べると貧弱な内容を示しており、投棄活動があまり活発でなかったことを窺わせている。

（２）出土層位から見た「入組三叉文高坏」の変遷

図18～21は、中沢目貝塚の第１次調査の報告書（須藤編1984）と第２次調査の報告書（須藤ほか1995）から、Ｉ３区（第２次調査の15層以下はＨＩ３区）に限って資料を抜粋し、層位毎に図示したものである。

第１次調査のⅥ層より下層から第２次調査の19層までが、大洞ＢＣ式に相当する堆積層である（図18－18～図21－276）。断面図（図17）からは整然と堆積した状況が看取され、約65㎝の層厚が40枚以上の包含層に区分されている。この堆積状況は、長い期間にわたって投棄が繰り返された営為の結果を反映したものと推測されよう。

両次の報告を合わせると、Ｉ３区（一部ＨＩ３区を含む）では、入組三叉文高坏の口縁部資料が９点出土している。第１次調査と第２次調査の境界面を基準に当該資料を見てみると、第１次調査の図18－65（Ｘ層）や図19－114（ⅩⅣ層）は、口縁部が内折し、稜が形成されている。また、図19－92・93（ⅩⅡ層）も口縁部が狭小となり、入組三叉文高坏Ｂ類又は同Ａ２類に近似した様相を呈している。一方、第２次調査の図20－176（11層）・194（12層）・220（13層）・257（15層）は小破片であるが、口縁部が内彎して緩やかに立ち上がる入組三叉文高坏Ａ１類に相当しており、図20－211（ＨＩ３区ベルト12層）だけが口縁部が内折し直上する。

上記の事例から、口縁部が内彎して緩やかに立ち上がる入組三叉文高坏Ａ類（須藤氏の「高坏Ｃ１ｐ２類」）から、屈折が強くなる同Ｂ類（須藤氏の「高坏Ｃ１ｐ類」）への漸移的な変化を跡づけることが可能となろう。また、口縁部形態の変化に符合して、体部も内彎気味に立ち上がる形制から、直線的となる変化が看取される。

須藤氏は中沢目貝塚の層位的所見として、報告書とは別の論考の中で、「30層前後」を境に上層と下層では、形状に差異が存することを指摘している（須藤1984：13頁）。旧稿の30層が報告書のどの層位に対比されるのか判然としないが、提示された土器から判ずる限りでは、図20の15層前後と推察される[16]。しかし15層前後の資料は、前記したように入組三叉文高坏Ａ類に属するものであり、厳密な境界はより上位の層位に求めるべきであろう。ともあれ型式学的に導出された変化が、層位的にも追認されており、須藤氏の示した変遷観は首肯できる内容となっている。但し当該高坏の脚部や平行線文装飾深鉢の型式変化については、中沢目貝塚の層位的事例から有意な情報は導き出せない。

Ｂ　大洞Ｂ式期の三叉文施文の台付浅鉢

中沢目貝塚の層位的事例から、口縁部の内彎した形制が古的様相であることを追認したが、その母体は大洞Ｂ式期の黒色磨研の台付浅鉢に求めることができる。該期の北上川中～下流域や、仙台湾～南三陸沿岸にかけた臨海地域には、口縁部に魚眼状・入組・波状三叉文[17]を施した黒色磨研の台付浅鉢が分布している。

以下では、後期末葉～大洞Ｂ２式の三叉文施文の台付浅鉢について、検討を進めてみたい。

（１）大洞Ｂ１式の三叉文施文の台付浅鉢

大洞Ｂ１式について筆者は、大洞Ｂ１古式と同Ｂ１新式とに二分している。しかし台付浅鉢について、その区分を明確に説明することは困難である。

口縁部資料　図22－１～13は、東北中部から出土した後期末葉～大洞Ｂ１式の三叉文施文の台付浅鉢である。１は宮城県里浜貝塚風越地点（Ｍ区35層）から出土したもので、層位的には後期末葉に位置付けられる（小井川2004）。５・６は中沢目貝塚の大洞Ｂ１式の層準（ＨＩ３区255層）から出土したが、同式の堆積層でも比較的下位から出土しており、大洞Ｂ１古式に位置付けられるであろう。上記した３例（図22－１・５・６）は、出土層位から型式特定が可能な数少ない事例となるが、いずれも口縁部文様帯の装飾として、魚眼状三叉文が施されている。

図22－１を基準に後期末葉（金剛寺２ｂ式）の台付浅鉢を見てみると、口端の波状縁と体部上端に付された隆帯が、特徴として指摘されるであろう。図22－１の口端は緩い波状縁をなすが、円文直上の波頂部が三分され、一山状の頂部と交互に配される。口端の山形突起は、古相の浅鉢形土器に屡々認められており（図22－２・10・13）、大洞Ｂ２式まで継承される（図８－18・20）。上記した連続した波状縁や頂部が刻まれた山形突起は、後期末葉の特徴に挙げられる。

また図22－１の口縁部文様帯の下端（体部上端）には、隆帯の剥落痕が観察される。本来は２のような波状に張り出した隆帯が付されたものと推察され、口縁部が無文の台付浅鉢（図23－１・２）にも、同様の隆帯が認められる。隆帯上に沈線が加えられ連鎖状をなしたり（図22－２）、一山状の頂部と二分された頂部で構成される（図23－1・2）。後者の一山状突起の基部には、縦位の短沈線又は三叉状の陰刻が加えられることもあり、口縁部に文様帯が配された場合、隆帯は下限の区画帯となる。上記した波状隆帯は、口端の波状縁と形状が類似しており、後期末葉の特徴と見なされるが、晩期に残ったとしても精々大洞Ｂ１古式の段階までであろう。

次に、図22－５を基準に大洞Ｂ１古式を見てみると、口縁部の内彎の度合いが強まったことが指摘される。後期末葉の図22－１では、底部から体部にかけて彎曲し、口縁部が外傾して立ち上がるのに対し、図22－５は口縁部文様帯の部位で内側に彎曲している。口縁部の内彎は、前記したように大洞ＢＣ１式の入組三叉文高坏（Ａ１類）に顕在化しており、彎曲の度合いが漸次強まる経過が指摘されよう。

図22－５・６の口縁部文様帯の下端は、１条沈線で区画されている。大洞Ｂ２式の台付浅鉢は、２条の沈線（平行沈線）で区画された例が多いことから、１条の界線も古的様相と見なせるであろう。大洞Ｂ１式の図22－10の口縁部文様帯の下端には、縄文帯が囲繞されている。大洞Ｂ２式に多用される口縁部文様帯下端の平行沈線は、縄文帯の縄文地文が消失したことに由来すると想定されることから、装飾鉢類のⅡｃ文様帯（旧Ⅱｃ文様帯）の成立と一体の関係にあったと見なすことができよう。晩期文様帯としてのⅡｃ文様帯は、装飾鉢類の口頸部から縄文地文が消失したことで、大洞Ｂ２古式に成立しており（小林2005ａ:62－63頁）、台付浅鉢の口縁部文様帯の縄文地文は、大洞Ｂ２式以前の特徴となる。

三叉文の種類の中では、魚眼状三叉文が卓越する。魚眼状三叉文は、円文を囲うように三叉文を対称に配した構成と規定されるが、大きな円文を中心とした配置が古的様相で、円文から円形刺突への推移が想定されている（小林2005ａ：36－37頁）。須藤隆氏は、後期最終末の魚眼状三叉文が「篦描円文の中心に円形刺突が施されるのを特徴とする」のに対し、晩期初頭（大洞Ｂ１式）には「中心の円形刺突を失った魚眼状三叉文」となることを指摘している（須藤ほか1995：222頁）。晩期にも円文の中心に円形刺突を施した例（図22－10）が存しており、厳密な指標とはなり得ないが、円形刺突は後期末葉の瘤状突起の名残と見なされることから、変化の方向性としては穏当であろう。

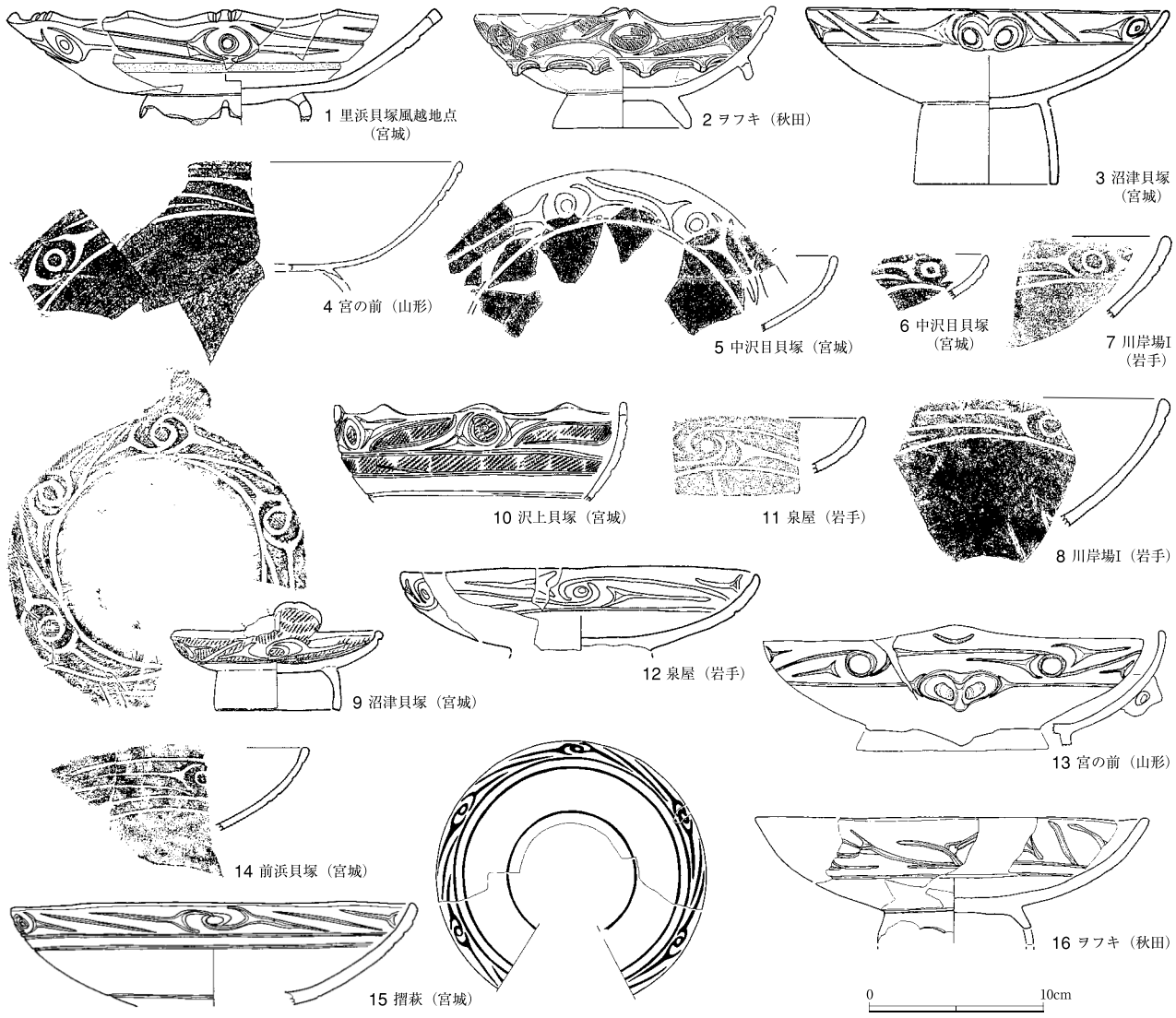
図22－１～７・10が、魚眼状三叉文に相当する。三叉文の主軸線が斜位に平行して、やや間隔を置いて配される（図22－１・２・５）が、その間に斜線が挿入された例も認められる（図22－４・８）。この斜線は沢上貝塚例（図22－10）のような入組帯状文が形骸化したものと理解され、左傾・右傾の両例が併存する。魚眼状三叉文の系譜が、後期後葉の入組帯状文の連繋部に派生した三叉状の陰刻にあったことを窺わせる。

図22－９は、大きな円文を巻き込む入組三叉文が４単位展開するが、主軸線間に同様の左傾の斜線が配される。入組三叉文は、魚眼状三叉文と同様に円文を巻き込む形態が古的様相で、次第に円形刺突に収斂される推移が想定されている（小林2005ａ：36－37頁）。同例には、二山状の大型突起が１単位のみ配されている。この大型突起は、大洞Ｂ２新式～ＢＣ２式に盛行する珊瑚状突起の初現と見なされるもので、大洞Ｂ１新式に現出しており、９も同式に相当すると考えられる（小林2005ａ：30－35頁）。

図22－11～13は、波状三叉文で構成されている。波状三叉文は、後期末葉の横位に連続する入組帯状文の系譜を引くもので、入組帯状文の主描線が１条のみで、円文に類する連繋部を中心に上下に対向した三叉文が配される。11・12の連繋部中心の円形刺突は、後期末葉の瘤状突起の名残であろう。

図22－３・13には、環状の粘土紐を貼り合わせ摘み出したような眼鏡状突起が、１単位付されている。正面性を有し、横位に穿孔された例（13）も存することから、後続型式に見られる縦長突起との関連が想定される（小林2005ａ:34頁）。３について須藤隆氏は、後期最終末に位置付けている（須藤1984:29頁）。しかし口縁部文様帯の縦位又は斜位の平行沈線は、大洞Ｂ１式の装飾鉢類に多用されることから、大洞Ｂ１古式の可能性も考えられる（小林2005ｂ：241頁）。

脚部資料　東北中部の後期末葉～大洞Ｂ１式の台付浅



1･2：後期末葉、3～13：大洞B_1式、14～16：大洞B_2式

図22　東北中部から出土した後期末葉～大洞B_2式の三叉文施文台付浅鉢

鉢には、接合部直下が外側に膨らみ、透かしが穿たれた例が、屡々認められる。図22－１には、脚部が僅かに残存しているが、凸彎した脚部に、菱形の透かしの一部が観察される。

図23－１～10は、後期末葉～大洞Ｂ１式の台付浅鉢の脚部資料である。口縁部が無文となる例が殆どであるが、１・２は体部に付された波状隆帯から、後期末葉に位置付けられよう。脚部は規格性が強く、２段で構成されており、凸彎部は球状に緩く張り出し、裾部は僅かに外傾して底面に接している。図22－１にも、同様の脚部が付されていたと想定される。

凸彎部は比較的幅広に作出され、透かしが穿たれる。透かしの意匠は、対向した三角形や菱形が通例で、交互に配された例が多い（図23－１・５・６～９）。三角形や菱形のように先端を尖らせた透かしは、該域の後期後葉の香炉形土器や台付異形土器に屡々認められる。更にその遡源が、後期中葉の台付異形土器に求められることから、後期末葉になって台付浅鉢に取り込まれたと見なすことができるであろう[18]。

裾部は無文が通例で、上下幅が広く、垂直に近い角度で外傾する。僅かに内彎した例も見られる（図23－８・10）が、後続型式のような強く外反した形制は認められない。裾部の径は凸彎部の径よりもやや上回るか同程度であり、脚端は平坦乃至は緩やかな丸味を持って仕上げられる。

上記した台付浅鉢は、仙台湾沿岸部を中心として、南三陸沿岸域から仙北湖沼地帯にかけて分布している。遠隔地では山形県宮の前遺跡（図23－３）で出土している

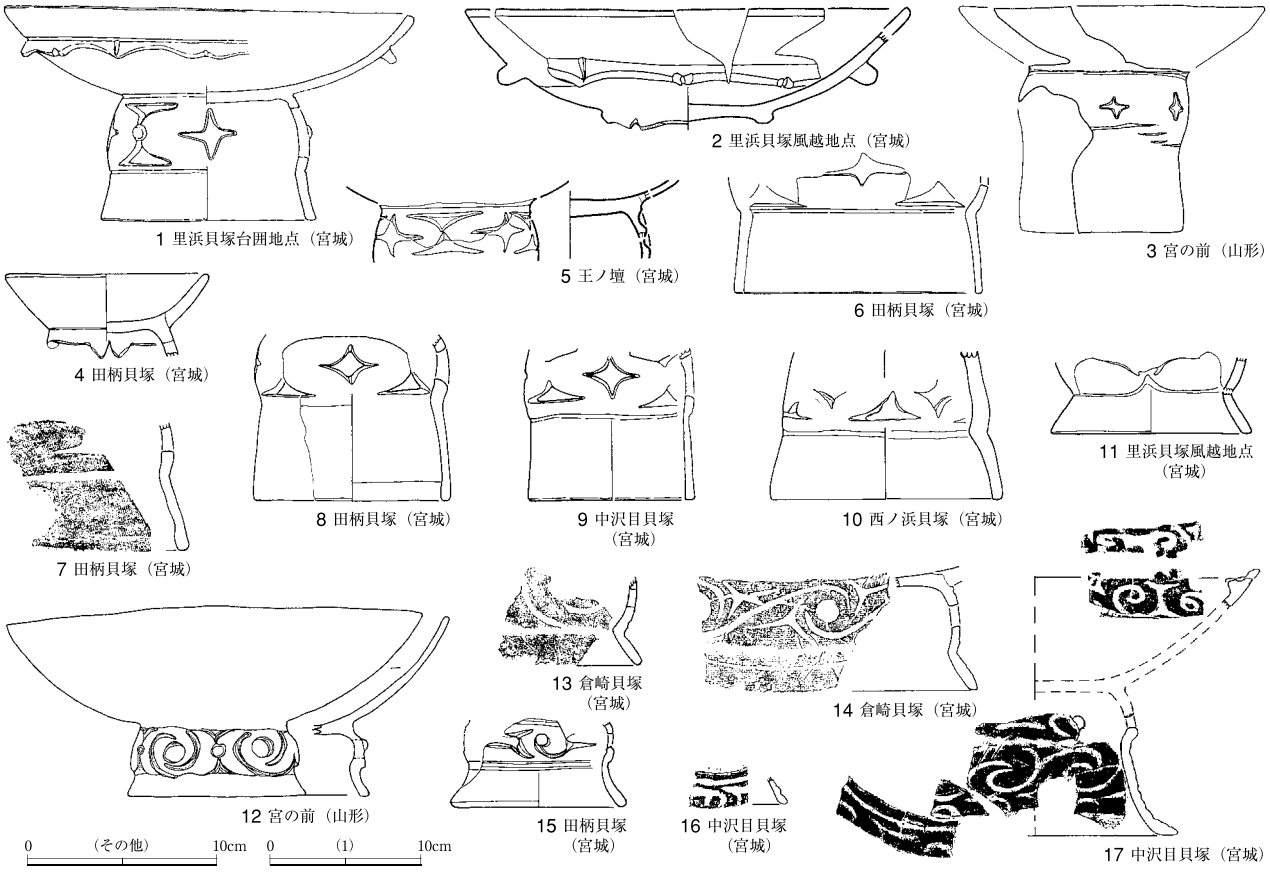


図23　東北中部から出土した後期末葉～大洞B_2式の台付浅鉢脚部資料

が、大洞ＢＣ式の入組三叉文高坏の分布域とほぼ重複している。また接合部直下の凸彎部の作出と透かし文様の特徴にも、共通性が認められる。上記から、当該土器が入組三叉文高坏の脚部の母体となったことは、確実であろう。

（２）大洞Ｂ２式の三叉文施文の台付浅鉢

大洞Ｂ２式についても、筆者は大洞Ｂ２古式と同Ｂ２新式とに二分しているが、大洞Ｂ１式と同様に台付浅鉢について、その区分は明示できない。

口縁部資料　口縁部資料で大洞Ｂ２式に位置付けられるのは、図８－18～28、図22－14～16である。口縁部の装飾としては、円文を囲った魚眼状三叉文（図８－18・22、図22－14）と、円文を巻き込んだ入組三叉文（図８－19・23・25、図22－15）が展開する。

管見の限りでは、入組三叉文高坏に関連する大洞Ｂ２式台付浅鉢の完形資料は見出せないが、典型となるのは宮城県摺萩遺跡出土の浅鉢形土器（図22－15）[19]である。同例は、大洞Ｂ２式の堆積層（第１遺物包含層67ｂ層）から出土している（柳沢ほか1990）。底部から口縁部にかけて内彎して立ち上がる形制で、底部が欠損し、高台の有無は判然としないが、台が付されと考えられる。口縁部文様帯は円文を巻き込む入組三叉文と右傾の斜線が、交互に推定６単位配され、下端は平行沈線で画される（図12－２）。また体部下半には、１条の沈線が囲繞される。口縁部の装飾は先行型式を踏襲しているが、口縁部文様帯下端の平行沈線と体部下半の沈線に、新しい様相を見て取ることができる。いずれも後続する入組三叉文高坏に継承される属性である。

当該期の口縁部文様帯下端の平行線は、通常幅広に描出される（図８－１・18・20～28、図22－14～16）。大洞ＢＣ式の入組三叉文高坏では、沈線の幅と挟まれた陽刻部の幅が同程度となるが、大洞Ｂ２式では沈線間の方が広く、縄文帯の名残を留めている。口縁部文様帯の狭小化と相俟って、幅広の平行線から、密着した平行線への変化が想定される。

大洞Ｂ２式では体部下半に１条の沈線が囲繞される（図８－23・25、図22－15）が、図示した後期末葉～大洞Ｂ１式の台付浅鉢では、沢上貝塚例（図22－10）以外に認めることができない。大洞Ｂ２式になって顕在化することから、浅鉢自体にその系譜があるのではなく、装飾鉢

類からの影響関係が想定されよう。大洞Ｂ２式～ＢＣ２式の装飾鉢類には、底部直上に無文帯が作出された例が多く見受けられる。体部下半に沈線を巡らし、その直下から底部までを研磨して無文帯としたもので、特に大洞Ｂ２式～ＢＣ１式では、上端が１条の沈線で区画される（小林2005ａ：72頁）。装飾鉢類の底部直上の沈線が、台付浅鉢の体部下半に写し込まれたことが想定され、この１条沈線が大洞ＢＣ式入組三叉文高坏の段階になって、平行沈線に変化したと考えられる。

大洞Ｂ２式の浅鉢形土器には、口縁部文様帯上端の区画線が屡々認められる（図８－18･19･21）。筆者が図示した後期末葉～大洞Ｂ１式の台付浅鉢（図22）は、口縁部上端が区画されず、口端に露出した例が殆どである。しかし後期後葉には、口端を画した台付浅鉢が存しており、その系譜が脈々と受け継がれていたことも想定される。但し当該浅鉢の口縁部の文様帯は、比較的幅広に構成されており、狭小な文様帯からなる入組三叉文高坏には、継承されることはなかったと考えられる。

また大洞Ｂ２式の浅鉢形土器には、文様帯幅の狭小化が進行して、口縁部文様が密着して施された例も認められる（図８－24･26～28）。口縁部付近で内彎した形制をなし、入組三叉文も横位に伸長しており（図12－３）、入組三叉文高坏成立前夜の様相を窺わせる。大洞Ｂ２式の三叉文施文台付浅鉢から、大洞ＢＣ式の入組三叉文高坏が生成したとの理解に立つならば、上記した浅鉢が大洞Ｂ２新式に位置する公算が高いであろう。

脚部資料　脚部資料では図23－17が、中沢目貝塚の大洞Ｂ２式の層準（ＨＩ３区27層）から出土しており、指針となろう。同例は口縁部と脚部の資料であり、体部から脚部上端を欠損するが、器高11㎝、口径23㎝、脚高８㎝を測り、入組三叉文高坏と同程度の法量と推定されている（須藤ほか1995：68頁）。黒色磨研の丁寧な作出で、口端は内面に強く突き出し、幅広の端面をなし、端面外側に突起（三山状突起？）とその内側に陰刻文様が展開する。口縁部の文様帯は、上下で対向した三叉状陰刻の頂点が連結し「工字状」を呈しており、その一端が伸びて渦を巻く「Ｃ字文２類」（小林2005ａ：52頁）が展開する。巴状の陽刻部が作出され、入組三叉文とは異なった文様構成であり、入組三叉文高坏への系統的な連絡は認め難い。対向した棘状陰刻が連結したＣ字文は、大洞ＢＣ１式以降に顕在化することから、同例は大洞Ｂ２新式に相当する可能性が考えられる（小林2005ａ：56頁）。なお図23－16も、大洞Ｂ２式の層準（ＨＩ３区22層）から出土している。

図23－12～15は、16・17に先行する大洞Ｂ１新～Ｂ２式に位置付けられるであろう。凸彎部に円孔が穿たれ、裾部は短く外反気味に開く形制となる。12にはＣ字文の原初的形態が、また14には横位連繋の入組帯状文の系譜を引く波状三叉文が認められる。15は浅鉢の脚部となるのか判然としないが、大洞Ｂ２式に位置付けられる。凸彎部は一方のみが円孔を巻き込む入組三叉文２ｂ類（小林2005ａ：36頁）で構成されており、東北北部では頸胴部界の屈折した装飾鉢類に一般的な高台である。

大洞ＢＣ式の入組三叉文高坏の脚部には、後期末葉の台付浅鉢からの強い系統性が窺える。大洞Ｂ２新式の脚部（図23－17）は３段で構成され、接合部直下は凸彎状に緩く張り出し、脚柱部は垂直から外に向かって下方に開き、裾部は強く外反して底面に接着する。凸彎部の装飾は円孔が穿たれ、弧線文と鼓形区画？が交互に施される。脚柱部の装飾は、正確な復元は困難であるが、矩形文様の一端が伸びて反転して下方の文様に連結した構図で、下端には上閉じの弧線文も加えられる。透かし文様は穿たれず、陰刻は細く、縁取られた陽刻部は幅広に描出される。裾部の装飾は、上閉じの弧線文と下端を欠いた鼓形区画乃至は左側上方に突き出た鉤爪状区画と推定される。先行する大洞Ｂ１式の脚部は、凸彎部と裾部の２帯構成であったが、大洞Ｂ２新式では凸彎部の上下幅が縮小する一方で、従前の裾部が伸張しており、脚柱部と裾部とに分離する。大洞Ｂ２式台付浅鉢の裾部は後続する入組三叉文高坏に比べると、上下幅を有しているが、装飾意匠は入組三叉文高坏に多用される鉤爪状区画が施されており（図23－16）、前駆的様相が認められる。凸彎部や裾部の文様帯幅が狭まる一方で、脚柱部が発達して、脚部全体の装飾がより繁縟となり、透かし文様が多用されることで、入組三叉文高坏の成立に至ったと推測される。

Ｃ　大洞ＢＣ式の高坏（台付浅鉢）について

仙北湖沼地帯において入組三叉文高坏が盛行していた同じ時期、異なる特徴を持った高坏が東北一円に散見される。一般には台付浅鉢の範疇に含まれているが、ここ



図24　大洞BC式の高坏・台付浅鉢集成図

では体部を凌ぐ高い高台が付されたものについて、高坏として弁別しておきたい。

図24－２～７は、東北北部で出土した大洞ＢＣ式の高坏のうち、装飾性に富む脚部を持った例である。多くは頸胴部界又は口縁部直下で屈折しており、体部には縄文地文が施され、口端にはＢ突起を組み合わせた正面性を有する装飾が配されている。この口端の装飾は、大洞Ｂ２新式～ＢＣ２式に盛行した珊瑚状突起の系譜を引くもので、突起内面には隆線文様が施される（小林2005ａ：30－35頁）。

図24－２・３は、大洞ＢＣ１式の高坏であろう。２は、頸部文様帯に末端の咬み合わない羊歯状文（羊歯状文２類）が施され、体部は無文となる。羊歯状文は対向した鉤爪状区画で構成されるが、突出部の先端同士は貫通せず、左傾の主軸線の基部同士が連結する。刻まれた陰刻が細く、「連結原則」（村田2000）が遵守されていないこ

とから、祖型的な羊歯状文と見なされよう。脚部上半には刻み目を持った隆帯が囲繞され、脚柱部には鼓形透かしと円文（円孔）の交互配置が２帯、更に裾部にも半円を囲う両端の開いた三叉状の陰刻文様が施される。

図24－３は、頸部に「Ｃ字文２類」と体部に「Ｃ字文１類」が展開するが、棘状陰刻はいずれも連結しており、当該期を表徴する文様構成である（小林2005ａ：52－57頁）。接合部直下には、僅かながら外側に張り出した凸鬱が認められる。末端の咬み合う羊歯状文（羊歯状文１類）が展開しており、咬合部は円孔となる。脚柱部は「Ｃ字文２類」で構成されており、渦巻文の末端には円孔、対向した棘状陰刻には三角形の透かしが穿たれる。

図24－４・５も、同期に位置すると考えられる。共に接合部直下が幅広に緩く張り出し、裾部が外に強く開く形制で、４の凸鬱部は２段で構成され、５の凸鬱部には対向した三角形の透かしが穿たれる。

図24－７は、青森県是川中居遺跡出土の著名な高坏（八戸市博物館1985:59頁21）である。凸鬱部は二分されており、上下共に円孔と対向した三角形の透かしが交互に配され、その中間には陰刻で縁取られた入組文様が帯状に展開する。裾部は外に開く形制で、半円と鼓形の陰刻文様が交互に配されることから、大洞ＢＣ１式に位置付けられる。

図24－６は、大洞ＢＣ２式の高坏である。口縁部直下の外折化（新生Ⅱｃ文様帯）と体部下半の平行沈線は、大洞ＢＣ２式の特徴である（小林2005ａ：63－64・72頁）。同例の脚部は２段で構成されており、共に繁縟な装飾が施される。上段は僅かに張り出した形制で、凸鬱部の痕跡を留めている。下段は脚柱部に相当し、外反気味に開いており、小さな円孔が穿たれる。

図24－８・９は、新潟県北部の朝日村元屋敷遺跡から出土した高坏である。共に頸胴部界で屈折しており、体部に「Ｃ字文２類」が施される。８の脚部の凸鬱部には、鼓形透かしと円孔が交互に配置され、９の凸鬱部は中央で二分され、上下段それぞれに菱形透かしが穿たれる。

以上のように、大洞ＢＣ式においては屈折した器形で、口端に正面性を持った装飾の配された高坏が卓越する。また屈折部には、縦長のＢ突起が付される傾向が看取される。この突起は括れを持つ器形との相関性が強く、大洞Ｂ２新式の浅鉢形土器に現出する（小林2005ａ：73頁）。また脚部においては、凸鬱部が作出され、円形や三角形、、菱形、鼓形の透かしが穿たれており、多帯化した構成となる。

３の脚部は、入組三叉文高坏の形制に酷似している。凸鬱部・脚柱部・裾部の３段の構成で、脚柱部は垂直に降下し、裾部が強く外側に開く。装飾意匠は必ずしも合致しないが、透かしを穿つ手法には共通性が認められる。２の脚部の鼓形透かしと円文（円孔）の配置も、入組三叉文高坏と共通しており、時期的な関連を想起させる。

４・５のような上下幅の広い凸鬱部は、大洞Ｂ２新式～ＢＣ１式の特徴となる。同時期の壺形土器の頸部と肩部の境界にも、凸鬱部が発達していることから、相互の関連が想定される。４・７・９の凸鬱部は、中央で分帯されている。このように凸鬱部が発達して、裾部の幅よりも上回り、中央が分帯された資料は、後述する大洞Ｃ１式の隆帯を囲繞した高坏・台付浅鉢に継承されたと考えられる。

また是川中居遺跡では、大洞Ｂ２新式～ＢＣ１式の赤漆塗り木製台付杯（図24－１）が出土している。トチノキを刳り貫いて作製されたもので、上面から見た形状は楕円形で、口径は18.6㎝×13.1㎝を測る。坏部は非常に浅く、屈折しており、口頸部と体部の２帯の文様帯で構成されている。前者には、２の裾部と同様の半円を囲う両端の開いた三叉文が展開しており、編年的位置の根拠となろう。脚部は上半のみ残存するが、接合部直下に微かな凸鬱状の膨らみが観察される。復元図（図24－１ｂ）では、中央の区画線を挟んで上下段とも、１段と２段の円孔が交互に穿たれるが、実測図（図24－１ａ）では２段の透かしは楕円形を呈しており、対向した三角形の透かしを企図した構成であったと推察される。恐らく区画線が中央になるように弱く張り出し、裾部が強く開く、４や７に類似した形制であったと考えられる。従って、脚部に複雑な装飾を施した土製高坏と木製高杯には、相互の関連性が指摘され、木製高杯が土製高坏の透かしの意匠のモデルになっていた可能性も考えられよう。

Ｄ　大洞Ｃ１式の高坏（台付浅鉢）について

大洞Ｃ１式期には、皿形の体部に脚部を付けた形態の高坏（台付浅鉢）が盛行しており、主要器種としての地位を確立する。極めて装飾性に富み、薄手の精巧な造作

で、装飾は口唇の陰刻と突起、体部の文様、脚部の文様から構成される（高橋龍三郎1981：13頁）。

図25は、東北中部～北部にかけて出土した同式の高坏である。体部と脚部の高さがほぼ等しく、口縁部から緩やかにカーブをしながら底部に至る器形で、内面の底面は平底乃至は丸底で、一段低く作出され円形の窪みとなる例が多い。

口端の装飾は、広い端面に規則的な陰刻によって縁取られた２個一対の突起列が巡らされる。陰刻は１種類を連続したもの（図25－１・２）と、２～３種類を規則的に配列したもの（図25－６・７）があり、隆起帯を生じさせており、刻み目を加えたり、ソラ豆状突起を配した例も認められる。その装飾は、同式の浅鉢形土器[20]に共通しており、平縁で構成された大洞ＢＣ式の入組三叉文高坏には、認められない特徴である。

体部は、磨消縄文による曲線的な文様で装飾される。亀ヶ岡土器の象徴とも言える半肉彫的手法が極度に発達しており、Ｋ字文系や雲形文系等の曲線に富んだ複雑な文様で構成される。意匠は同じでも、縄文地文を欠いた例も存している（図25－７・８）。これ等の体部の装飾は、同式の浅鉢形土器や椀形土器[21]に共通しており、体部の文様が平行沈線を除いて無文となる入組三叉文高坏とは、全く様相を異にしている。

脚部は、接合部直下から末広がりに外傾し、外反気味に開くのみで、裾部は入組三叉文高坏のような強い張り出しとはならない。裾部は通常２条の沈線で区画され、上下幅が狭く、縄文地文以外の装飾を持つ例は少ない。脚柱部は、縦位に展開する曲線的な陰刻文様と三角形の陰刻による、比較的簡素な文様で構成されており、円形や三角形の小さな透かしが穿たれた例が多い。

大洞ＢＣ式に特徴的な接合部直下の凸鬱部は、一部に残るのみで、消失の経過を辿っている。図25－１には、接合部直下に緩い凸鬱部が認められる。同例の口端の装飾は、大洞ＢＣ２式から連なるＢ突起列で、また体部の磨消縄文の文様は、咬合部が紡錘形となる２個の単一主要素で構成されることから、大洞Ｃ１式の古段階に位置付けられよう。このように接合部直下の凸鬱部は、大洞ＢＣ式の系譜を引く古的様相と見なされよう。

大洞Ｃ１式の高坏は、口端・体部・脚部の装飾の定型化が著しく、東北一円にその広がりが認められる。一方大洞ＢＣ式の入組三叉文高坏は局地的な広がりでしかなく、対照的な在り方を示している。入組三叉文高坏を構成する属性のうち、広域的に分布する大洞Ｃ１式高坏に継承されたと断言できるものは、殆どなかったのが実態であろう。大洞Ｃ１式高坏の脚部の縦位方向に伸びた曲線的な陰刻と透かし文様を、入組三叉文高坏に関連づける向きもない訳ではない（須藤1996:23頁）。また法量においても、口径が20㎝程度、器高も10㎝程度と近似しており、底面の円形の窪みも槻ノ木遺跡例（図６）にその萌芽が認められる。しかし先に見たように、脚部の装飾は東北地方の大洞ＢＣ式の台付浅鉢・高坏に広く認められる特徴であり、入組三叉文高坏から直接継承された積極的根拠は見出せない。その他の属性についても、同様と言えよう。

入組三叉文高坏の特徴である接合部直下の凸鬱部は、大洞Ｃ１式の高坏にも一部認められるが、東北北半の同期の高坏（台付浅鉢）には、凸鬱部が隆帯化し、裾部が強く張り出した例が散見される。その典型となるのが、青森県上尾駮（かみおぶち）（１）遺跡例（図26－１）と亀ヶ岡遺跡例（図26－２）である。前記したように東北北部の大洞ＢＣ式の高坏の中には、幅広の凸鬱部の中央が分帯された例（図24－４・７・９）が存している。この中央の区画帯が漸次隆帯化したと見なされるもので、注口土器の肩部と歩調を合わせた変化であったと推察される（小林2003：５頁）。

上記した高坏（台付浅鉢）の凸鬱部の形制は、隆帯を挟んで算盤玉状を呈しており、上下の幅が同程度となる。隆帯上には陰刻で縁取られた突起やＢ突起が付され、その間には陰刻文様が加えられる。突起は通常４単位で構成され、その中間にも瘤状の高まりが認められる。隆帯の上下には、縦位の短線や弧線の透かしが、それぞれに穿たれており、対向した三角形透かしを伴った例（図26－９）も存在する。裾部は強く張り出した形制で、沈線が囲繞されるのみで、縄文地文以外の装飾は認められない。

上記した脚部は、東北北部を中心にした地域で出土している。東北北部では典型資料である上尾駮（１）遺跡（図26－１）と亀ヶ岡遺跡（２）の他に、是川中居遺跡（八戸市博物館1985:59頁22）や秋田県白坂遺跡（３）で出土している。北上川中流域では岩手県上平遺跡（５・

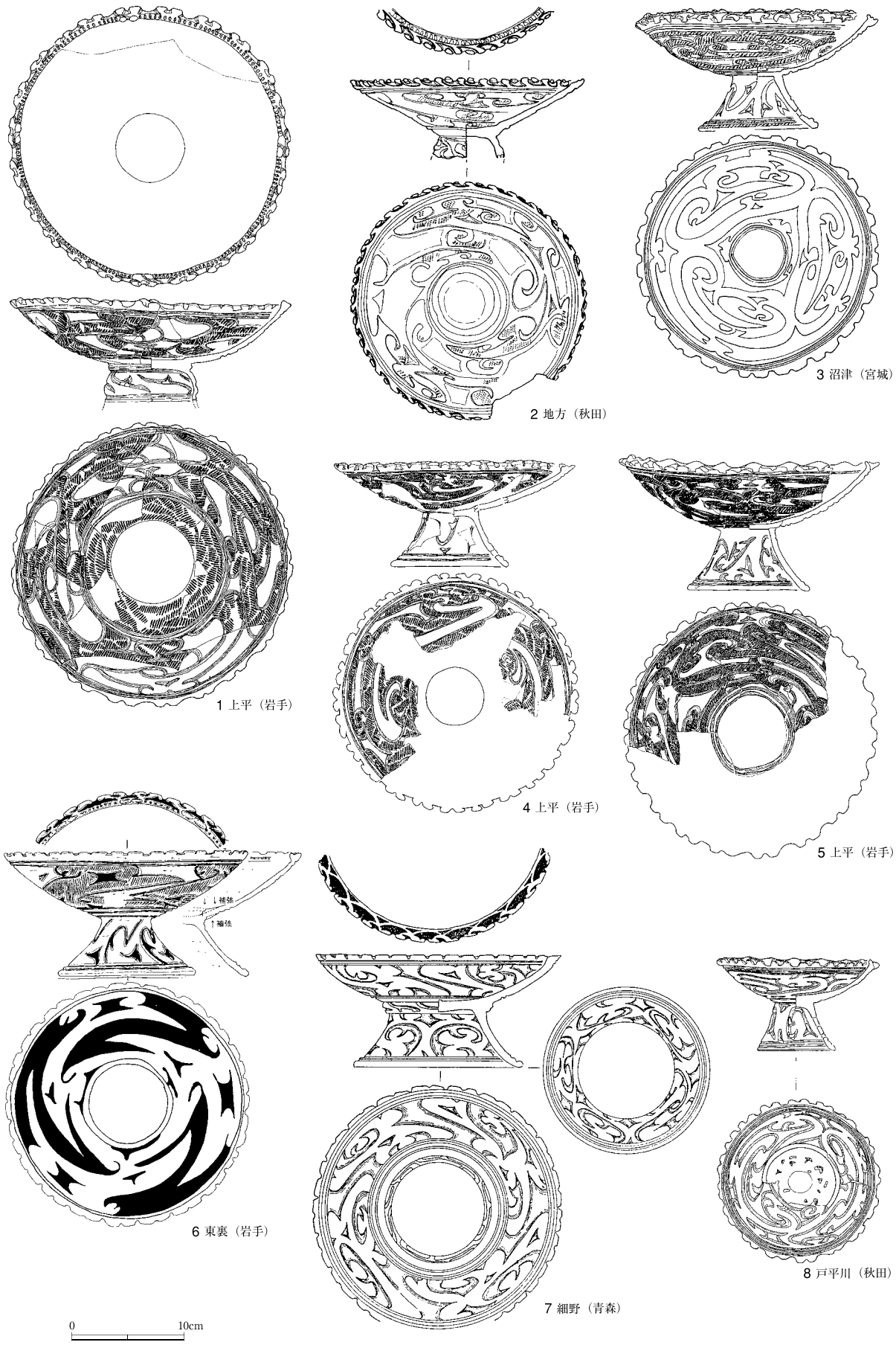


図25　磨消文様を施した大洞C1式の高坏・台付浅鉢

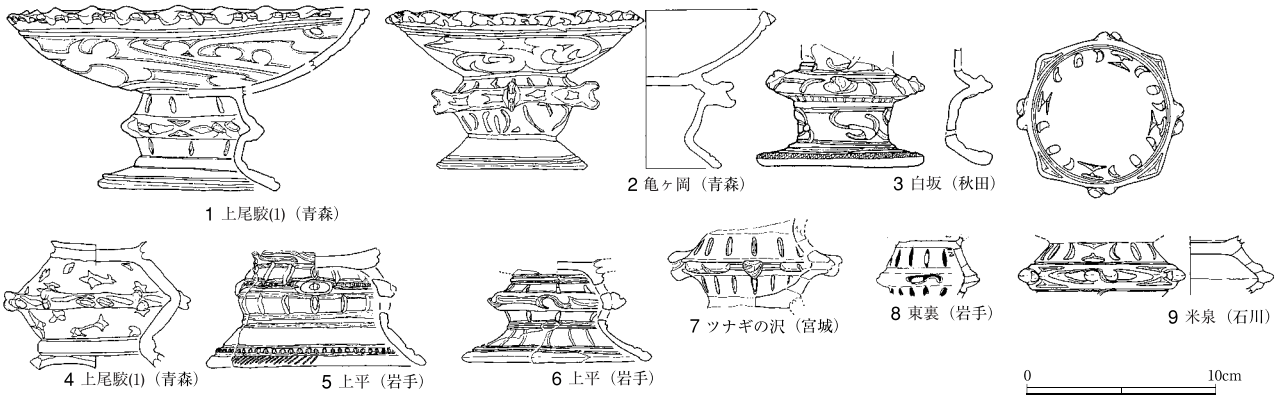


図26　凸彎部の発達した大洞C1式台付浅鉢(高坏)

6）や東裏遺跡（8）、仙北湖沼地帯では宮城県ツナギの沢貝塚（7）で出土しており、遠隔地の出土例としては石川県金沢市米泉（よないずみ）遺跡例（9）を挙げることができる。同例は1の脚部に類似していることから、東北北半からの搬入品であった可能性が考えられる[22]。

以上のように大洞C1式の高坏には、同BC式の入組三叉文高坏からの影響を殆ど認めることができない。寧ろ同時期の浅鉢形・椀形土器との相関性が強く、東北北部の大洞BC式の高坏（台付浅鉢）の系統下にあるものの、同C1式になって新たに確立された器種と見なすことができるであろう。

E　小　結

入組三叉文高坏は、仙台湾周辺に分布する後期末葉～大洞B1古式の黒色磨研の台付浅鉢を母体として、大洞B2式の台付浅鉢を経て、同BC1式になって成立した器種類型と考えられる。

口縁部においては、大洞B1古式以来の魚眼状・入組三叉文施文の（台付）浅鉢の系譜を引くと見なされ、口縁部の内折が漸次強まって、それに連動して口縁部文様帯の上下幅が狭小となる経過が観察される。大洞B2式の台付浅鉢では、口縁部文様帯下限の平行沈線と体部下半の1条沈線が顕在化し、入組三叉文高坏の坏部を構成する属性が出揃うに至り、更に同式の新段階には、入組三叉文の主軸線が伸長して、文様の密着化が進行する。このような過程を経て、大洞BC1式に入組三叉文高坏の成立を見るが、口縁部の装飾意匠には大洞BC式期を通じて大きな変化はなく、口縁部直下の稜の形成や体部の直線化と言った形制の変化が看取される。

脚部においても、後期末葉～大洞B1古式の黒色磨研の台付浅鉢の系譜を引くと考えられる。当該土器の脚部は、球状に張り出した凸彎部と、垂直に近い傾きの裾部の2段で構成されており、凸彎部の三角形や菱形の透かしに特徴付けられる。大洞B2式では凸彎部が縮小する一方で、裾部が伸張して脚柱部と裾部とに分離する。端部が外に開いた形制へと変化しており、更に装飾が繁縟となることで、入組三叉文高坏の確立に至ったと想定される。

しかし当該高坏は、後続する大洞C1式に継承されることはなく、同BC2式の終末段階で姿を消したと考えられる。その背景には、装飾体系に大きな変化が生じ、体部に磨消文様を展開した高坏（台付浅鉢）が、東北一円に席捲して、主要器種の一翼を担うに至り、仙北湖沼地帯でも入組三叉文高坏に取って代わったことが想定される。入組三叉文高坏は、飽くまで局地的な器種類型に過ぎず、広域的に影響を与えることはなかったと見なされるであろう。

6　「入組三叉文高坏」の分布

入組三叉文高坏は、その分布が北上川中流域や三陸海岸･仙台湾などの沿岸部には認められず、北上川下流域･迫川流域の湖沼地帯において、径50～60㎞程の拡がりに限定され、著しく地域色の強い器種類型であることが指摘されている。以下では、その分布を具体的に跡づけてみたい。

A　「仙北湖沼地帯」における出土例

北上川下流域及び迫川・江合川・鳴瀬川流域の湖沼地帯である仙北湖沼地帯では、11ヶ所の貝塚・遺跡から当該高坏が出土している（図28）。中沢目貝塚以外の資料は、同報告書（須藤編1984）や須藤氏の論考（須藤1984）の中で、断片的に紹介されてきたに過ぎないが、近年登（と）

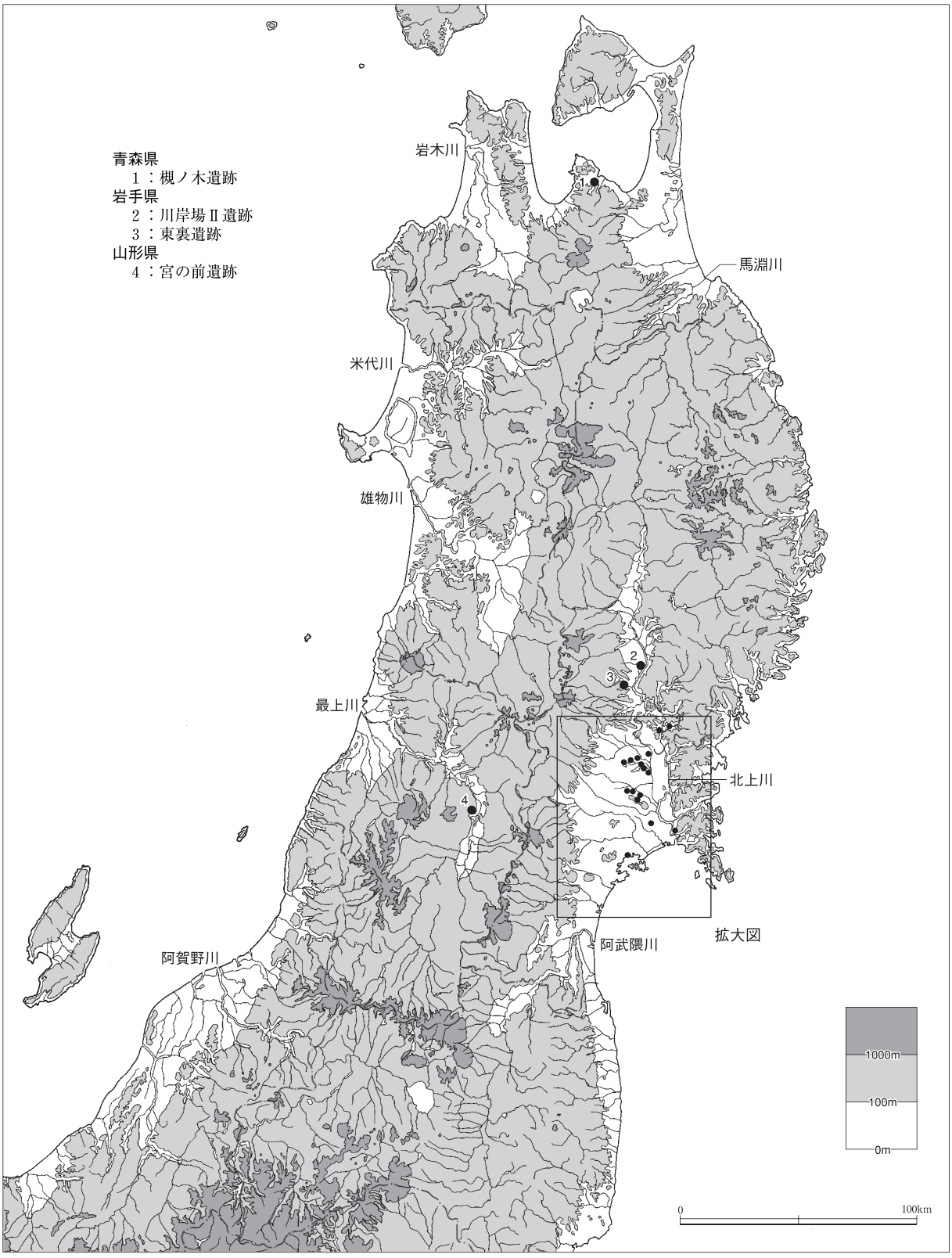
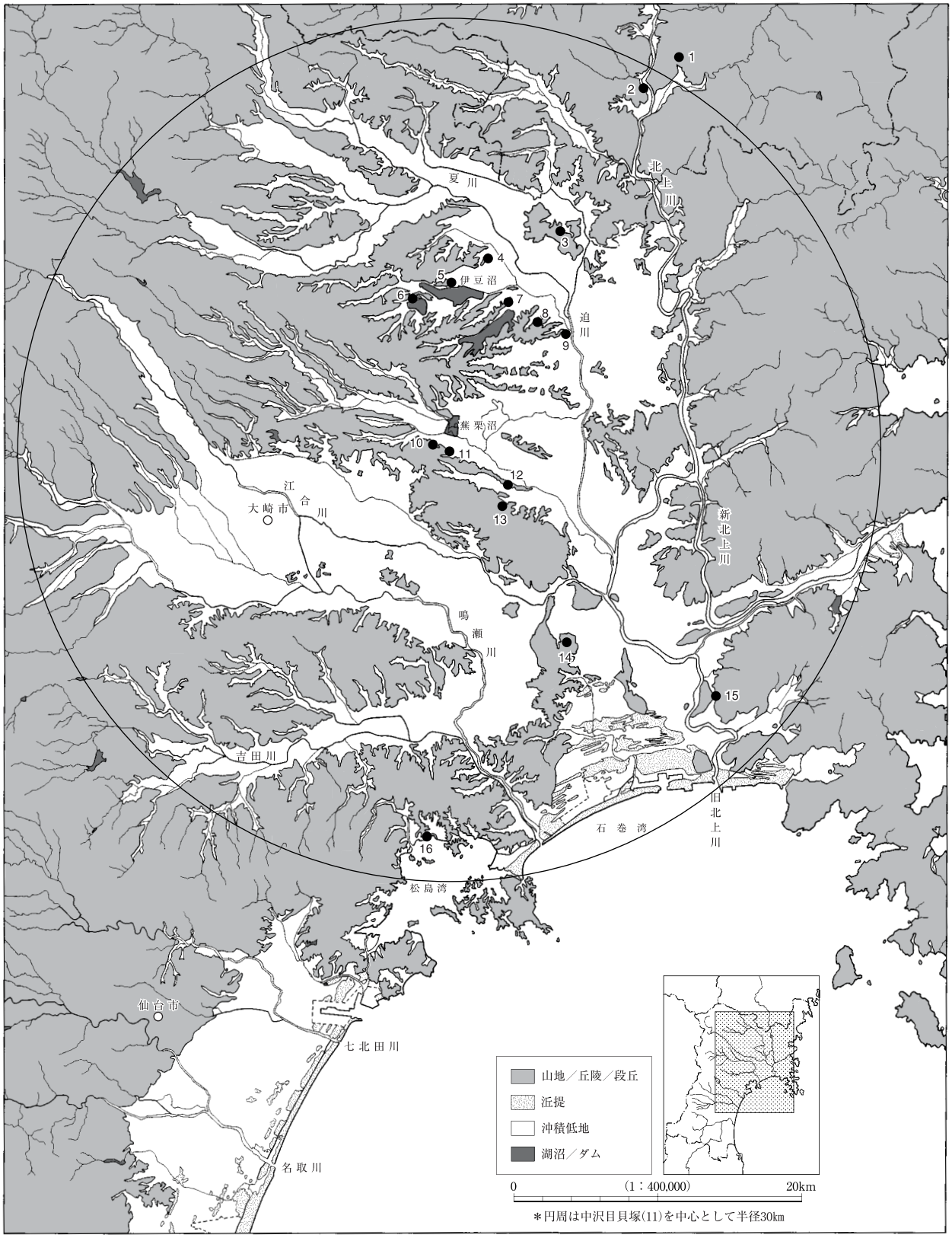


図27 「入組三叉文高坏」を出土した遺跡分布図(1)

米市（旧石越町）富崎貝塚の報告書（後藤・小井川2003）と涌谷町ツナギの沢貝塚の報告書（福山2004）が相次いで刊行され、当該高坏の内容は非常に充実してきている。

夏川流域　石巻平野北限に当たる夏川流域では、富崎貝塚で口縁部資料７点（図８－29～35）、脚部資料17点（図15－43～59）が報告されている（後藤・小井川2003）。資料の総数では中沢目貝塚に次ぐ内容で、先行する大洞Ｂ２式台付浅鉢（図８－18～28）も多数出土しており、これまで見てきたように、系統的な変遷を跡づけることが



1:相ノ沢遺跡、 2:中神遺跡、 3:富崎貝塚、 4:館貝塚、 5:敷味貝塚、 6:砂子崎遺跡、 7:倉崎貝塚、 8:大多古貝塚、 9:佐沼城跡、
10:恵比須田遺跡、11:中沢目貝塚、12:長根貝塚、13:ツナギの沢貝塚、14:宝ヶ峯遺跡、15:南境貝塚、16:西ノ浜貝塚

図28 「入組三叉文高坏」を出土した遺跡分布図(2)

可能となっている。

伊豆沼・長沼周辺　石巻平野北部の伊豆沼・長沼周辺では、栗原市（旧若柳町）館貝塚から入組三叉文高坏Ｂ類の典型資料が出土している（図９－50）。同遺跡では、当該高坏に類似した入組矩形文を施した皿形の器種（図９－52）も出土している。

栗原市（旧築館町）砂子崎遺跡では、入組三叉文高坏Ａ類の略完形資料（図７－２）が出土している。口縁部文様帯が比較的幅を有し、脚部の凸彎部の文様も繁縟でないことから、大洞ＢＣ１式に相当すると考えられる。

栗原市（旧迫町）倉崎貝塚では、当該高坏の口縁部資料９点（図８－37～45）、体部資料１点（図８－46）、脚部資料６点（図15－61・65～69）が出土している。図８－37は入組三叉文高坏Ａ１類、38～40は同Ｂ類の典型となる資料で、37と46の体部下半には、１条沈線のみが囲繞されている。その他に当該域では、栗原市（旧迫町）大多古貝塚（図９－51）と同佐沼城跡（図15－76）で、当該高坏が出土としている。

図示した資料の他には、1974年に刊行された『若柳町史』（亘理ほか1974）の中に、館貝塚出土の入組三叉文高坏が６点（口縁部２点、脚部４点）、敷味（しきみ）貝塚出土の脚部資料が２点掲載されている[23)]。いずれも良好な資料であるが、縮尺が小さく且つ不鮮明で、図示に堪える状態にはなかった。本稿の中に組み込めなかったことは、遺憾と言わざるを得ない。

蕪栗沼周辺　石巻平野中央部の蕪栗（かぶくり）沼周辺では、大崎市（旧田尻町）中沢目貝塚から略完形資料（図７－３）をはじめ口縁部資料17点以上、脚部資料47点以上が出土している。出土層位は殆どが大洞ＢＣ式の堆積層に相当しており、当該高坏の編年的位置の典拠となっていることは、前記した通りである。

大崎市（旧田尻町）長根貝塚では、入組矩形文を施した浅鉢（図９－47）が出土している。文様帯の幅が広く陽刻部も幅を有していることから、大洞ＢＣ１式の入組三叉文高坏Ａ類に相当するであろう。図９－53は入組三叉文高坏Ａ類に類似した口縁部資料であるが、注口乃至は壺形土器の口縁部として復元されている。

涌谷町ツナギの沢貝塚では、入組三叉文高坏の口縁部資料３点と脚部資料２点が報告されている。図９－48は口縁部が内彎した入組三叉文高坏Ａ類、49・55は口縁部に稜を持った同Ｂ類に相当する。脚部資料の図15－72は、透かしが判然としないが、凸彎部に横幅の短い鼓形区画と円文を巻き込む弧線文が、間隔を置いて配されることから、大洞ＢＣ１式に相当しよう。74は刻み目が細かく、裾部の装飾が繁縟に構成されており、大洞ＢＣ２式に位置付けられる。

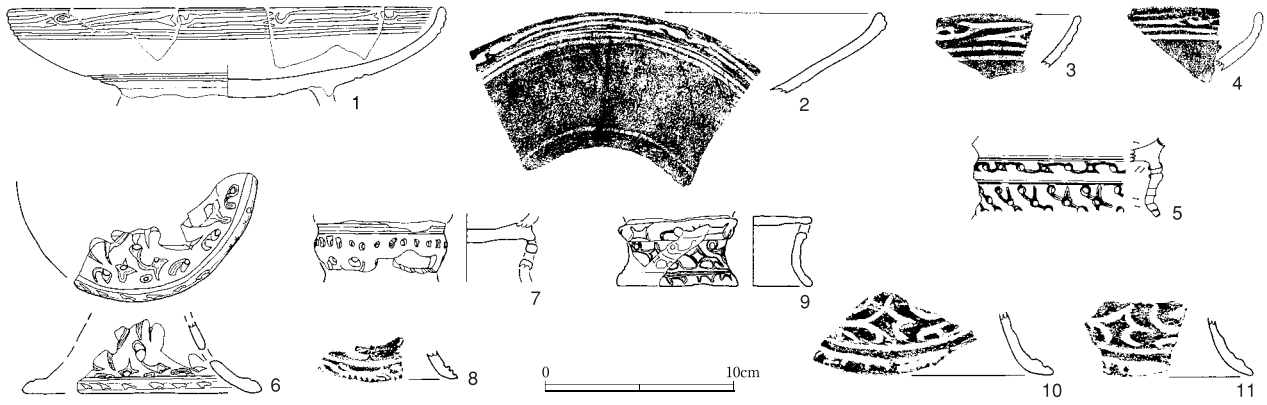
当該域ではその他に、大崎市（旧田尻町）恵比須田遺跡で入組三叉文高坏Ａ類（図９－54）と同Ｂ類（図７－４）が出土している。

小　結　上記から、入組三叉文高坏の分布の主体が、仙北湖沼地帯にあったことは確実であろう。しかしいずれも湖沼地帯北半の石巻平野に位置する遺跡であり、南半の大崎平野での出土例は、管見の限りでは確認できない。須藤隆氏は、北上川下流域と迫川流域の東西60㎞、南北60㎞の範囲の湖沼地帯に、当該高坏が分布することを指摘している（須藤ほか1995:276頁）が、中沢目貝塚を中心にして径60㎞の円周を描出してみると、確かに出土遺跡が円周内に収束している（図28）。同氏の指摘は正鵠を射ていたことが窺えよう。

大崎平野を貫流する吉田川の上流域の山間河谷には、晩期全般を通しての基幹集落である摺萩（すりはぎ）遺跡（大和町）が位置している（図２）。同遺跡では大洞ＢＣ式の土器資料が多数出土しているにも拘わらず、入組三叉文高坏や後述する平行線文装飾深鉢を見出すことはできず、辛うじて類似の脚部資料（図30－４・５）が指摘されるのみである。同遺跡は地理的に仙北湖沼地帯と近接するが、山間の低地に位置しており、湖沼地帯とは生活環境を異にしていたと想定される。摺萩遺跡に当該高坏を見出せない背景には、同遺跡が湖沼地域の強固なネットワークに組み込まれていなかったことが暗示されており、これ等の土器が生業形態と深く結び付いた仙北湖沼地帯の社会的紐帯の強さの指標となっていた可能性も考えられよう。

Ｂ　北上川中流域（北上盆地）における出土例

北上川中流域に当たる北上盆地は、南北約90㎞、東西約10～20㎞の広大な盆地であるが、その南縁は海抜100～200ｍの起伏の少ない丘陵（磐井丘陵）で画され、仙北湖沼地帯へと連なっている。北上盆地で筆者が渉猟できた資料は、僅か２遺跡３例に過ぎない（図29－１・２・４）。



1～3:川岸場Ⅱ、4・5:東裏、6～11:相ノ沢

図29　岩手県内出土の入組三叉文高坏及び関連資料

岩手県奥州市（旧前沢町）川岸場Ⅱ遺跡では、入組三叉文高坏が２点報告されている（小山内2000）。同遺跡は、仙北湖沼地帯の北端（最奥部）から北上川に沿って、約35㎞遡った地点に相当する（図27）。

図29－１は口縁部が内彎した入組三叉文高坏Ａ類（Ａ１類）、２は口縁部に稜を形成した同Ｂ類に相当する。前者は底部から内彎気味に立ち上がる形制で、口端が丸味をもって作出される。口縁部文様帯の入組三叉文がやや上下幅を有し、咬合部が接着しないことから、大洞ＢＣ１式に位置付けられるであろう。また後者は、口縁部の特徴が入組三叉文高坏Ｂ類の典型であることから、大洞ＢＣ２式に相当する。３は、同遺跡出土の関連資料として図示した。口縁部の内彎が弱く外傾しており、背向した三叉文の主軸線が短く、入組三叉文高坏とは見なし難い。先行する大洞Ｂ２式の台付浅鉢と判断されよう。

須藤隆氏は、岩手県奥州市（旧衣川村）東裏遺跡において当該高坏が出土したことを指摘している（須藤1984：50頁）。具体的資料については明言していないが、図29－４を指示したものと思われる[24]。同例は口縁部が強く内彎しており、入組三叉文高坏Ａ類（Ａ１類）に相当する。なお脚部資料である図29－５は、凸彎部を有し円孔が穿たれることから、入組三叉文高坏の脚部に酷似している。しかし報告書の写真図版（相原1981：図版31－15）で判ずる限りでは、精巧な造作とは見なし難く、入組三叉文高坏には該当しないであろう。

また、北上川中流域の北上盆地と同下流域の仙北湖沼地帯とを画する狭窄部（狐禅寺峡谷）の右岸に立地する一関市（旧花泉町）中神遺跡でも、入組三叉文高坏の出土が報告されている（須藤ほか1995：40・237頁）。同遺跡は縄文晩期末葉～弥生中期初頭の遺跡として著名であるが、晩期前葉の大型竪穴住居跡も検出されている。しかし当該期についての詳細は、明示されていない（須藤編1997、須藤2003）。

岩手県藤沢町相ノ沢遺跡は、中神遺跡の北東約３㎞の丘陵地に位置する後期前葉～晩期後葉（大洞Ａ式）の有力遺跡であるが、当該高坏の脚部と思われる資料が出土している。図29－６は裾部に鉤爪状の陰刻文様、脚柱部に円孔を巻き込む菱形の透かしが穿たれることから、当該高坏の脚部であろう。８の裾部も、末端が入り組み連続した鼓形文様と脚端の刻み目で構成されており、当該高坏の脚部と思われる。その他については、当該高坏に相当するのか判然としない。７は凸彎部に円孔が巡らされ、その直下にもやや大き目の円孔が穿たれる点では、当該高坏に共通する。しかし写真図版（宮本2000：写真図版102－2362）で判ずる限り、器面の摩耗が著しく、凸彎部の径も7.0㎝ とやや小振りである。９も凸彎部・脚柱部・裾部の３段で構成されるが、当該高坏に比しかなり小型となる。10・11は裾部に鉤爪状、また脚柱部に菱形の一端が伸びて入り組む陰刻文様が施されているが、透かしの状況は判然としない。

北上盆地を縦貫する北上川は、縄文時代を通して遺跡間の紐帯を担う大動脈であったと想定されている。晩期においては、その流路に面した中神遺跡や川岸場Ⅱ遺跡、それに北上川との合流点から衣川を３㎞程遡った東裏遺跡は、交通の要衝としての役割を担っていたと予察され、入組三叉文高坏の出土はその傍証となる可能性が考えられる。現時点では、川岸場Ⅱ遺跡が北上盆地の北限であり、更に北上川を遡った岩手県奥州市（旧水沢市）

杉の堂遺跡や盛岡市手代森遺跡等の拠点遺跡には、当該高坏を見出すことができない。従って、北上盆地の中でも南部のみが分布域となる。なお、当該高坏を出土している中神遺跡と相ノ沢遺跡は、仙北湖沼地帯の北端からは10㎞前後の位置関係にある。

C　仙台湾沿岸域（臨海部）における出土例

仙台湾は、宮城県牡鹿半島の先端部から福島県相馬市の鵜ノ尾崎に至る湾状の海域に相当する。そのうち北部の旧北上川や鳴瀬川の河口附近は**石巻湾**、更に南方の宮戸島と七ヶ浜半島に囲まれた南北約10　の入り海は**松島湾**と呼称されている。仙台湾沿岸域には、多くの晩期の貝塚や遺跡が点在しているが、当該高坏を出土した遺跡となると非常に少なく、仙北湖沼地帯に隣接する石巻湾岸と松島湾岸に限られるようである（図28）。

石巻湾　石巻湾岸では、旧北上川の河口部に位置する南境貝塚で完形品（図７－１）と破片資料（図30－３）が、やや内湾に位置する宝ヶ峯遺跡で口縁部資料（図30－１）が出土している。図７－１は入組三叉文高坏Ａ類の典型で、当該高坏では数少ない完形資料であり、前記したように大洞ＢＣ１式に位置付けられる[25]。図30－３は断面図の提示がなく、形制は判然としないが、伸長した入組三叉文は当該高坏の典型である。図30－１は区画沈線直下に稜が形成されており、入組三叉文高坏Ｂ類に相当する。やや内削ぎ状の口端で、狭小な口縁部文様帯には、伸長した入組三叉文が展開しており、大洞ＢＣ２式に位置付けられるであろう。

また該域の拠点貝塚である沼津貝塚では、大洞ＢＣ１式の入組三叉文施文の装飾鉢が出土している（図13－17）。文様描出手法における当該高坏との共通性については、前記した通りであるが、公表された文献を渉猟した限りでは、同貝塚での当該高坏の出土例は確認できない。

松島湾　松島湾岸では、湾央域の拠点貝塚である西ノ浜貝塚で、口縁部資料が出土している（図30－２）。口縁部が短く内彎する入組三叉文高坏Ａ類（Ａ２類）に相当し、口縁部文様帯には入組矩形文が施される。なお湾口域の拠点貝塚である里浜貝塚と二月田貝塚では、管見の限り当該高坏の出土例は確認できない。

小　結　仙台湾沿岸域は、仙北湖沼地帯の南方に接する地域であるにも拘わらず、当該高坏は僅か４例を渉猟できたに過ぎない。地理的に見て、仙北湖沼地帯とは頻繁に接触していた地域であったと目されるだけに、出土資料の僅少性は、詳細に報告された晩期前葉の遺跡の少なさに起因する可能性が考えられる。その中で南境貝塚では、当該高坏の他に平行線文装飾深鉢の完形資料（図35－３・４）も出土しており、緊密な関係が存していたことを窺わせている。

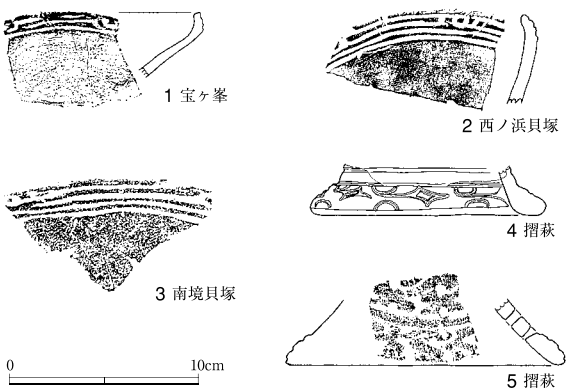


図30　宮城県内出土の入組三叉文高坏及び関連資料

なお現時点では、田柄貝塚が位置する南三陸沿岸域や仙台平野以南で、当該高坏の出土例を見出すことができない。当該高坏の出土が仙北湖沼地帯の周縁域に限られていることから、その範囲が湖沼地帯の日常の交流圏を暗示していた可能性が考えられよう。

D　遠隔地における出土例

仙北湖沼地帯から遠く離れた地域でも、入組三叉文高坏の出土例を２例指摘することができる。

青森県槻ノ木遺跡　青森県平内町槻ノ木遺跡については前記した。陸奥湾に突き出た夏泊半島の東南端に位置しており、太平洋沿岸と青森平野とを結ぶ要衝の遺跡であったと想定され、故地である仙北湖沼地帯からは、約250　の距離にある（図27）。

北上盆地において入組三叉文高坏を出土した北限の遺跡は、前記したように同盆地南部の川岸場Ⅱ遺跡である。仙北湖沼地帯の周縁域に相当し、その広がりが限定的であったことを示している。ところが遙か彼方に位置する槻ノ木遺跡に忽然と完形に近い資料（図６）が出土しており、その中間地帯は空白域となっている。当該高坏が交易品として人伝いに中継されていたのであれば、その間に位置する北上川上・中流域や馬淵川流域の有力遺跡にも、当該高坏が認められて然るべきであろう。しかし現時点で当該高坏が見出せないと言うことは、それが人

の移動によって仙北湖沼地帯から槻ノ木遺跡に、直接将来された可能性が考えられる。亀ヶ岡文化圏内における文物の移動を如実に示した特記すべき事例と言わなければならない。

山形県宮の前遺跡　最上川中流域、尾花沢盆地南端の拠点遺跡である山形県村山市宮の前遺跡では、入組三叉文高坏の脚部の凸彎部が１点出土している。宮の前遺跡は、1974・93・97年の３次にわたって発掘調査が実施されているが、そのうち山形県埋蔵文化財センターが実施した1997年の第３次調査において、当該高坏の脚部資料が報告されている（植松1999：第90図12）。

図31が、宮の前遺跡出土の入組三叉文高坏の脚部である。底部の内面は平底、その裏側の脚部天井面は凸面状を呈し、凸彎部は内面ごと外側に膨らむ形制である。凸彎部の最大径は9.0～9.2㎝、上下幅は2.0㎝前後、器厚は７～10㎜を測る。

凸彎部の文様は、円形刺突（貫通２孔、他は未貫通）を巻き込む13単位の入組矩形文と、円孔を巻き込む16単位の入組三叉文の２帯で構成される。上段の矩形文は横幅の狭い鼓形をなし、下段の三叉文は主軸線が短く、水平乃至は緩い右上がりとなっている。下端の陰刻は円孔を中心に、脚柱部上端から伸びた弧線と入り組んでおり、脚注部上端の透かしは、矩形基調の文様と想定される。

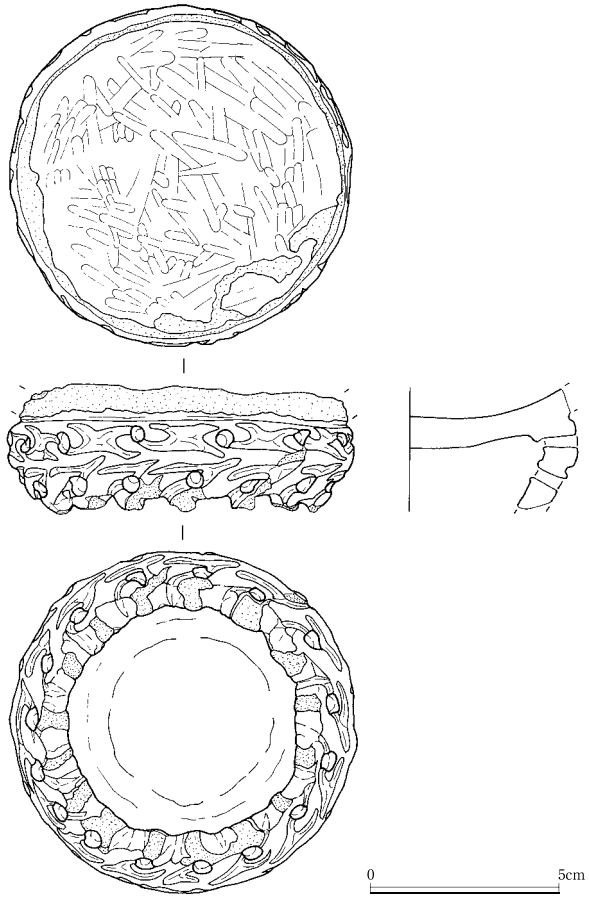


図31　山形県宮の前遺跡出土の入組三叉文高坏

色調は、褐灰色（10YR４/１）を呈しており、底部の内面はヘラミガキが加えられ、光沢を有するが、脚部の内面はナデのみで、ややざらついている。胎土は緻密で精選されており、微砂粒や石英、海面骨針を含む。

同例の口縁部の形態は判然としない。凸彎部の装飾が繁縟に構成されていることから推して、大洞ＢＣ２式の入組三叉文高坏Ａ２類乃至は同Ｂ類に相当すると考えられる[26)]。

宮の前遺跡は、故地と思われる仙北湖沼地帯から、直線で60～70㎞の距離にある。しかしその間には、奥羽脊梁山脈が介在しており、障壁をなしている（図27）。前記した槻ノ木遺跡を除くと、宮の前遺跡が仙北湖沼地帯周縁域では、最も遠隔の出土例に当たるが、入組三叉文高坏が出土した他の周縁域は、低い丘陵を通じて湖沼地帯に接しており、障壁となるような高い山地は存していない。その点で宮の前遺跡は特異と言えるが、同遺跡では関東地方の後期末葉安行２式の注口土器の破片資料や、仙台湾沿岸域の大洞Ａ式期の尖底の製塩土器も出土しており、後期末葉から晩期を通じて、求心力を有した遺跡であったことが指摘されている（小林2001：53－54頁）。

Ｅ　小　結

以上見てきたように、入組三叉文高坏の分布の主体が仙北湖沼地帯にあったことは明かである。その周縁域にも出土例が僅かに認められているが、域外の遺跡はいずれも拠点となる集落に相当しており、特に北上川流域では、交通の要衝と見なすことが可能であろう。

一方東北地方の南半には、当該高坏の出土例が全く認められない。現時点では北上川河口部～松島湾周辺にかけた地域が南限に当たり、仙台平野以南では確認できない。このことから当該高坏は、主に仙北湖沼地帯から北上川を遡って、北方に移出された器種類型であったと考えられる。当該高坏の分布から、仙北湖沼地帯の通常の交流圏が暗示されるが、当該域は東北北半と南半との接触地帯に相当しており、その中でも北上川を通じて北半との結び付きを有していたことが推察されよう。

このように入組三叉文高坏を指標に置くことで、亀ヶ

岡文化圏内における文物の移動の範囲が明示され、仙北湖沼地帯と各地域間の交流関係を描き出すことが可能となろう。

7 「仙北湖沼地帯」に特徴的な土器群

これまでは、仙北湖沼地帯に特徴的な入組三叉文高坏について検討してきた。この他にも、中沢目貝塚Ⅱ群土器（図１）を構成する「平行線文装飾深鉢」が、当該域に特徴的な器種類型であることが、須藤隆氏によって指摘されている。また先行する大洞Ｂ式期においても、「篦刻目技法装飾深鉢」の卓越することが、小井川和夫氏によって指摘されている（後藤・小井川2003）。

以下では、上記の二つの器種類型に「入組矩形文装飾深鉢」と「縄文施文浅鉢」を加え、仙北湖沼地帯に特徴的に分布する四つの類型を抽出して、年代的に古い順から検討してみたい。

A　大洞Ｂ式に固有の「篦刻目技法装飾深鉢」

「篦刻目技法装飾深鉢」とは、文様装飾として刻み目手法と縄文施文が組み合わされた装飾深鉢である（図32）。篦刻目技法は、先端の薄い篦状工具を器面に縦に当て、横方向に連続的に移動しながら押捺したもの（後藤・小井川2003：７頁）で、（口）頸部文様帯内の地文として用いられる。また体部には、異原体からなる羽状縄文が施されるのが通例である。

特　徴　形制では、口頸部が直上したＡ類[27]の器形が卓越しており、屈折したＢ類は僅かでしかない（図32－41・42）。口端は緩い小波状を呈しており、谷の部分は刻み込まれない。また後期末葉の台形突起（図33－１・２）の系譜を引く例（図32－41･45）も散見されるが、これ等は頸胴部界の屈折したＢ類の器形と推測される。

（口）頸部文様帯は、通常三叉状の陰刻文様で構成される。三叉文の主軸線は、横位に長く伸びて平行線化しており、その末端同士の入り組む構成が卓越している（図32－１・２・18・20・21・52）。平行沈線のみの破片資料の多くも、本例に該当するものと思われる。この意匠は、後期末葉の横位連繋の入組帯状文に系譜を求めることができるであろう。平行化した三叉文の主軸線が、入組帯状文の主描線に相当しており、その末端同士が咬み合うと共に、咬合部を囲って三叉文が対向して配置される。上段の三叉文のみが独立した例（図32－７・34）も存在する。その他に、波頂部直下に棘状の陰刻を配した例（図32－29～33）や、円形刺突を巻き込むように弧線文や主軸の短い三叉文を配した例（図32－37～39）も認められる。

篦状工具による細い刻み目の充填手法は、東北地方の後期末葉の入組帯状文を伴う装飾深鉢に多用される（図33－１・２）。頸胴部界で屈折したＢ類に顕著で、口頸部が刻み目、体部が縄文地文となる例が多い。一方、口頸部の直上したＡ類では、口頸部文様帯のみが刻み目で充填され、体部は無文（縄文地文の例もある）となる。しかし縄文地文と併用される場合は、口縁部と下限の区画帯が刻み目帯となり、その間の頸部の文様帯（入組帯状文）と体部には、通常縄文地文が施文される。

この篦刻目技法は、東北一円の後期末葉を特徴付けており、晩期には継承されない。しかしその残影は、東北中部の大洞Ｂ１古式に見ることができる（図33－３）。後期末葉以来の装飾手法が地域的に残存し、仙北湖沼地帯を中心に局所的に発達を遂げたのが、篦刻目技法装飾深鉢であったと考えられる。

当該土器の刻み目は、通常三叉文の背向した主軸線間や入組部に充填される。逆に区画内を磨り消して、区画外に刻み目が加えた例（図32－１・21～25・49・51～53）も認められるが、この場合口縁部が刻み目帯となり、Ⅰ文様帯を構成する。また文様帯下端の区画帯が刻まれた例（図32－２・34・38・39）も見られる。

刻み目は薄い篦状工具で細かく刻まれるが、比較的太目の工具で、間隔を置いて刻んだ例（図32－３・４・22～24・51）も認められる。更に陰刻に挟まれた区画が細く作出され、刻み目が痕跡程度となった例（図32－13）も存在する。刻み目は縦位方向を基本とするが、曲線部分では縁取られた陰刻文様に応じた方向で施される（図32－21・24・26・29・41・42・52～54・56）。

当該土器には、口縁部を横帯で区画し、刻み目帯を配した例（図32－２～４・14～19・47・48）も認められる。後期以来のⅠ文様帯に相当するが、波頂部直下が弧状に縁取られ、刻み目が充填された例（図32－27･28･54）も存在する。大洞Ｂ１古式～Ｂ２式にかけては、Ⅰ文様帯が消失する過程にあり、大洞Ｂ２式において晩期文様帯としてのⅡｃ文様帯（旧Ⅱｃ文様帯）が確立する。当該土器の口縁部の刻み目装飾は、その過渡的様相を示して



宮城県富崎貝塚出土の篦刻目技法装飾深鉢及び関連資料

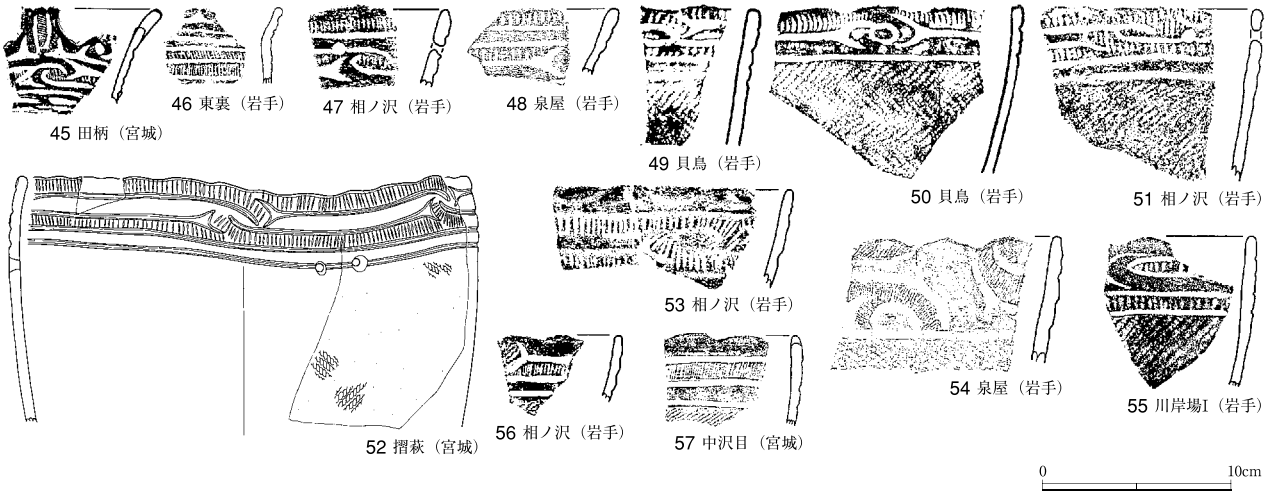


図32 「篦刻目技法装飾深鉢」集成図

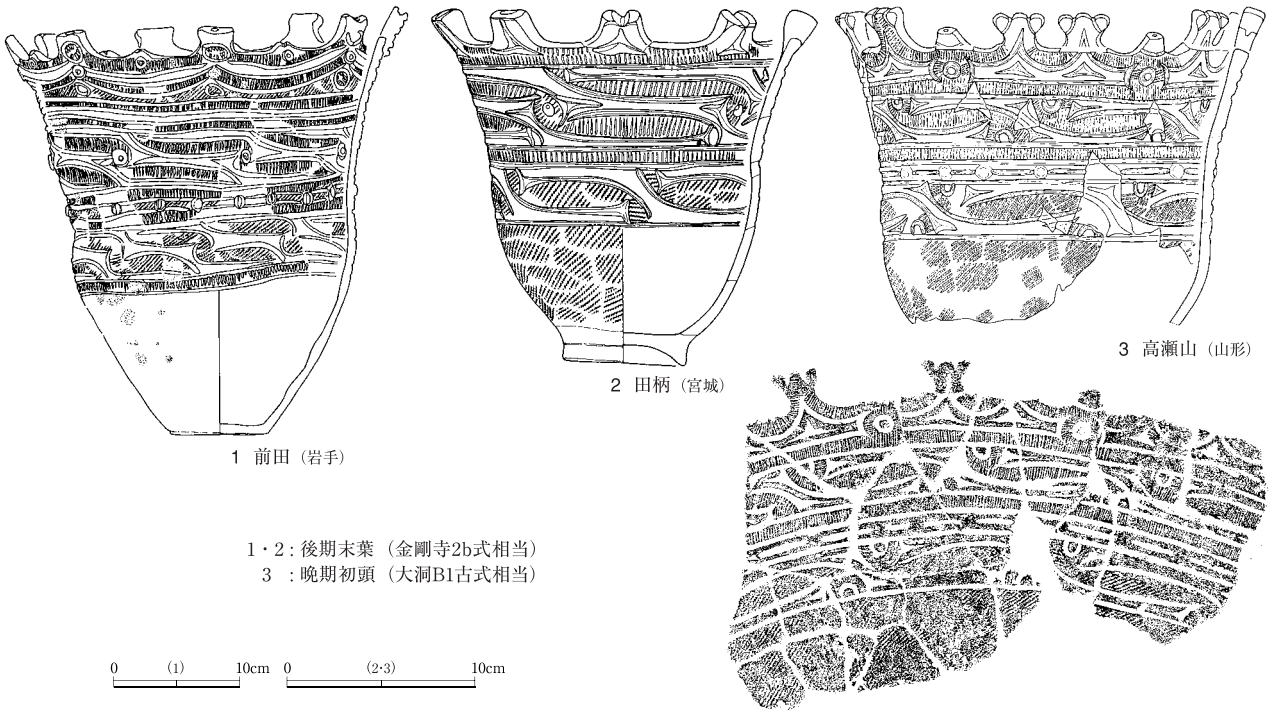


図33 「篦刻目技法深鉢」関連資料

いると言うことができるであろう。

当該土器に顕著な末端の入り組む三叉文には、縄文地文を有する例（図32－44）も認められる。縄文地文と篦刻目技法の親和性を示す事例であるが、仙台湾周辺の大洞Ｂ２式では、前記したように口頸部に縄文地文を残す傾向が看取されており、仙北湖沼域では後期末葉に連なる篦刻目技法が、縄文地文に取って代わっていたと推定される。

当該土器の体部には、異原体による羽状縄文が卓越する。東北中部の大洞Ｂ２式～Ｃ２式には、羽状縄文の粗製深鉢や半精製の鉢形土器が盛行しており、後述の平行線文装飾深鉢や縄文施文浅鉢の特徴ともなっている。羽状縄文は東北中部の晩期に通徹した地域性と見なすことができ、その萌芽は後期後葉の金剛寺１～２ａ式期に求められる。しかし羽状縄文が地域性として確立するのは、当該土器の段階であろう。

編年的位置　当該土器は、大洞Ｂ１新式～Ｂ２式に相当すると考えられる。口頸部の直上したＡ類の器形が卓越することは、大洞Ｂ１新式以降の様相を窺わせる。前記したように、Ｉ文様帯の消失の過程にあることも傍証となろう。Ｂ類の器形である図32－41・45は、文様と化したＩ文様帯が見られ、Ⅱａ文様帯との融合化が想定されることから、大洞Ｂ１新式に比定されよう。

大洞Ｂ２式の装飾鉢類では、口端が篦状工具で刻まれ小波状縁となる例が、多く認められる。しかし当該土器の口端の谷部は刻み込まれずに、緩い波状縁となることから、古的様相を留めている。因って年代が下っても、大洞Ｂ２古式相当と考えられるが、ここでは大洞Ｂ２式に包括しておきたい。

分　布　当該土器の分布について小井川和夫氏は、松島湾や南三陸沿岸の遺跡には見られず、貝鳥貝塚や摺萩遺跡に類例が存することから、仙北湖沼地帯及びその周縁に限られることを指摘している（後藤・小井川2003：21頁）。

当該土器を集成してみると、確かに仙北湖沼地帯では富崎貝塚に際立っており、その他では貝鳥・館・中沢目貝塚で少量出土している。また大崎平野を貫流する吉田川上流域の摺萩遺跡にも認められ、更に北上川流域では岩手県川岸場Ⅱ・泉屋・東裏・相ノ沢の各遺跡、松島湾沿岸では宮城県里浜貝塚、南三陸沿岸では宮城県田柄貝塚等で少量出土している(図34)。仙北湖沼地帯を中心として、その周縁域である北上盆地南部～松島湾・南三陸沿岸が分布域となっており、入組三叉文高坏の分布と類似した在り方を示している。因って小井川氏の指摘は、概ね妥当と言えるであろう。

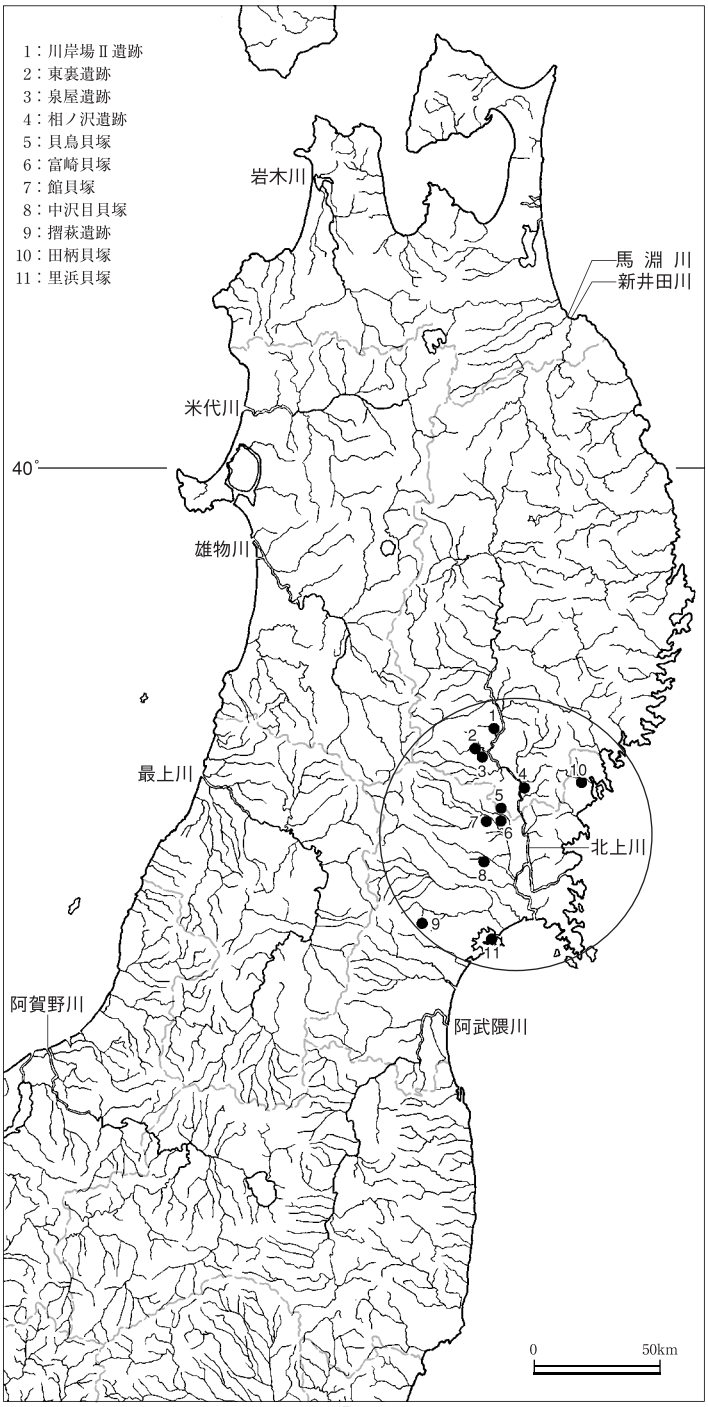


図34　「篦刻目技法装飾深鉢」を出土した遺跡

B　大洞ＢＣ式に固有の「平行線文装飾深鉢」

「平行線文装飾深鉢」は、口端に低い山形突起と篦状工具によって刻まれた小波状縁を配した装飾深鉢である。口頸部には通常３条の平行沈線が囲繞され、山形突起直下に棘状の陰刻が加えられ、突起の左右が弧状に縁取られ、突起は三山状を呈する。入組三叉文高坏と共に中沢目貝塚Ⅱ群土器（大洞ＢＣ式期）を構成するもので、その分布は入組三叉文高坏と同様に、北上川下流域・迫川水系の径60㎞程の湖沼域に限られることが、須藤隆氏によって指摘されている（須藤2003：84頁）。

特　徴　全形の窺える資料に乏しいが、形制は屈折しないＡ類のみで、口縁部は弱く内傾した例が多数を占め、直上した例も認められる。図35－１・２は、口径（最大径）に対する器高の比率がほぼ同等と見なされるが、３・４は、器高が口径を大きく上回っており、長胴の形制となる。

口縁部の装飾については前記した通りであるが、口端が刻まれない装飾性に乏しい**平行線文装飾深鉢１類**と、口端に篦状工具による刻み目が加えられた**平行線文装飾深鉢２類**とに大別される。前者の装飾は３条の平行沈線文の他に、山形突起直下の棘状・三叉状の短い陰刻文様のみで、突起左右の弧線は加えられない（図35－１・３・５～８）。一方後者の突起の左右は弧状に縁取られ、三山状を呈している。頸部文様帯には３条の平行沈線文の他に、４条の平行沈線文（図35－26～28）、羊歯状文（図35－30）、截痕列（図35－29・35・36）、入組矩形文（図35－44・45）等が施されており、変異に富む。特に、入組矩形文が施された装飾深鉢は、後述の入組矩形文装飾深鉢との緊密性を物語っている。

通常体部には、異原体による羽状縄文が施されるが、この地文が東北中部に通徹した地域性であることは、前記した通りである。底部の様相は判然としないが、図35－３・４で判ずる限りでは、底部直上が横位に削り出されるようである。

須藤隆氏は、中沢目貝塚出土の装飾深鉢を「深鉢Ａ１ａ類」に分類しているが、その中でも当該土器は「Ｄ５類」とされたものに相当する（須藤ほか1995：61－63頁）。同氏は大洞ＢＣ式の深鉢の口縁部文様帯が、次第に装飾的になることを指摘しており、筆者の分類に適用するならば、平行線文装飾深鉢１類から同２類への変化が、予察されることになろう。

編年的位置　平行線文装飾深鉢２類の口端は、通常刻み目の細かな小波状縁で構成される。東北北半の装飾鉢類には、大洞Ｂ２式に篦状工具による小波状縁・連（さざなみ）状縁が盛行し、大洞ＢＣ１式では珠紋縁が卓越し、やがて刻み目の細かな小波状縁へと収斂される経過が指摘されている（小林2005ａ：35頁）。当該土器の口端は、珠紋縁風に作出された例（図35－40）も散見されるが、多くは

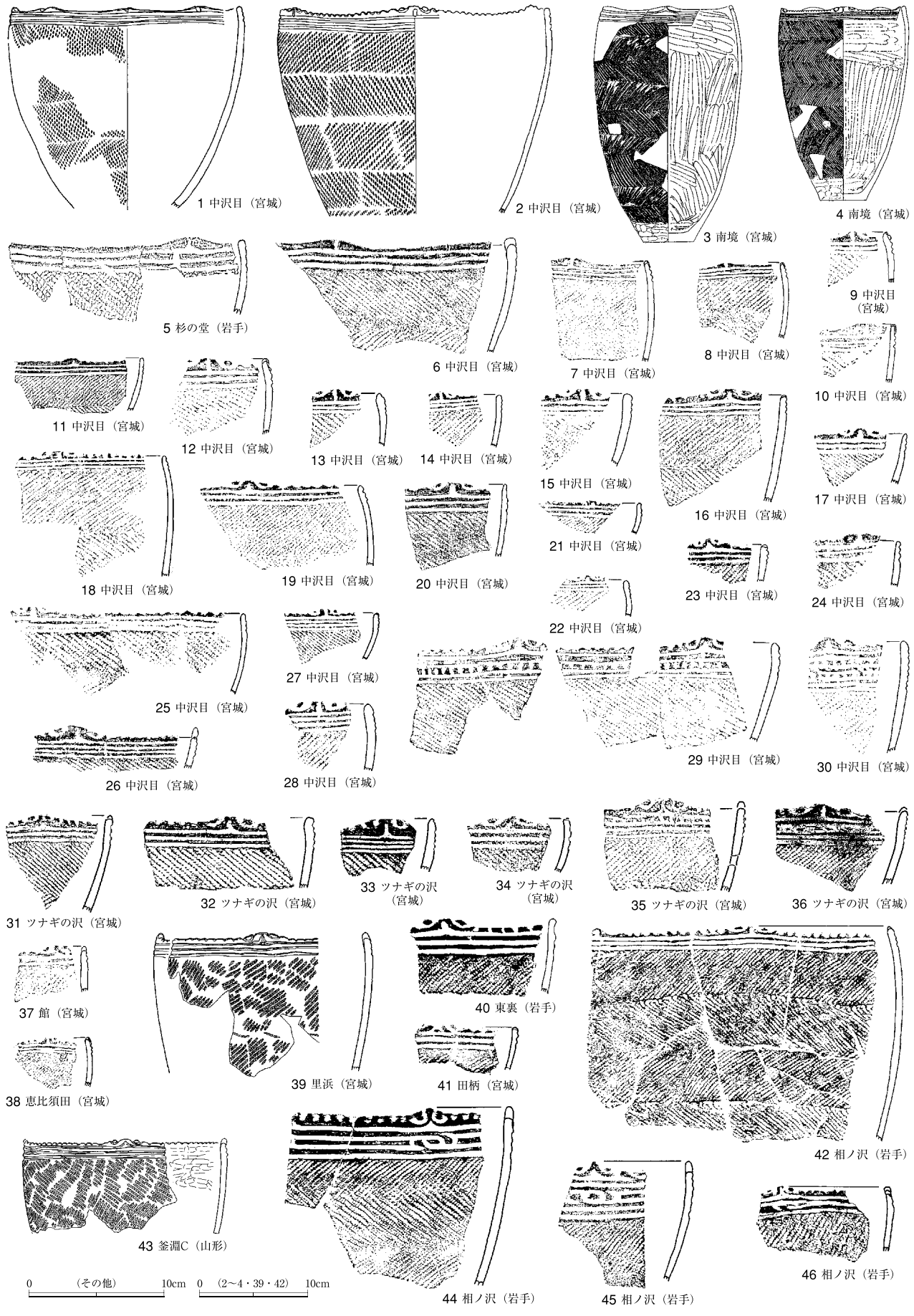


図35 「平行線文装飾深鉢」集成図

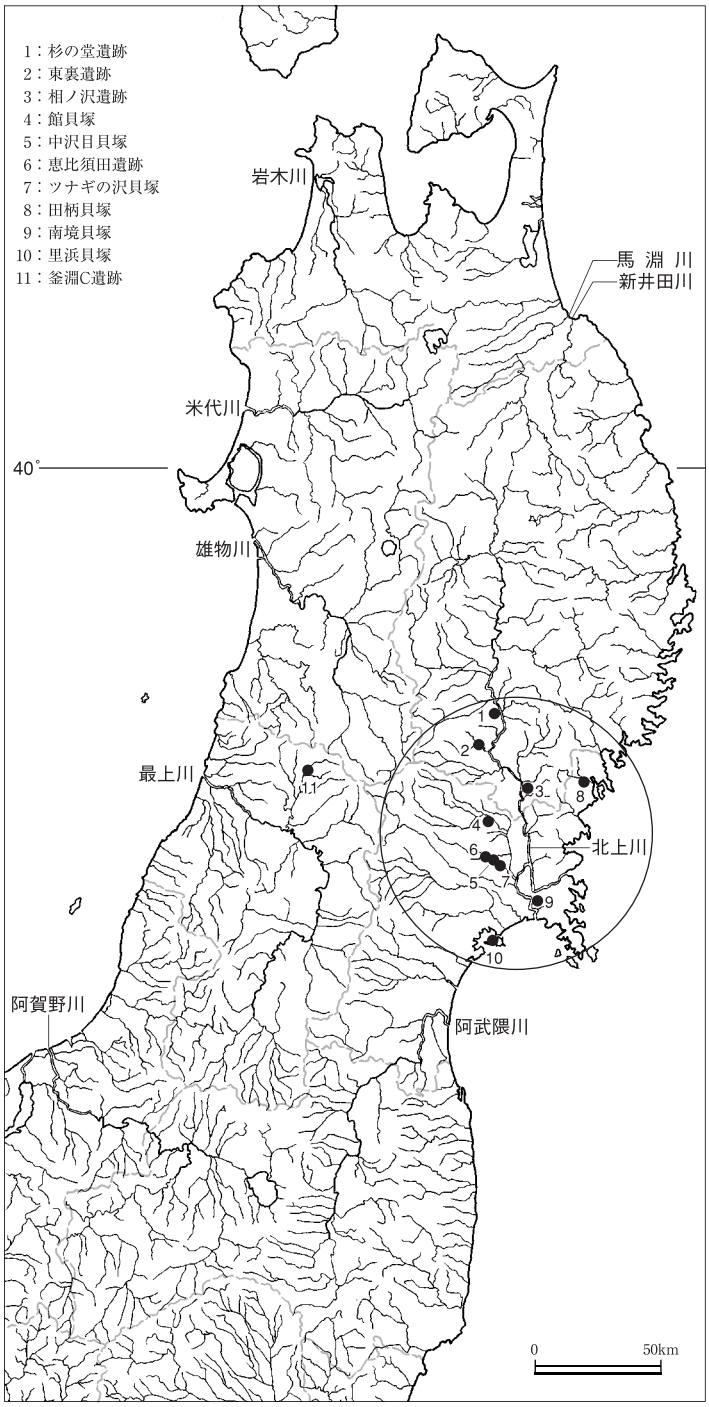


図36　「平行線文装飾深鉢」を出土した遺跡

細かな小波状縁を呈している。また頸部文様帯に羊歯状文や截痕列を巡らせた例も存している。上記から、当該土器は大洞ＢＣ式に帰属されることになろう。

同式に比定される層位的根拠として、中沢目貝塚の成果を挙げることができる。同貝塚では大洞ＢＣ式の層準から、当該土器が一通り出土している。これに対し大洞Ｂ２式の層準には認められず、入組三叉文高坏と同様の出土状況を示している。先に装飾性に欠ける平行線文装飾深鉢１類から、加飾性の高い同２類への変化を型式学的に導出した。筆者は前者が大洞ＢＣ１式、後者が同ＢＣ２式に概ね比定されると私考するが、中沢目貝塚の層位的状況は、必ずしも肯定的とは言い難いのが実情である。

入組三叉文高坏と同様に、同貝塚の第１次調査（図18･19－18～130）と第２次調査（図19～21－131～276）の境界面を基準に、当該土器の出土層位を見てみると、確かに上層では平行線文装飾深鉢２類（図18－19・41・45・49・62・63、図19－77～79）が卓越する。しかし、同１類（図19－108）も存している。一方下層では、１類（図20－168・233）と共に２類（図20－169、図21－265）も認められる。変遷の傾向性としては穏当であっても、必ずしも層位的に跡づけられた訳ではないことを確認しておきたい。

分　布　須藤氏は、当該土器が入組三叉文高坏と同様に、北上川下流域･迫川水系の径60㎞程の湖沼域に分布が限られることを指摘している。筆者が渉猟した当該土器出土の遺跡は、以下の通りである。

仙北湖沼地帯では、中沢目貝塚に顕著で、その他に館貝塚やツナギの沢貝塚、恵比須田遺跡等で出土している。北上川中流域では、岩手県杉の堂･東裏･相ノ沢の各遺跡、南三陸沿岸域では宮城県田柄貝塚、石巻湾～松島湾沿岸域にかけては南境・里浜貝塚、また奥羽脊梁山脈を介した山形県釜淵Ｃ遺跡でも出土している(図36)。分布は仙北湖沼地帯とその周縁に限られており、特に中沢目貝塚に顕著で、入組三叉文高坏と同様の分布が見られることから、須藤氏の言説を追認したことになるであろう。

Ｃ　大洞ＢＣ式に固有の「入組矩形文装飾深鉢」

「入組矩形文装飾深鉢」は、（口）頸部文様帯に末端が入り組む細長い鼓形の文様が施された装飾深鉢であるが、上記の平行線文装飾深鉢と同様に、大洞ＢＣ式に仙北湖沼地帯を中心とした地域に固有の器種類型であったと考えられる。

特　徴　当該土器の（口）頸部文様帯は、入組三叉文高坏（入組矩形文施文）と同様の横長の鼓形区画の一端が伸びて、相互に入り組む文様で構成される。その基本的な構図は、図37－２に図示した通りである。横位に長く伸びて、平行化した三叉文の主軸線が、上下で密着し、主軸線の末端と三叉文の一端が連結して、鼓形の区画が

作出される。

鼓形のモチーフで構成されることから、その系譜を大洞Ｂ１式の磨消文様に求めることも可能性であろう。東北北部の大洞Ｂ１新式では、入り組みを伴う円文と横長の鼓形の文様を交互に配した磨消文様が屡々認められるが、この意匠は後期末葉の２段構成の入組帯状文に由来すると考えられる（小林2004ａ：87頁）。即ち起・終点の省略された入組帯状文の上・下端の主描線が、文様帯を画する沈線に接着し、横位の密着の度合いを増すことで、入組矩形文の成立に至ったと見なすことができる。しかし、仙北湖沼地帯付近にその系譜を跡づけるような資料は見出せず、また鼓形区画の横幅も入組矩形文装飾深鉢ほどは長くないことから、その可能性は低いと筆者は理解している。

先に鼓形のモチーフが、平行化した三叉文の主軸線が連結したことで構成されると解説した。当該域には、伸長化と平行化の著しい入組三叉文が卓越しており、有力な系譜の一つであることは確かであろう。しかし入組矩形文装飾深鉢が、仙北湖沼地帯を中心とした東北中部に局地的に分布することを考慮に入れるならば、篦刻目技法装飾深鉢で指摘した該域固有の入組三叉文の系譜を引く可能性が予察される。

仙北湖沼地帯の大洞Ｂ１新式～Ｂ２式に固有の篦刻目技法装飾深鉢の口頸部には、末端が入り組む三叉文の意匠が盛行する。図37－１がその模式図であるが、三叉文の主軸線が横位に長く伸びて平行線となっており、その末端同士が入り組んで、咬合部を囲うように三叉文が配置される（図38－１）。三叉文の主軸線に挟まれた部分が、篦刻目技法や縄文地文で充填された場合、その外周が磨り消されるのが通例であるが、逆の例も存在する（図32－44・52）。

上記した文様の密着の度合いが強まり、対向した三叉文の一端が主軸線に連結し、地文が消失することで、図37－２に至る経過が想定される。図38－２～４がその間の事情を物語る資料である。いずれも口頸部文様帯上端の区画線がなく、平行線化した陰刻によって囲まれた陽刻部の上下幅は比較的広い。図38－１から地文が抜けた様相を呈しており、口端も平縁や緩い小波状縁で構成される傾向にあり、古的様相を留めている。

図38－５～７も、口頸部文様が口端に露出する。口端は篦状工具による刻み目の小波状縁と、三山状又はそれに類する突起で構成され、矩形文の上下幅がやや狭まっており、図38－２～４からの発展が想定される。加飾された三山状突起は、大洞ＢＣ１式の特徴に挙げられてお

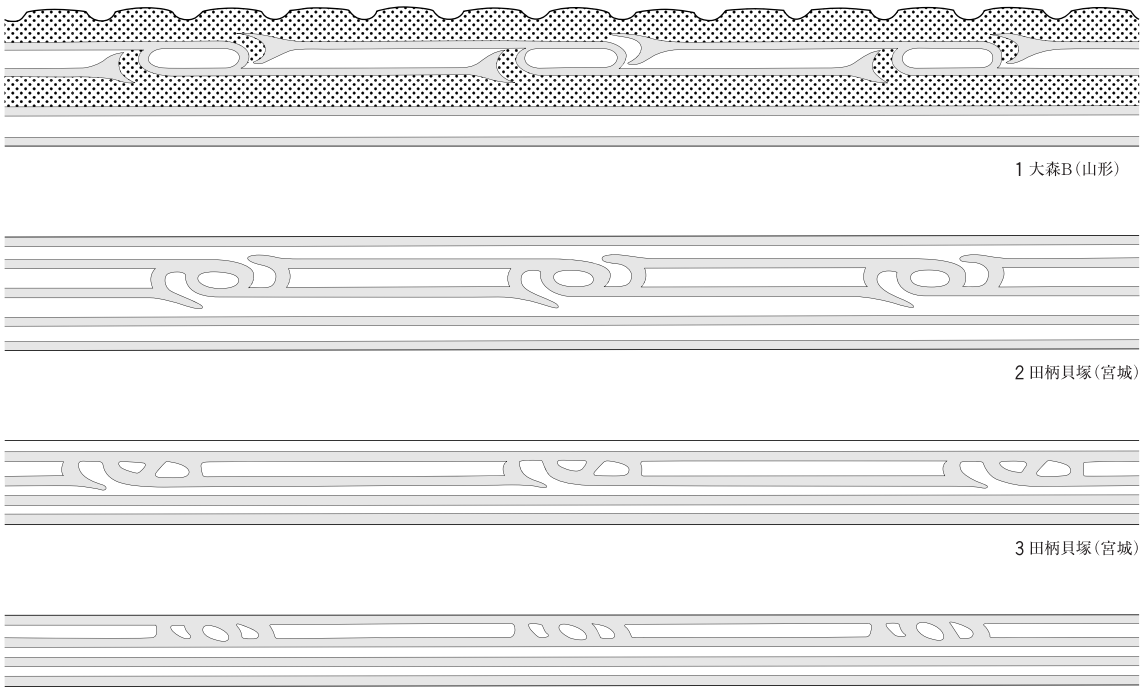


図37　「入組矩形文装飾深鉢」に施された入組矩形文模式図

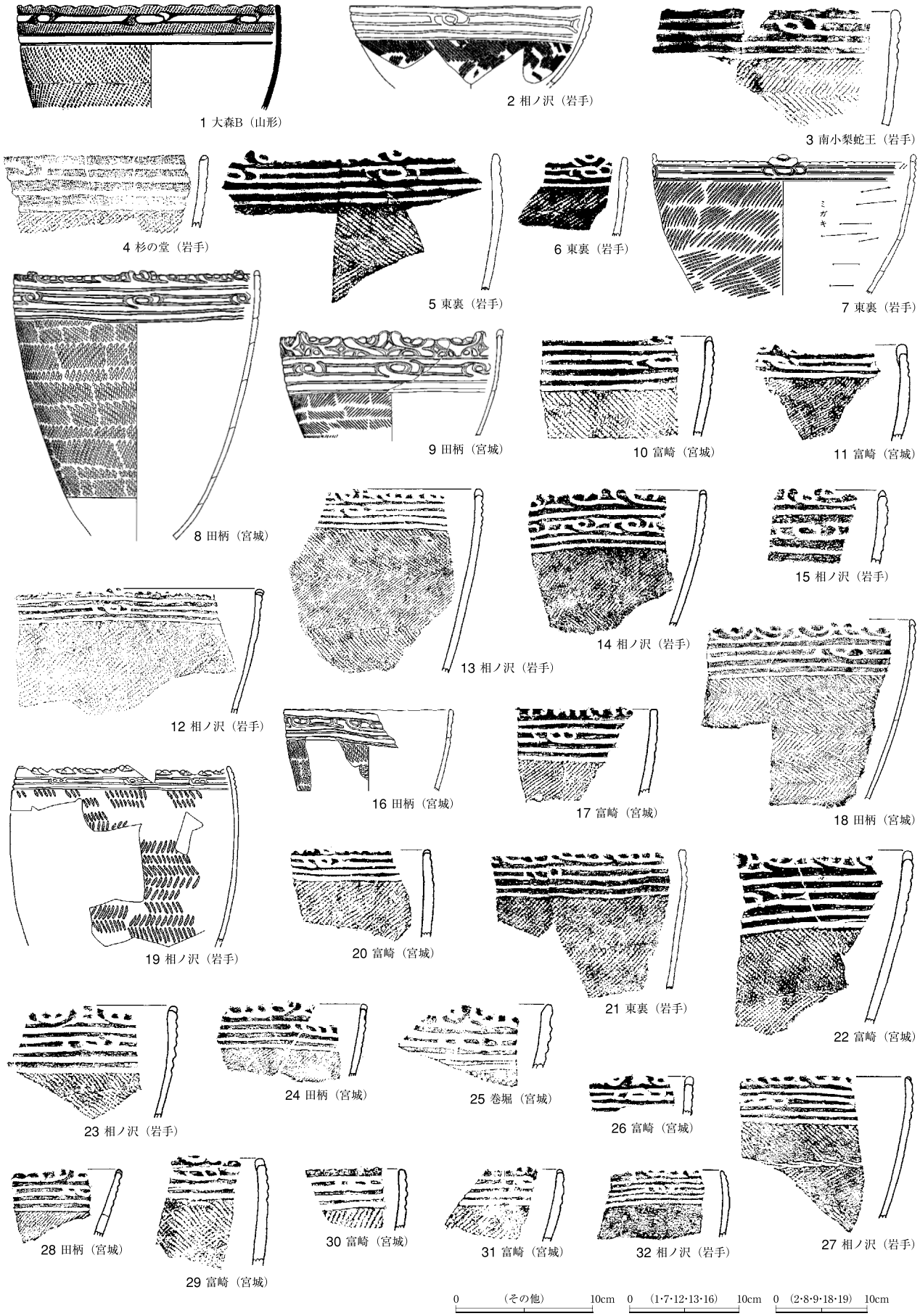


図38 「入組矩形文装飾深鉢」集成図

り（小林2005ａ：30頁）、編年的位置を考える上で参考となろう。

図38－８・９の頸部文様帯には、図38－５～７と同様の入組矩形文が施されるが、口端の加飾が著しい。８は口端突起の中間や右脇から右下向きに沈線が伸びて、鉤爪状区画が作出され、区画内が口端からの刻み目で充填され、突起間にも同様の装飾が配される。筆者がＢ突起４ｂ類や珠紋縁とした装飾に相当するが、この装飾は大洞ＢＣ１～ＢＣ２式の特徴であることが指摘されている（小林2004ｂ：38－39頁）。口端の右下方向に突き出た鉤爪状区画は、(口)頸部文様帯に入組矩形文を施した深鉢に広く認められており（図38－13・14・21・22・27・32)、当該文様との緊密性を窺わせる。更に図38－９は、Ｂ突起の中央から菱形の区画が陰刻され、左右の対角又はその一端から沈線が弧状に伸びて、下端の界線乃至は口端に接し、半円形の区画が作出される。８・９とも口端装飾の陰刻が細く、陰刻後の磨きや潰しも顕著でなく、陽刻部が大きく作出されることから、古的様相を呈していると言えるであろう。

上記から、やや上下幅を持った入組矩形文は、大洞ＢＣ１式に位置付けられる公算が高いと判断される。入組三叉文高坏においても、前記したようにやや幅広の入組矩形文は古相の形制（Ａ類）との緊密性が認められており、同様の推移が想定される。

図37－３は、鼓形区画の上端の描線の末端同士が連結し、細長い鉤爪状のモチーフとなった例である。図38－16～18が実在の資料であるが、文様帯の上下幅が狭まって、文様が更に密着した結果と想定される。図38－18には小波状縁の下縁を縁取るように二重の弧線文が配される。弧線の両端は突起間と突起中央で口端に露出しており、口端から削り込まれた珠紋縁と同様の効果が観察される。「弧線文を伴う小波状縁」（小林2005ａ:23－26頁）との近似性から、同例は大洞ＢＣ１式に位置付けられるであろう。

図37－４は、鼓形区画の上下端の描線の末端同士がが連結して、部分的に刻み目を持つ平行線と化した例である。細長い矩形の陽刻部の間に、短小の陽刻部が３個存することから、入組矩形文の系譜にあると想定される。図38－19～21・23～32が実在の資料であるが、殆どが陰刻と陽刻部の幅が同等で、文様帯の上下幅は狭小となっている。３個の短小の陽刻部のうち、中央の陽刻部は紡錘形に作出されており、咬合部の痕跡であったことを窺わせる。図38－20・23・32の咬合部は、入組矩形文からの発展を物語っていると言えるであろう。

入組矩形文装飾深鉢の口端に、右下方向に突き出た鉤爪状区画が顕著であることは前記した。その他に、山形状の突起に三叉状の陰刻を配し、突起の左右を縁取ったり（図38－11･26)、突起間を弧状に縁取った装飾が認め

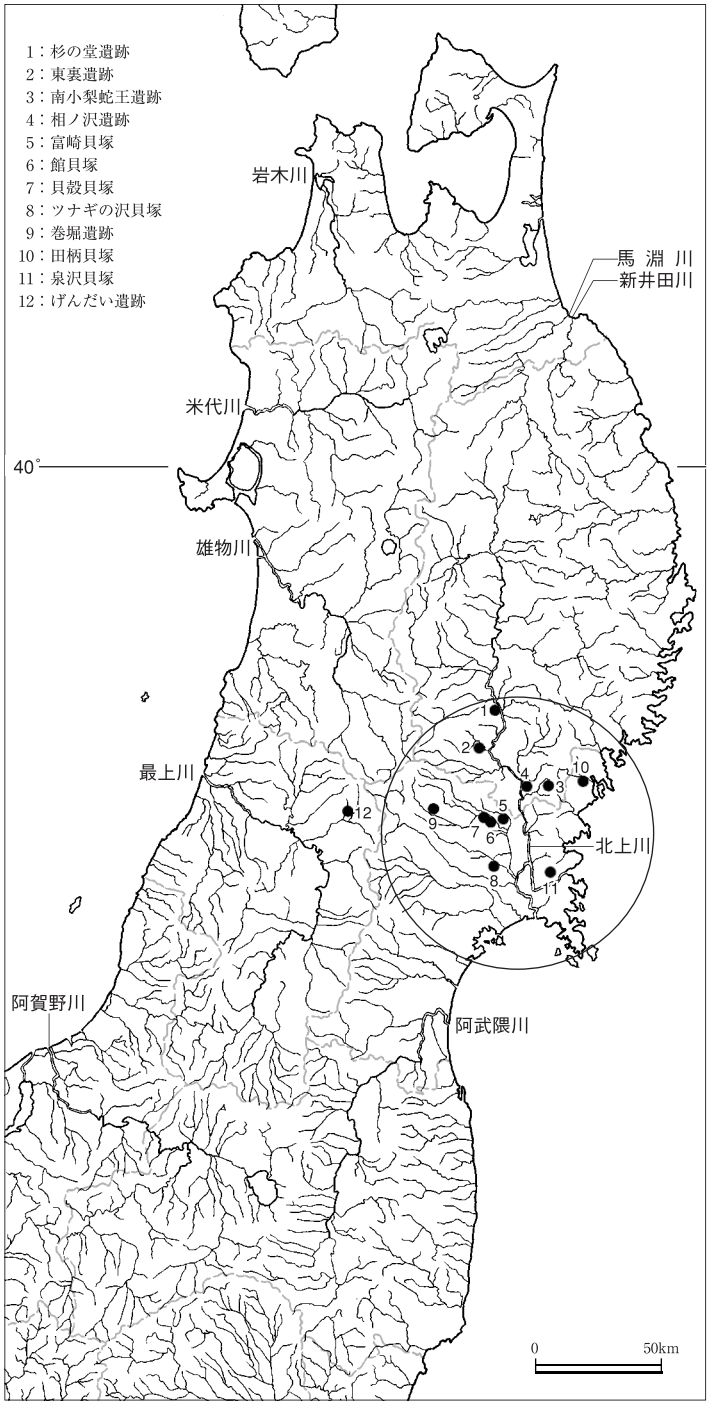


図39　「入組矩形文装飾深鉢」を出土した遺跡

られる（図38－23～25･28）。特に前者は、先の平行線文装飾深鉢と共通した装飾となっており、その親和性を明示している。

当該土器の体部には、異原体による羽状縄文が施文される。篦刻目技法装飾深鉢や平行線文装飾深鉢と同様に、東北中部に通徹した地域性となっている。

当該土器について、口端では装飾性の乏しいものから加飾化への変化、更に（口）頸部では文様の密着化の経過が指摘される。上記した推移は、当該域に固有の入組三叉文高坏や平行線文装飾深鉢にも認められており、器種間で呼応していた様相が窺える。更に入組矩形文装飾深鉢の口端形態や（口）頸部文様に、該域固有の篦刻目装飾深鉢からの系統立った変遷が認められること、また体部に羽状縄文が継承されていることを勘案するならば、その母体が篦刻目技法装飾深鉢にあったと見なすことができるであろう。

編年的位置　当該土器が、大洞Ｂ１新式～Ｂ２式の篦刻目技法装飾深鉢を母体に成立したと見なした以上、同深鉢に後続することになる。また他器種との文様装飾の共通性から推して、大洞ＢＣ１～ＢＣ２式に位置付けられるであろう。(口)頸部文様帯が比較的幅広に構成され、口縁部上端の区画を欠き、口端の刻み目の間隔がやや大振りとなる例は、大洞ＢＣ１式に比定されよう。文様帯が漸次狭小となる傾向が指摘され、陰刻と陽刻部の幅がほぼ同等で、口端が細かに刻まれた例は、大洞ＢＣ２式に相当すると考えられる。

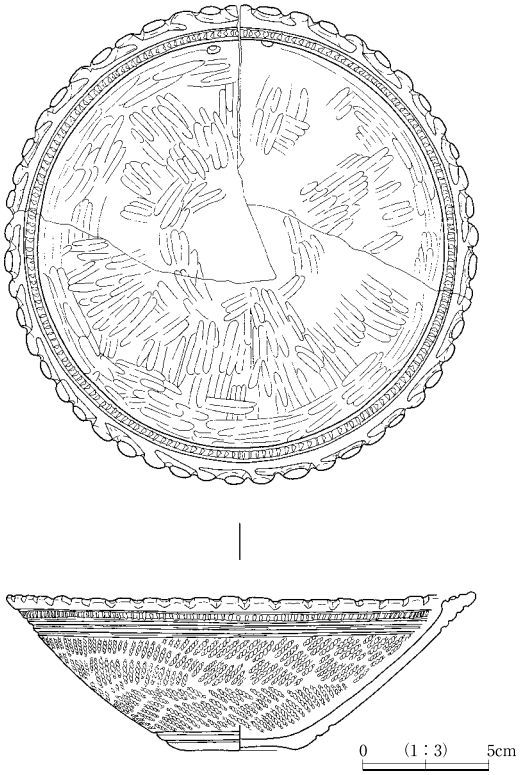


図40　山形県釜淵C遺跡出土の「縄文施文浅鉢1類」

分　布　管見の限りでは、当該土器の出土例は決して多くはない。仙北湖沼地帯では、富崎貝塚に顕著であるが、その他ではツナギの沢・貝殻・館の各貝塚で、更に迫川上流域では巻堀（まきぼり）遺跡で出土している。北上川流域では岩手県杉の堂・東裏・南小梨蛇王（みなみこなしじゃおう）・相ノ沢の各遺跡､沿岸域では宮城県田柄貝塚や泉沢貝塚、また奥羽脊梁山脈の西側では山形県げんだい遺跡で出土している（図39）。田柄貝塚や北上川流域に目立っていることから、入組三叉文高坏よりもやや広域的な分布が指摘されるであろう。

Ｄ　大洞Ｃ１式に固有の「縄文施文浅鉢」

上記した高坏や装飾深鉢以外の器種においても、大洞Ｃ１式古段階の東北中部には、体部に羽状縄文を施した特徴的な浅鉢形土器が分布している。

特　徴　当該浅鉢の形制は、口端が内削ぎ状に肥厚し、底部から口縁部にかけて40度前後の角度で直線的又は内彎気味に立ち上がり、底面は平底又は弱い上げ底となる。

口端の外縁は、篦刻み目によるやや大振りの小波状縁をなしており、谷部から刻み込まれた陰刻による装飾が施される。更に内側には、幅狭の平行沈線が巡らされ、細かな刻み目が充填され、截痕列となる。口縁部の文様帯には、通常４条の平行沈線が囲繞される。そのうち上位２条の沈線間は、細かな刻み目による截痕列となっており、その直下には狭小な無文帯が２条作出される。体部には異原体による羽状縄文が施文され、底面付近は沈線で区画され、その直下から底部まで研磨され、無文帯が作出される。

内面は、口端の内側が張り出して稜が形成され、その直下から底面にかけては、研磨が丁寧に加えられており、特に放射状の暗文に類した縦位のヘラミガキ痕に特徴付けられる(図40)。体部の器壁は４　前後と非常に薄く作出され、胎土も精選されており、手に取ると見た目よりも軽量な印象を受ける。

当該浅鉢は口縁端部の装飾手法により、三つの種類に区分することができる（図41）。

1類：上面から見ると、突起の両端から左上向きに沈線が伸びて、鉤爪状の区画が連続して作出される。突起右端から伸びた沈線は、突起の下縁を縁取って、突起を楕円形に浮き出しており、左端から伸びた沈線は左隣突起の下縁の中途までを縁取る構成となる。鉤爪状ではなく、突起の下縁を縁取る弧状沈線と左上向きに伸びた沈線が、交互に配された例も認められる（図40、図41－１）。

2類：突起間の谷部から伸びて２個の突起を連結した弧状沈線と、谷部外縁に頂点を持つ三叉状の陰刻が、それぞれ交互に配される。弧状沈線で結ばれた突起は２個一対となるが、突起間も刻み込まれ、突起は楕円形に浮き出される（図41－２）。

3類：突起の谷部に弧状沈線と三叉状陰刻が、交互に配されたもので、前者は突起の下縁を縁取っており、突起は楕円形に浮き出される。２類の２個一対の突起が、１個のみとなった構成である（図41－３）。

上記した三種類のうち、１類の装飾が一般的である。筆者が観察した山形県釜淵Ｃ遺跡では、11例中７例が１類、３例が２類に相当している。肥厚した口端の上面に施された同様の鉤爪状の陰刻は、大洞Ｃ１式の高坏（図25－２）にも認められており、大洞ＢＣ２式終末～Ｃ１式古段階の特徴に挙げることができるであろう。１類に次いで２類が多く見受けられるが、３類については類例が少ない。２類の中に３類の装飾を合わせ持つ例が存することから、３類は２類の変異であったと見なすことができるであろう。

編年的位置　口縁部の文様帯として囲繞された刻み目の細かな截痕列は、大洞ＢＣ２式終末～Ｃ１式の特徴であり、口部の突起列は大洞Ｃ１式古段階の浅鉢形土器に共通する。しかし口縁部の文様帯に截痕列ではなく、斜線直線化した羊歯状文を施した例も存しており、大洞ＢＣ２式終末段階に相当する資料も含まれている。

また1987年に、東北大学文学部考古学研究室（当時）によって調査された宮城県石巻市（旧河北町）皿貝（さらがい）貝塚では、157枚にわたる大洞Ｃ１式の堆積層が検出されたが、その中に当該浅鉢が含まれていた（氷見1997:図３）。当該浅鉢の帰属型式を特定する上で、有力な根拠となろう。

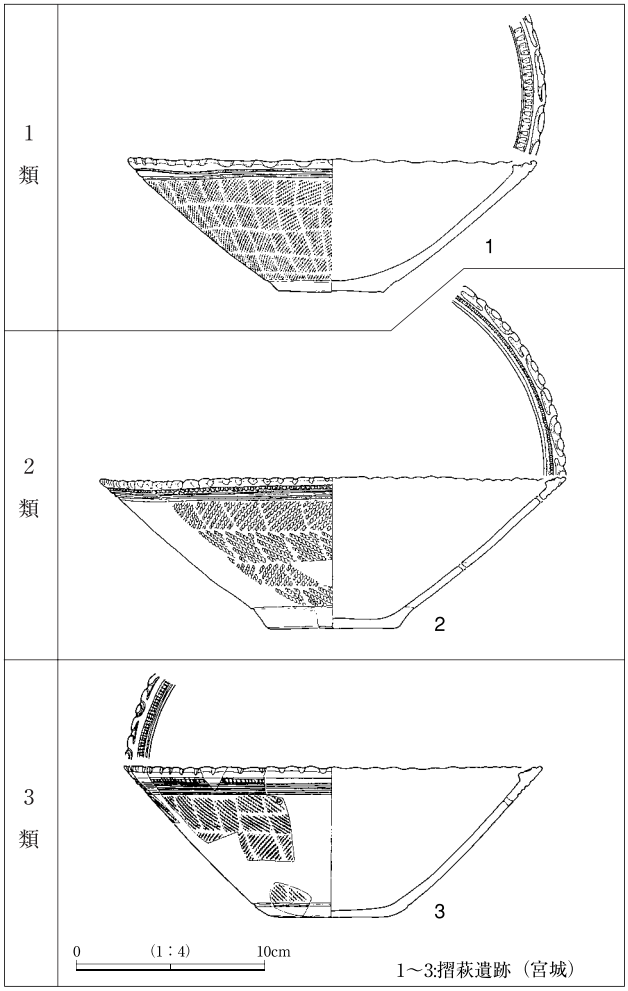


図41 「縄文施文浅鉢」の分類

上記から、当該浅鉢が大洞Ｃ１式古段階に比定される公算が高いと判断される。しかし大洞ＢＣ２式の終末段階の資料も含まれており、やや時間幅が存していたことが想定される。

分　布　当該浅鉢は先行型式で触れた他の類型に比べ、やや広域に分布している。仙北湖沼地帯では、ツナギの沢貝塚で多く出土しており、その他に中沢目・大多古・敷味・館・永根の各貝塚等で出土している。宮城県内では、吉田川上流域の摺萩遺跡に顕著に認められ、北上川河口部～沿岸域では、泉沢・長塩谷（ながしおや）・皿貝・西ノ浜・里浜・沢上・南境・尾田峯の各貝塚や宝ヶ峯遺跡で出土している。岩手県内では北上川中流域の川岸場Ⅱ・清水畑・手代森（てしろもり）遺跡、沿岸域の宮野貝塚や上鷹生（かみたこう）遺跡で出土している。奥羽脊梁山脈を介した山形県内では、砂川（すながわ）Ａ・的場（まとば）・矢口（やぐち）・作野（さくの）・宮の前・漆坊（うるしぼう）・釜淵Ｃ・水上（みずかみ）の各遺跡で出土している。

管見の限りでは、当該浅鉢の出土例は福島県三貫地貝塚（森ほか1988:第173図18）が南限、岩手県盛岡市手代

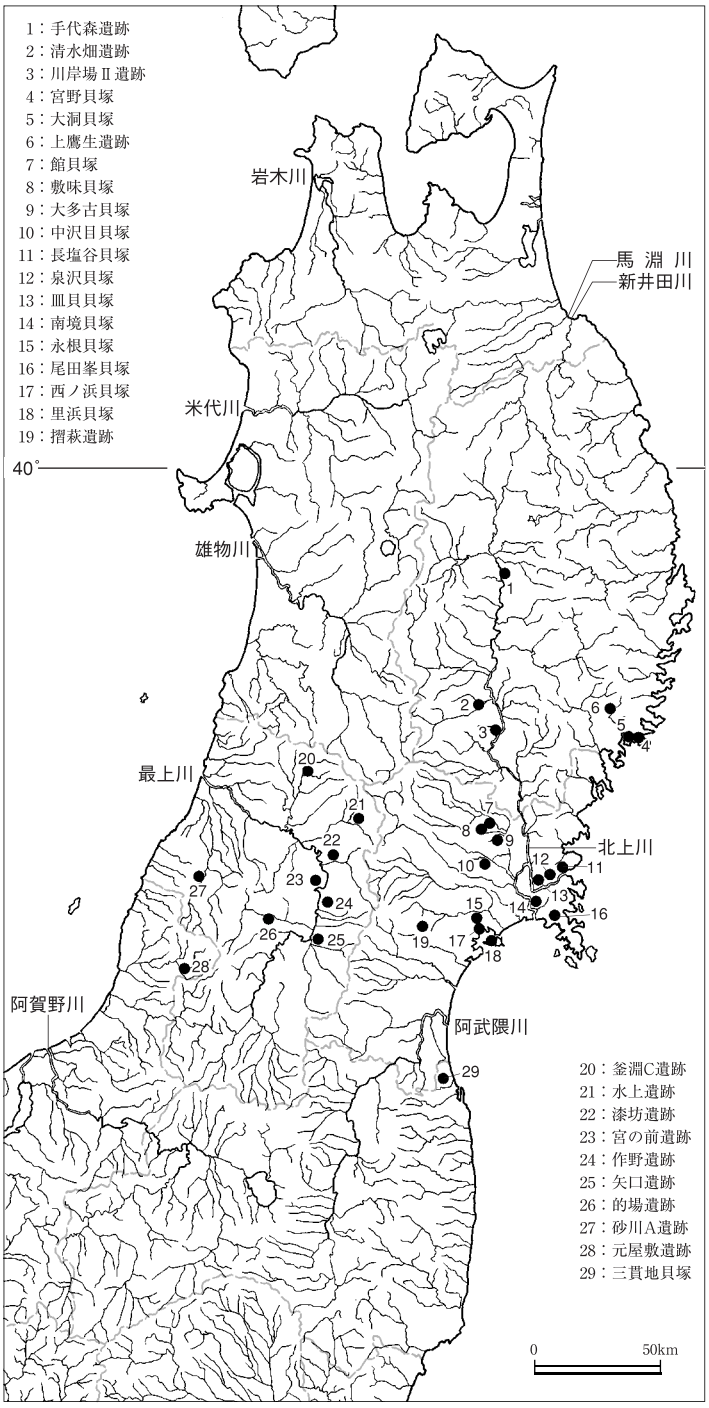


図42　「縄文施文浅鉢」を出土した遺跡

森遺跡（佐々木1986:第126図１）が北限、新潟県元屋敷遺跡（滝沢ほか2002：図面図版245－2828）が西限となり、特に山形県釜淵Ｃ遺跡（黒坂2003）と宮城県摺萩遺跡（柳沢ほか1990）に、際立って出土している。分布の主体が、仙北湖沼地帯よりもその周縁にあり、分布域も広いことから、仙北湖沼地帯固有とは見なし難いが、分布が東北中部に限定されており、大洞Ｃ１式古段階を表徴する器種類型として、今後の研究の指標に位置付けておきたい。

E　小　結

以上、仙北湖沼地帯を中心とした地域に固有の器種類型について、解説してきた。

大洞Ｂ式の当該域には、刻目技法装飾深鉢が卓越している。篦刻目技法は後期末葉の入組帯状文の装飾深鉢の系譜を引くもので、その技法が局地的に残存したと見なすことができるであろう。当該土器には主軸線の末端同士が入り組んだ三叉文が特徴的であり、後続する入組矩形文装飾深鉢に継承されたと考えられる。

大洞ＢＣ式では平行線文装飾深鉢が、入組三叉文高坏とほぼ同様の広がりを有することが指摘される。口端の装飾性に乏しい平行線文装飾深鉢１類と、口端に篦状工具による刻み目が加えられた同２類とに二分され、前者から後者への変遷が想定され、前者が大洞ＢＣ１式、後者が同ＢＣ２式に相当すると考えられる。

また同式では、入組矩形文装飾深鉢も卓越している。末端同士が入り組む細長い矩形文様に特徴付けられ、入組三叉文高坏の口縁部文様との類似性が指摘される。先行する篦刻目技法装飾深鉢からの発展が想定され、やや上下幅のある文様から密着した構成への変化が予察される。大凡前者が大洞ＢＣ１式、後者が同ＢＣ２式に比定されよう。

大洞Ｃ１式古段階には、縄文施文浅鉢が東北中部に分布している。前記した三つ類型に比べると分布域が広く、仙北湖沼地帯に固有とは認め難いが、口端装飾や形制、器面調整が極めて特徴的であり、東北中部の該期の指標に位置付けることが可能である。

上記した四つの類型の体部には、いずれも異原体による羽状縄文が施文される。粗製深鉢の羽状縄文は、晩期前葉～中葉の東北中部に通徹した地域性となっており、装飾土器にも適用されることを示している。

このように仙北湖沼地帯を中心とした地域には、固有の土器群が分布している。晩期初頭に確立された仙北湖沼域の特殊性が、晩期前半期に通底しており、取り分け入組三叉文高坏・平行線文装飾深鉢・入組矩形文装飾深鉢が盛行した大洞ＢＣ式期に、その地域色が顕在化していたことが指摘されるであろう。

8　結　　語

本稿では、須藤隆氏によって提起された大洞ＢＣ式期に特徴的な入組三叉文高坏について、多方面から型式学的検討を加えてきた。これまで明らかにした事項を纏めると、以下の通りである。

① 入組三叉文高坏は大洞ＢＣ式期の仙北湖沼地帯に固有の器種類型で、規格性が強く、その分布も極めて限定される。仙北湖沼地帯以外での出土例は少なく、北上川を遡った交通の要衝となる拠点集落にもたらされる傾向が看取され、現時点では仙台平野以南での出土例は認められない。当該高坏が出土した範囲が、仙北湖沼地帯遺跡群の通常の交流圏であったことが暗示されよう。

② 入組三叉文高坏は口縁部の形状から、強く内彎した入組三叉文高坏Ａ類と、内屈して稜が形成された同Ｂ類とに二分され、前者から後者への型式変化が想定される。概ね前者が大洞ＢＣ１式（同ＢＣ１～ＢＣ２式古相)、後者が大洞ＢＣ２式(同ＢＣ２式新相～終末)に位置付けられると思われるが、前者の形制は大洞ＢＣ２式にも認められており、厳密な型式区分とは見なし難いようである。

③ 入組三叉文高坏は、東北中部に特徴的な後期末葉以来の魚眼状三叉文等を配した黒色磨研の台付浅鉢の系譜を引くと考えられる。大洞ＢＣ式期に地域的偏向が強まって確立した器種類型であったと想定される。

④ 入組三叉文高坏の文様は、背向する主軸線が密着し伸長化した入組三叉文に特徴付けられる。この文様は該域の大洞Ｂ２式の入組三叉文の系譜を引くものの、描出手法の特徴から大洞Ｂ２式とは識別可能と判断される。また入組三叉文高坏を構成する諸属性は、大洞Ｃ１式の高坏に継承されることなく、消滅の過程を辿ったと考えられる。

⑤ 大洞ＢＣ式期の仙北湖沼地帯には、入組三叉文高坏以外にも特徴的な器種類型が存している。特に平行線文装飾深鉢は、当該高坏と近縁の分布を示しており、文様の描出手法が共通する入組矩形文装飾深鉢は、やや広範囲の分布が認められる。この入組矩形文装飾深鉢は、大洞Ｂ式期の当該域に特徴的な篦刻目技法装飾深鉢が母体になった可能性が考えられる。

一般に様式化されたと言われる亀ヶ岡式土器の中にあって、局地的な広がりを持つ土器群を跡づけてきた。特に入組三叉文高坏は、仙北湖沼地帯に固有の器種類型であり、本稿では須藤氏の指摘した所説を多岐にわたって追認してきたことになるであろう。

晩期前葉の仙北湖沼地帯において、入組三叉文高坏や平行線文装飾深鉢のような個性的な土器群が製作された背景には、共通した生業基盤に立脚した社会が存立していた可能性が想定されている。湖沼地帯といった比較的同質の地理的環境下にあって、水鳥狩猟や淡水産資源に依存した生業形態が、社会的紐帯を強固なものとし、斉一性のある地域相を築き上げて行ったと考えられる。

また中沢目貝塚で出土した骨角製・貝製装飾品（図５－15～22）や土製仮面（図４－１)、恵比須田遺跡の大型遮光器土偶（図４－３）に象徴されるように、大洞ＢＣ式期の当該域には、非常に高揚した文化的内容を看取することができる。上記したような安定した地域社会が基盤となって、亀ヶ岡文化圏の中でも有力な地域圏の形成を可能にしたと見なすべきであろう。

この文化的領域を表徴する入組三叉文高坏は、複雑な透かし彫りの施された高い脚部を特徴とする。非常に手の込んだ造形品であることから、珍重された土器と推察される。恐らくは、仙北湖沼地帯に特定の製作者が存して、製品が域内にくまなく行き渡るネットワークが確立していたと考えられる。また数量的に多くはないが、域外の有力遺跡にも移出されており、特に約250　離れた青森県槻ノ木遺跡でほぼ完形品（図６）が孤立して出土した背景には、交易品として中継されてきたのではなく、故地である仙北湖沼地帯から直接将来され、奢侈（しゃし）品として丁重に扱われていた可能性が想定されよう。このように当該高坏は、亀ヶ岡文化圏内の地域間の交流関係を考究する上での指標と見なすことができるであろう。

須藤隆氏は、入組三叉文を施した高坏が、中沢目貝塚で大洞ＢＣ式の層準から出土した事例を挙げて、芹沢長介氏によって設定された「雨滝式」を肯定的に紹介している。確かに装飾意匠としての入組三叉文と羊歯状文が、ある時期併存の関係にあったことは疑いなく、東北中部においては大洞ＢＣ２式の終末段階まで、単位文様

としての入組三叉文が、一部の器種の特定部位に残存する。しかし大洞ＢＣ式期の入組三叉文が、先行型式とは識別される内容であることも、付言しなければならないであろう。

大洞ＢＣ式の入組三叉文には、背向した主軸線が密着し、伸長化又は短小化の傾向が看取される。特に後者は、Ｚ字状の陽刻部を意識した構成で、陰刻文様を基調とした大洞Ｂ２式からの発展が想定される。羊歯状文は陰刻によって浮き出された陽刻部の形状を基本的な意匠としているが、大洞ＢＣ式の入組三叉文にも、同様の効果を指摘することができ、三叉文は陽刻部を描出するための副次的な役割へと変化を遂げている。一方伸長した三叉文においても、陰刻部と陽刻部の幅が同程度を呈しており、陰刻主体の文様構成からの脱却が指摘されるであろう。

また、須藤氏が「雨滝式」の例証に挙げた中沢目貝塚の層位的事例は、大洞Ｂ２式期の層準に羊歯状文施文の土器を含まない一方、上記の特殊化した入組三叉文が同ＢＣ式の一部の器種に施されたことを実証したと見なせる内容である。入組三叉文高坏が大洞ＢＣ式の層準から出土し、先行型式の台付浅鉢とは分別されることを明示したのであって、大洞Ｂ式と同ＢＣ式を統合した「雨滝式」の根拠にはなり得ないと筆者は理解している。

以上、入組三叉文高坏を中心に東北中部の大洞ＢＣ式を考究してきた。一部の器種類型を取り上げたに過ぎないが、多岐にわたった検討の結果、多くの知見が得られたと見るのは、筆者の慢心であろうか。地道ではあるがこのような型式学的検討を重ねて行くことが、多様性に満ちた亀ヶ岡式土器を理解するための、必須の手続きであることを確認してきた次第である。

謝　辞

本稿は、須藤隆先生によって着目された大洞ＢＣ式に固有の「入組三叉文高坏」及びその関連資料を渉猟し、考察を試みたものである。須藤先生には、本稿の着想から執筆に至るまで多大なるご指導を賜ると共に、中沢目貝塚の研究成果を通して、多くのことを学ばせて頂きました。また高橋龍三郎先生には、早稲田大学考古学研究室所蔵の杉の堂遺跡資料の観察に際して便宜を図って頂くと共に、亀ヶ岡式土器研究の進め方について、様々なご教示を賜りました。平内町歴史民俗資料館所蔵の槻ノ木遺跡資料の実測に当たっては、平内町教育委員会の後藤久志氏にご配慮を賜りました。山形県埋蔵文化財センター所蔵の宮の前・釜淵Ｃ遺跡資料の図化に際しては、植松暁彦・黒坂雅人両氏にご配慮を頂きました。記して感謝の意を表します。　（2006年４月30日稿了）

註

1）東北地方の地域区分については、拙稿（小林2006：57頁註１）に準拠する。即ち本稿で示した「東北中部」とは、北緯40度以南（厳密には北緯39度45度付近－秋田市と盛岡市を結んだライン－よりも以南）～山形・宮城両県にかけた地域であり、北緯40度以北が「東北北部」に相当する。但し山形県の最上川上流域や宮城県の阿武隈川下流域は、「東北南部」に含まれる可能性が考えられる。

2）「高坏（C_2類型）」又は「台付鉢C_2類型」の呼称は（須藤1984）に拠るが、1995年に刊行された中沢目貝塚の第２～４次調査の報告書では、「高坏Ｃ１ｐ類」と別の呼称で分類されている（須藤ほか1995：40頁）。

3）「仙北湖沼地帯」は、須藤隆･興野義一両氏によって創出された呼称である旨を、須藤先生よりご教示を頂いた。

4）鹹水性貝類を主体とした貝塚で、最も谷奥まで広がりをみせるのは縄文早期末葉～前期初頭である。石巻平野では、伊豆沼･長沼周辺までが鹹水域であったと推定され、長沼の北岸に位置する糠塚（ぬかづか）貝塚では、前期初頭上川名Ⅱ式のハマグリを主体とする貝層が確認されている（須藤ほか1995）。同貝塚は、現在の汀線よりも約35㎞内陸に位置している。

藤沼邦彦氏等に拠ると、「北上川中流域貝塚群」では、早期～前期初めにかけては鹹水性貝塚（14ヶ所）、前期中頃～中期は汽水性貝塚（10ヶ所）、後・晩期は淡水性貝塚（34ヶ所）へと変化しており、後･晩期の貝塚の増加が顕著である（藤沼ほか1989：１頁）。

5）長根貝塚では、早期末葉から晩期末葉まで、断続的であるが長期にわたる居住が確認されている。早期末葉の素山Ⅱ式期の貝層は、カキ・ハマグリ・アカニシ・オキシジミ等の鹹水性貝類が主体をなすが、最も規模の大きな前期末葉～中期初頭の貝層はヤマトシジミ主体の汽水性貝層、後期後葉～晩期初頭の地点ではオオタニシ・イシガイ主体の淡水性貝層へと変化している（須藤ほか1995：13頁）。

6）鳴瀬川と江合川に挟まれた独立丘陵には、学史上名高い早期末葉の素山貝塚（主鹹貝塚）が位置している。

7）鳴瀬川南岸の大松沢丘陵に位置する晩期の上野遺跡（図２）では、淡水性貝層の分布が指摘されているが、詳細は不明である（藤沼ほか1989：70－71頁）

8）仙北湖沼地帯北限の夏川流域に位置する登米市石越町富崎貝塚（金剛寺１式～大洞Ｃ１式）では、イノシシとシカの永久歯の萌出及び摩耗状況から、冬季を中心として初秋から早春にかけて多く捕獲されていたと推定されている（後藤･小井川2003：50－53頁）。

また中沢目貝塚では、シカやイノシシの骨・角・牙を用いた製品が多数出土している（図５）。狩猟･漁撈具としては、骨角鏃（図５－11～14）や根挟み（１～５）、刺突具（６～10）等が出土しているが、骨角鏃や刺突具はシカの中手･中足骨や鹿角、釣針はシカ或いはイノシシの四肢骨を素材としている。獣皮の穿孔や土器製作等に用いたと思われる加工具としては、シカ・イノシシの尺骨や中手・中足骨を素材とした骨篦や尖頭器が多く出土している。また装身具としては、同様の素材による髪飾り（15～20）や華麗な装飾を持つ鹿角製垂飾（環状角製品）等が出土している。その他に用途は明確でないが、装飾的な弭形鹿角製品（22）も出土している。上記からもシカやイノシシが、食料資源としてだけではなく、生活資材として重要な役割を果たしていたことが窺えよう。

9）管見の限りでは、槻ノ木遺跡例以外に全形の窺える事例としては、宮城県石巻市南境貝塚（図７－１）の１例が挙げられるのみである。

10）平内町歴史民俗資料館所蔵の槻ノ木遺跡出土の高坏（図６）は、（青森県立図書館編1968:20頁46）が初出となるが、この他に下記の図録に写真が掲載されている。（青森県立郷土館編1986：35頁46）、（青森県埋蔵文化財調査センター編1990：54・193頁）。

11）中沢目貝塚出土土器群の類別は、報告文献で差異が見られるため、本稿では報告書（須藤編1984、須藤ほか1995）に準拠し、大洞ＢＣ式相当の晩期２期の土器群を「中沢目貝塚Ⅱ群土器」とした。従って「中沢目貝塚Ⅰ群土器」が大洞Ｃ１式、「中沢目貝塚Ⅲ群土器」が大洞Ｂ２式、「中沢目貝塚Ⅳ群土器」が大洞Ｂ１式に相当する。

一方須藤隆氏の論考（須藤　1984）では、大洞ＢＣ式相当が「中沢目貝塚（出土）３群土器」に分類されており、「中沢目貝塚（出土）１群土器」が後期末葉、「中沢目貝塚（出土）２群土器」が大洞Ｂ式、「中沢目貝塚（出土）４群土器」が大洞Ｃ１式に相当する。ローマ数字とアラビア数字では、指示する内容を異にしており、注意を要する。

なお須藤氏は、「中沢目貝塚Ⅱ群土器」が深鉢、鉢、浅鉢･台付浅鉢、壺、注口土器によって構成され、装飾・施文方法においては羽状縄文の使用頻度が高く、篦磨きと磨きによる浮文化が顕著で、展開する文様構成に基本的な単位文様が存していることを、特徴に挙げている（須藤編1984：134－137頁）。

12）本稿の「宮城県北半」とは、宮城県内でも名取川以北の地域を指示している。地形区分上では、北上川下流域（仙北湖沼地帯）、南三陸～松島湾にかけての沿岸域、仙台平野北部が該当し、ほぼ図２の図幅の範囲となる。縄文後期の標識遺跡である金剛寺貝塚（図11－14）は、名取川以南の高館丘陵に位置しており、厳密には筆者の定義に合致しないことになるが、同流路に近接しており、土器の内容も北半と類似していることから、本稿では同類として扱った。

13）沼津貝塚は、西方に開口する古稲井湾（現沖積地）の最奥部の半島状に突き出た丘陵付け根の鞍部（標高15～20ｍ）一帯に立地しており、遺跡全体の面積は東西220ｍ×南北160ｍを測る。最も古い遺物では、縄文前期初頭（大木１式）の資料が出土しているが、貝層は中期後半（大木８ｂ・９式）になって初めて形成され、中期後半～後期初頭はハマグリが多く、後期中葉～晩期前半にかけてはアサリ主体に変化し、晩期後半～弥生時代にかけてはヤマトシジミが主体となる傾向が看取されている（藤沼ほか1989：151頁）。また晩期前葉までは、ヤマトシジミが全く含まれていないことから、晩期前葉以降にヤマトシジミの棲む潟湖が急速に形成されていったことも指摘されている（林1984：136頁）。上記の貝相の変移は、古稲井湾の閉塞又は埋め立て時期が、弥生時代にはほぼ終了したことを窺わせるものであり、地理学上の成果からも、約2,000yr B.P.以降、海水の影響を受けない環境になっていたことが追認されている（松本1996:11－13頁、伊藤2003：545頁）。

14）沼津貝塚第Ⅰアサリ層出土のＺ字文（図13－２）は、第Ⅲアサリ層出土土器（図13－16）からの発展が想定され、大洞ＢＣ２式に位置付けられよう。しかし刻まれた陰刻が細く、陽刻部が大きく作出されており、大洞ＢＣ１式の可能性も否定できない。

15）予備調査として、1972年10月に中沢目貝塚Ａ地点とその周辺の測量及び貝層の範囲確認調査が、東北大学文学部考古学研究室（当時）によって実施された。この調査に基づいて、1973年11月第１次調査として、Ｈ３・Ｉ３・Ｇ３区の２ｍ四方の調査区が開設され、Ⅻ層までの貝層が精査された。1979年10月第２次調査として、同調査区が更に掘り下げられ、Ｈ３・Ｉ３区の１～27層、Ｇ３区の１～10層が精査された。1984年10～11月の第３次調査では、ＨＩ３区の28～124層、Ｇ３区の11～69ｂ層が精査され、1986年８～９月の第４次調査では、ＨＩ３区の125～335層、Ｇ３区の70～215層が精査された。

第４次調査を終了した時点では、まだ基底面に達していないが、この貝塚の形成は縄文後期中葉まで遡ると推定されている（須藤編1984:132頁）。なお同貝塚は、1988年に国史跡に指定されている。

16）須藤氏の論考（須藤1984）と報告書（須藤ほか1995）では、層位名称や図示資料の帰属層位に差異が存しているため、図18～21は報告書の層位名称に準拠した。図示資料から判じて、（須藤1984：第４図）の28・29層は、本稿図20の11・12層、（須藤1984：第４・５図）の30・34層は本稿図20の15層に相当するようである。須藤氏の言説に従うなら、最終報告書のＩ３区15層の前後が基準となろう。

17）三叉文の種類については、（小林2005ａ:35－37頁）に準拠している。

18）大塚達朗氏は図23－１を例示し、仙台湾周辺で出土する円形小瘤に向かって相対する三角形状の透かしや菱形の透かしが、西日本の櫃原式紋様の影響・摸倣によって生成したと指摘している（大塚2000：249頁）。しかし東北地方では、既に三角形の透かしが後期中葉の異形土器（田柄貝塚）に存しており、対向した三角形の透かしは、瘤付土器初期の釣手土器（宝ヶ峯遺跡）や台付異形土器（宝ヶ峯遺跡）に認められる。上記から三角形や菱形の透かしは、東北地方における自律的展開を考えるべき

であろう。

19）須藤隆氏は、摺萩遺跡例（図22－15）を「晩期１ｂ期」（大洞Ｂ２式期）に位置付け、後続する入組三叉文高坏に系譜付けられることを指摘している（須藤ほか1995:236－237頁）。しかし別稿（須藤1996:図１）では、「晩期１ａ期」（大洞Ｂ１式期）として同例が図示されている。

20）大洞Ｃ１式の浅鉢形土器は、広い平底を有しており、底部から口縁部にかけて外反気味に開くものや、緩く内彎して開くものがある（高橋龍三郎1981：13頁）。

21）大洞Ｃ１式の椀形土器は、底部から口縁部にかけて強く内彎して立ち上がり、料理用のボウルに近い形状である。装飾の加えられた椀形は、通常平縁で、口頸部に截痕列（旧Ⅱｃ文様帯）が囲繞される。大洞Ｃ１式の高坏は、口端は浅鉢形土器、体部は椀形土器の特徴を兼ね備えており、両器種が折衷されたものと見なすこともできよう。従って底部を欠損した場合でも、大洞Ｃ１式では、椀形の形制で口端に装飾を有するものが高坏、平縁で装飾を持たないものが椀形土器となろう。但し高坏には、椀形の特徴である口頸部の截痕列は認められない。

22）図26－３・５については、大洞ＢＣ２式に位置付けられる可能性も残されている。また図26－７の実測図は、天地が逆に提示されている。

23）館貝塚はＡ地点とＢ地点を合算した数で、（亘理ほか1974:第57図７・８・12？・17・18－拓本、第58図６・７－実測図、第59・60・62・65図－写真、第81図19－拓本、第84図－写真）が該当する。第59図は入組三叉文高坏Ｂ類の、残存部位２/３以上の略完形の資料として重要である。敷味貝塚では、（亘理ほか前掲：第40図８・10－拓本、第45図７－実測図）が該当する。

24）岩手県東裏遺跡出土の入組三叉文高坏が、図29－４に相当することを、須藤隆先生よりご教示頂いた。

25）須藤隆氏は、南境貝塚で類似の透かし彫りが展開する脚部を持つ台付土器が出土しているが、鉢の形態に差異が見られ、地域的な変異と考えられることを指摘している（須藤1992ａ:286頁）。もし図７－１を指示したのであれば、地域差ではなく年代差として捉え直すべきであろう。

26）須藤隆先生には、2005年３月に同例を実見して頂いた。その折、内面を丁寧に研磨しており、形態も極めて類似しているが、中沢目貝塚出土の高坏に比べると、胎土はがっしりしており、やや重たい感じがするとのご教示を頂いた。

27）装飾深鉢・鉢形土器の分類については、（小林2004ｂ：37頁）に準拠する。即ち口頸部が直上する器形がＡ類、屈折する器形がＢ類となる。

図版出典

図１：（須藤2003：第２図）改変

図４－１：（須藤編1984）、２：（阿部・藤沼1996）、３：（丹羽1980）

図５：（須藤編1984）

図６：小林実測（平内町歴史民俗資料館蔵）

図７－１：（後藤2004）、２：（須藤編1984）、３・４：（須藤1984）

図８－１・５・７・９・10・12～17：（須藤編1984）、２～４・６・８・11：（須藤ほか1995）、18～35：（後藤・小井川2003）、36～46：（阿部1990）

図９－47・50・52～54：（須藤1984）、48・49・55：（福山2004）、51：（後藤1953）

図10－１：（山口1995）、２：（佐々木ほか1986）

図11－１・２・４・15・19：（手塚ほか1986）、３・８～13・16～18・22：（柳沢ほか1990）、５・７：（小井川1980）、６・21：（後藤・小井川2003）、14：（後藤1960）、20：（佐藤甲二ほか1983）

図13：（須藤1984：第14・15図）改変

図15－１・２・４・５・10・11・13・17～19・21・25・27～29・31・32・34～37・40～42：（須藤編1984）、３・６～９・14～16・20・22～24・26・30・33・38・39：（須藤ほか1995）、12・60・62～64・70・71・73・75・77：（須藤1984）、43～59：（後藤・小井川2003）、61・65～69：（阿部1990）、72・74：（福山2004）、76：（佐久間・小村田1995）

図16：（須藤編1986：図４）改変

図17：（須藤ほか1995：第５図版）改変

図18－１～70：（須藤編1984）

図19－71～128：（須藤編1984）、129～153：（須藤ほか1995）

図20－154～257：（須藤ほか1995）

図21－258～330：（須藤ほか1995）

図22－１：（阿部・須田：1997）、２・16：（柴田・小林2003）、３：（須藤1984）、４・13：（山口1995）、５・６：（須藤ほか1995）、７・８（及川ほか2004）、９：（須藤編1984）・（須藤1984）、10：（関根2002）、11・12：（濱田ほか2003）、14：（小井川1979）、15：（柳沢ほか1990）

図23－１：（小井川1980）、２・11：（阿部・須田：1997）、３・12：（山口1995）、４・６～８・15：（手塚ほか1986）、９・16・17：（須藤ほか1995）、10：（後藤ほか1989）、13・14：（阿部1990）

図24－１：（宇部ほか2002）、２：（鈴木隆英1985）、３・４：（三浦ほか2005）、５：（宇田川ほか2004）、６：（谷地1992）、７：（八戸市博物館1985）、８：（滝沢ほか2002）、９：（山崎2002）

図25－１・４・５：（小原ほか1990）、２：（石郷岡1987）、３：（須藤1996）、６：（相原1981）、７：（高橋龍三郎1981）、８：（高橋忠彦ほか2000）

図26－１・４：（福田ほか1988）、２：（鈴木克彦ほか1984）、３：（高橋学1994）、５・６：（小原ほか1990）、７：（福山2004）、８：（相原1981）、９：（西野ほか1989）

図29－１～３：（小山内2000）、４・５：（相原1981）、６～11：（宮本2000）

図30－１：（志間ほか1991）、２：（後藤ほか1989）、３：（藤沼ほか1995）、４・５：（柳沢ほか1990）

図31：小林実測（山形県埋蔵文化財センター蔵）

図32－１～44：（後藤・小井川2003）、45：（手塚ほか1986）、46：（相原1981）、47・51・53・56：（宮本2000）、48・54：（濱田ほか2003）、49・50：（草間・金子編1971）、52：（柳沢ほか1990）、55：（及川ほか2004）、57：（須藤ほか1995）

図33－１：（須藤1992ｂ）、２：（手塚ほか1986）、３：小林実測（山形県埋蔵文化財センター蔵）

図35－１・６・11・20・23・26：（須藤ほか1995）、２・13・15～19・21・22・24・25・27～30：（須藤編1984）、３・４：（後藤2004）、５：（林・高橋ほか1983）、７～10・12・14・37・38：（須藤1984）、31～36：（福山2004）、39：（小井川・山田2002）、40：（相原1981）、41：（手塚ほか1986）、42：（小山内2000）、43：小林実測（山形県埋蔵文化財センター蔵）、44～46：（宮本2000）

図38－１：（安孫子1993）、２・12～15・19・23・27・32：（宮本

2000)、3：(熊谷1977)、4：(林ほか1983)、5～7・21：(相原1981)、8・9・16・18・24・28：(手塚ほか1986)、10・11・17・20・22・26・29～31：(後藤・小井川2003)、25：(宮城県教育庁文化財保護課編1977)

図40：小林実測（山形県埋蔵文化財センター蔵）

図41－1～3：(柳沢ほか1990)

引用文献

相原康二　1981『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書－Ⅳ－（一関地区　東裏遺跡)』岩手県文化財調査報告書第55集　岩手県教育委員会

青森県埋蔵文化財調査センター編　1990『北の誇り・亀ヶ岡文化－縄文時代晩期編－』図説ふるさと青森の歴史シリーズ③　青森県教育委員会

青森県立郷土館編　1986『亀ヶ岡文化－華ひらいた縄文の世界－』青森県立郷土館考古部門特別展展示図録　青森県立郷土館

青森県立図書館編　1968『青森県埋蔵文化財展　目録』青森県県民課

安孫子昭二　1993「大森Ｂ遺跡とその周辺」『川崎利夫先生還暦記念論集　野に生きる考古・歴史と教育』pp.19－48　川崎利夫先生還暦記念会

阿部博志・藤沼邦彦　1996「土偶資料　宮城県」『東北・北海道の土偶Ⅱ－亀ヶ岡文化の土偶－』土偶シンポジウム５　宮城大会pp.149－166「土偶とその情報」研究会

阿部博志・須田良平　1997『里浜貝塚Ⅹ－宮城県鳴瀬町宮戸島里浜貝塚風越地点の調査－』東北歴史資料館資料集43　東北歴史資料館

阿部　恵　1990「倉崎貝塚」『大貫館山館跡ほか』宮城県文化財調査報告書第137集　pp.97－126　宮城県教育委員会

石郷岡誠一・西谷隆・菅原俊行　1987『秋田市秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書　地方遺跡・台Ｂ遺跡』秋田市教育委員会

伊藤晶文　1999「北上川下流沖積低地の完新世地形発達」『季刊地理学』第51巻第１号　pp.1－18　東北地理学会

伊藤晶文　2003「北上川下流低地における浜堤列の形成時期と完新世後期の海水準変動」『地理学評論』第76巻第７号　pp.537－550　日本地理学会

伊東信雄・藤沼邦彦・須藤隆ほか　1969『埋蔵文化財緊急発掘調査概報－長根貝塚－』宮城県文化財調査報告書第19集　宮城県教育委員会

植松暁彦　1999『宮の前遺跡第３次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第65集　山形県埋蔵文化財センター

宇田川浩一ほか　2004『向様田Ａ遺跡　遺物編－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅡ－』秋田県文化財調査報告書第370集　秋田県教育委員会

宇部則保ほか　2002『八戸市内遺跡発掘調査報告　15　是川中居遺跡１』八戸市埋蔵文化財調査報告書第91集　八戸市教育委員会

及川真紀・森一欽ほか　2004『川岸場Ⅰ遺跡第２次発掘調査報告書』前沢町文化財調査報告書第16集　前沢町教育委員会

大塚達朗　2000『縄紋土器研究の新展開』同成社

岡道夫ほか　2005「第四章　北上の貝塚」『北上町史　資料編Ⅰ』pp.399－464　北上町史編さん委員会

小山内透　2000『川岸場Ⅱ遺跡発掘調査報告書－北上川上流改修事業・白山地区築堤－』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第317集　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

小原俊巳ほか　1990『上平遺跡群（上平遺跡）－第４次発掘調査概報（遺構・土器）－』盛岡市教育委員会

金子昭彦　1992「大洞Ｂ２式の磨消縄文について（中）－東北地方北部を中心として－」『紀要』ⅩⅡ　pp.1－44　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

草間俊一・金子浩昌編　1971『貝鳥貝塚』花泉町教育委員会・岩手県文化財愛護協会

熊谷常正　1977『南小梨蛇王遺跡』千厩町文化財調査報告第１集　千厩町教育委員会

黒坂雅人　2003『釜淵Ｃ遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第115集　山形県埋蔵文化財センター

小井川和夫　1979『前浜貝塚』本吉町文化財調査報告書第２集　本吉町教育委員会

小井川和夫　1980「宮戸島台囲貝塚出土の縄文後期末・晩期初頭の土器」『宮城史学』７号　pp.9－21　宮城教育大学歴史研究会

小井川和夫　2004「里浜貝塚風越地点出土土器の検討」『東北歴史博物館研究紀要』５　pp.17－51　東北歴史博物館

小井川和夫・山田晃弘　2002「里浜貝塚西畑地点出土遺物」『東北歴史博物館研究紀要』３　pp.45－136　東北歴史博物館

小池一之・田村俊和・鎮西清高・宮城豊彦編　2005『日本の地形３　東北』東京大学出版会

後藤勝彦　1953「登米郡長沼附近の貝塚について」『登米郡北方村－東北における水田単作農村の歴史－』(平重道著)　pp.1－10　宮城県登米郡北方村

後藤勝彦　1960「宮城県名取市高館金剛寺貝塚出土縄文式土器の研究－陸前地方後期縄文式文化の編年的研究－」『宮城県の地理と歴史　Ⅲ』(1982年復刻版)　pp.109－122　東北大学地域社会研究会編（国書刊行会発行）

後藤勝彦　2004「南境貝塚調査の層位的成果Ⅰ　７トレンチの場合－陸前地方縄文中期から後期の編年的研究－」『宮城考古学』第６号　pp.63－110　宮城県考古学会

後藤勝彦ほか　1989「考古資料編」『松島町史　資料編Ⅰ』pp.1－525　松島町史編纂委員会

後藤勝彦・小井川和夫　2003『富崎貝塚－北上川中流域の淡水産貝塚の研究－』石越町文化財調査報告書第１集　石越町教育委員会

小林圭一　2001「最上川流域における縄文時代後･晩期の遺跡分布」『山形考古』第７巻第１号（通巻31号）　pp.21－81　山形考古学会

小林圭一　2003　「東北北半における縄文晩期前葉の注口土器」『研究紀要』創刊号　pp.1－44　山形県埋蔵文化財センター
小林圭一　2004ａ　「大洞Ｂ式「ノ字文」の系譜」『先史考古学研究』第９号　pp.84－111　阿佐ヶ谷先史学研究会
小林圭一　2004ｂ　「岩手県安代町曲田Ⅰ遺跡出土の晩期縄文土器（前編）－ＥⅢ-011住居跡出土土器の再検討－」『研究紀要』第２号　pp.29－55　山形県埋蔵文化財センター
小林圭一　2005ａ　「岩手県安代町曲田Ⅰ遺跡出土の晩期縄文土器（後編）－ＥⅢ-011住居跡出土土器の再検討－」『研究紀要』第３号　pp.21－92　山形県埋蔵文化財センター
小林圭一　2005ｂ　「縄文時代晩期初頭注口土器の一様相－青森市沢山遺跡出土の大型注口土器の検討を通して－」『葛西　勵先生還暦記念論文集　北奥の考古学』　pp.217－255　葛西　勵先生還暦記念論文集刊行会
小林圭一　2006　「山形県天童市宮田遺跡から採集された縄文時代晩期前葉の注口土器」『研究紀要』第４号　pp.35－60　山形県埋蔵文化財センター
佐久間光平・小村田達也　1995　『佐沼城跡』迫町文化財調査報告書第２集　迫町教育委員会
佐々木和博ほか　1985　『香ノ木遺跡・色麻古墳群－昭和59年宮城県営圃場整備等関連遺跡詳細分布調査報告書－』宮城県文化財調査報告書第103集　宮城県教育委員会
佐々木清文ほか　1986　『手代森遺跡発掘調査報告書－北上川水系大沢川の河川改修工事に伴う事前緊急発掘調査－』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第108集　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
佐藤甲二ほか　1983　『茂庭－茂庭住宅団地造成工事地内遺跡発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第45集　仙台市教育委員会
柴田陽一郎・小林芳行　2003　『ヲフキ遺跡－県営ほ場整備事業（大砂川地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－』秋田県文化財調査報告書第352集　秋田県教育委員会
澁谷正三ほか　1981　『宮城県営圃場整備関連遺跡詳細分布調査報告書（昭和55年度）』宮城県文化財調査報告書第75集　宮城県教育委員会
志間泰治ほか　1991　『宝ヶ峯』　斎藤報恩会
鈴木克彦ほか　1984　『亀ヶ岡石器時代遺跡』青森県立郷土館調査報告書第17集・考古－６　青森県立郷土館
鈴木隆英　1985　『曲田Ⅰ遺跡発掘調査報告書－東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査－』岩手県埋文センター文化財調査報告書第87集　岩手県埋蔵文化財センター
須藤　隆　1984　「北上川流域における晩期前葉の縄文土器」『考古学雑誌』第69巻第３号　pp.1－51（pp.265－315）　日本考古学会
須藤　隆　1992ａ　「東北地方における縄文時代貝塚の研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』第29集（共同研究「動物考古学の基礎的研究」）　pp.245－297　国立歴史民俗博物館
須藤　隆　1992ｂ　「東北地方における晩期縄文土器の成立過程」『東北文化論のための先史学歴史学論集』　pp.655－707　加藤稔先生還暦記念会
須藤　隆　1996　「亀ヶ岡文化の発展と地域性」『日本文化研究所研究報告別巻』第33集（別刷）　pp.1－40（pp.93－132）　東北大学日本文化研究所
須藤　隆　2003　「東北日本における晩期縄文集落の研究」『東北大学文学研究科研究年報』第52号（別冊）　pp.1－59（pp.30－88）　東北大学大学院文学研究科
須藤隆編　1984　『中沢目貝塚－縄文時代晩期貝塚の研究－』　東北大学文学部考古学研究会
須藤隆編　1986　『中沢目貝塚－第３次調査概報－』　東北大学文学部考古学研究会
須藤隆・関根達人ほか　1995　『縄文時代晩期貝塚の研究２　中沢目貝塚Ⅱ』　東北大学文学部考古学研究会
須藤隆編　1997　『岩手県花泉町中神遺跡の調査』　東北大学文学部考古学研究室・花泉町教育委員会
関根達人　2002　「沢上貝塚出土晩期縄文土器の再検討」『宮城考古学』第４号　pp.1－27　宮城県考古学会
芹沢長介　1960　『石器時代の日本』　築地書館
高木　晃　1999　『大芦Ⅰ遺跡発掘調査報告書－ふるさと農道緊急整備大芦地区関連遺跡発掘調査－』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第306集　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
高橋忠彦・伊藤攻　2000　『戸平川遺跡－東北横断自動車道秋田線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ＸⅩⅣ－』秋田県文化財調査報告書第294集　　秋田県教育委員会
高橋　学　1994　『白坂遺跡発掘調査報告書－県営圃場整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査－』秋田県文化財調査報告書第244集　秋田県教育委員会
高橋龍三郎　1981　「亀ヶ岡式土器の研究－青森県南津軽郡浪岡町細野遺跡の土器について－」『北奥古代文化』第12号　pp.1－51　北奥古代文化研究会
滝沢規朗・高橋保雄ほか　2002　『元屋敷遺跡Ⅱ（上段）－奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書ＸⅣ－』朝日村文化財報告書第22集　朝日村教育委員会
田中忠三郎ほか　1966　『縄文土器写真集　第一集（平内町槻の木出土資料）』　平内町教育委員会・平内町郷土研究会
手塚均ほか　1986　『田柄貝塚Ⅰ　遺構・土器編』宮城県文化財調査報告書第111集　宮城県教育委員会
奈良修介・豊島昴　1967　『秋田県の考古学』郷土考古学叢書３　吉川弘文館
西野秀和・岡本恭一ほか　1989　『金沢市米泉遺跡－小立野古府線街路改築事業に係る金沢市米泉町二丁目米泉遺跡緊急発掘調査報告－』石川県立埋蔵文化財センター

丹羽　茂　1980「恵比須田遺跡出土の土偶」『金剛寺貝塚・宇賀崎貝塚・宇賀崎１号墳他』宮城県文化財調査報告書第67集　pp.217－222　宮城県教育委員会
八戸市博物館　1985『縄文の美－是川中居遺跡出土品図録　土器編－』目で見る八戸の歴史２
濱田宏ほか　2003『泉屋遺跡第16・19・21次発掘調査報告書－一関遊水池事業関連遺跡発掘調査－』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第399集　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
林　謙作　1984「宮城県下の縄文期貝塚群」『宮城の研究　第１巻　考古学篇』 pp.109－172　清文堂出版
林　謙作　1993「曲田Ⅰと八幡－東北北部晩期前葉の土器－」『論苑考古学』 pp.223－263　　坪井清足さんの古稀を祝う会編
林謙作・高橋龍三郎ほか　1983『杉の堂遺跡－第５次発掘調査概報－』水沢市文化財報告書第10集　水沢市教育委員会
氷見淳哉　1997「晩期縄文時代における狩猟漁撈活動の研究」『歴史』第88輯　pp.1－26　東北史学会
福田友之・工藤大ほか　1988『上尾駮（１）遺跡Ｃ地区発掘調査報告書－むつ小川原開発予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書－』青森県埋蔵文化財調査報告書第113集　青森県教育委員会
福山宗志　2001「ツナギの沢貝塚」『宮城考古学』第３号　p.177　宮城県考古学会
福山宗志　2004『ツナギの沢貝塚－県道河南築館線道路改良工事に係るツナギの沢貝塚発掘調査報告－』涌谷町文化財調査報告書第６集　涌谷町教育委員会
藤沼邦彦・小井川和夫ほか　1989『宮城県の貝塚』東北歴史資料館資料集25　東北歴史資料館
藤沼邦彦・三宅宗議ほか　1995『石巻の歴史　第七巻　資料編１　考古編』 石巻市史編さん委員会
松本秀明　1984「沖積平野の形成過程からみた過去一万年間の海岸線変化」『宮城県の研究　第１巻　考古学篇』 pp.7－52　清文堂出版
松本秀明　1996「序章２石巻の地形環境」『石巻の歴史　第一巻　通史編（上）』 pp.7－13　石巻市史編さん委員会
松本秀明　2000「Ⅱ．新山崎遺跡周辺の地形変遷と遺跡立地の地形環境」『新山崎遺跡－蛇田地区農業農村整備事業に伴う発掘調査報告書－』石巻市文化財調査報告書第８集　pp.3－11　石巻市教育委員会
三浦俊成・榮一郎ほか　2005『向様田Ｄ遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ＸⅢ－』秋田県文化財調査報告書第392集　秋田県教育委員会
宮城県教育庁文化財保護課編　1977『巻堀遺跡』 一迫町教育委員会
宮本節子　2000『相ノ沢遺跡発掘調査報告書－畑地帯総合土地改良事業－』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第332集　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
村田章人　2000「羊歯状文の施文原則」『埼玉考古』第35号　pp.32－46　埼玉考古学会
森幸彦ほか　1988『三貫地貝塚』福島県立博物館調査報告第17集　福島県立博物館
谷地薫ほか　1992『曲田地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－家ノ後遺跡－』秋田県文化財調査報告書第229集　秋田県教育委員会
柳沢和明ほか　1990『摺萩遺跡』宮城県文化財調査報告書第132集　宮城県教育委員会
山口博之　1995『宮の前遺跡第２次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第19集　山形県埋蔵文化財センター
山崎忠良ほか　2002『元屋敷遺跡Ⅲ－奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書ＸＶ－』朝日村文化財報告書第23集　朝日村教育委員会
山内清男　1930「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄紋式土器の終末」『考古学』第１巻第３号　pp.1－19（pp.139－157）　東京考古学会
亘理弘ほか　1974「第一章　原始及び古代の遺跡」『若柳町史』 pp.1－114　若柳町史編纂委員会編